国分寺瓦之図　同図其二　五鈴鏡之図　城跡　躍山堺躍　同図　古塚　古屋敷　白鳥
大明神　総社　焼地蔵　古屋敷　三つ岐路　市田村古城　諏訪茶屋　焼地蔵図　本野
村　本野原　本野原合戦　僧力壽姫の霊に逢ふ　同図　六十塚　常心院　三川竹　羽
島大明神　古城跡　四国八十八ヶ所の像　犬頭明神　犬頭の糸　同図　鑄物師　古宿
村　古屋敷　花井寺　地蔵堂　船井塚　豊川村　千本天神社　古屋敷　水野八十郎墓　三明寺　辨賊天女
柳原　妙厳寺　本尊　塔頭　山門　篭堂　鐘楼　手水鉢　額堂　秋葉祠　福壽石　稲荷社　豊川林泉與之院之図　本堂並稲荷社図
義易禪師　僧源髙之事　馬の眞似する僧　龍雲山三明寺　辨財天女社　三明寺門之額
三重塔　入定の松　竹　養寺　三明寺馬場三橋牧野村之図　産物　柴屋宗長　下地村
古屋敷　定方塚　大村薬　星野里　星野大明神　星野池　古城跡　行明寺　片葉茶苑
行明寺　片葉茶苑　城屋舗　天王社　星野明神　羽衣松　神明社　古城跡　図　羽衣松　矢落松　悪僧に吊はれて迷ふ事　春渕御園　出雲
大明神　古屋敷　天王社　古塚　古屋敷　桶地蔵　和泉塚　稲荷社　亡者勘左衛門事
古城跡　神明社　古城跡　天王社　牧野村　古城跡　冠塚　牧野頼成墓　檜物師　麻
生田村　古屋敷　贄塚　弓作　鍛冶内裡三郎塚　牛蒡　楠本天神　一宮村　砥鹿神社
大貴命　三御子明神　津守大明神

參河國名所圖繪　寶飯郡之部

篠束郷　小坂井村より左五町許にあり

和名抄に当郡篠束（之乃都加）郷あり國内神名帳に從四位下篠束明神、坐宝飯郡と見へ又風土記殘缺に篠束郷公穀六百九十二束三毛田假栗五百六十三丸三字田と拳又釈増基の遠江紀行にその夜こふにとまるこのをりしのをかに人々とまりて云々しのをかは蓋しのづかの誤にはあらぬか大和物語にしのづかの駅と云へるも此所ならん契沖の名所外集（巻二）に当村を当國の名所とせり

貢松竹杉梅楊梅（ヤマモ）等又出桑麻儒絹等（風土記）

かくて此をとこみちのくへくだりけるたよりにつけてあわれなるふみどもおこせけるを道にてやまひしてなんしにけるときゝて女いとあわれとなんおもひけるかくきゝて後しのつかのむまやといふところよりたよりにつけてあはれなる事どもをかきたる文を

なんもてきたりけるいとかなしくてこれはいつのぞ
ととひければつかひの久しくなりてもてきたるにな
ん有けるをんな

大和物語　しのづかのうまや〳〵とまち詫し
君はむなしくなりぞしにける
とよみてなんなきけるわらはにて殿上して大七とい
ひけるをかうふりしてくらうと所におりてかねのつ
かひかけておやのともにいくになんありける

新六帖　神もさぞふりくる雨はしのづかの　逍遥院
うまやのすゞのさよふかきこゑ

篠塚

本多光臣云篠塚と云は伊藤茂平次と云家の裏に在高九尺許東西三間ほど北二間ばかり南三間程ある今マジノ山と云元は篠生茂りたるを今は枇杷榎の類生たり七十年前此山をすこし毀ちけるに其人病みしとぞ今も不浄の者此上に上らず

篠束明神

神名帳集説に云従四位下篠束明神坐宝飯郡篠束村産土神天王社々領十石例祭六月十五日神主本多出雲守社説に云長徳年中に天王を合せ祀ると云り三河国聞書に長禄二戊寅十一月十

四日篠束村天王社造営導師地蔵院又云ふ天正十一癸未年棟札に西郷久太夫正員と見へたり

古屋敷

今宿村地境に在二葉松に云西郷内蔵介俊雄同彦三と見へたり

西郷氏墓

同村の内宿村地境に二墓あり当村の城主なりしとぞ氏神天王社の棟札に西郷久太夫正員と二葉松に見へたり

糟塚

同村に在二葉松に云小坂井と篠束と地境に大塚二つ在小坂井の地なるを稲荷塚と云篠束の地なるを糟塚と云往昔より五月五日印地礫あり

○長山村此に入る

牛久保

東海路小坂井村より左に在

和名抄に宮島（美也之末）敬雄の郡郷考に云今牛久保長山辺を宮島庄と云り斯れば牛久保は和名抄に挙る宮島郷ならん其後行明郷と云しと見へて当所一色山正円寺大般若経奥書に三州行明郷一色山正圓寺六坊の内云々見ゆ其後一色と云しと見へて郡書類従（五百一十九丁）庚正二年（三百八十七年）造内裏役（三河国宝飯郡田三ケ所役）と見へ同書文安（四百年許）年中御番帳に四番一色刑部少輔殿と見へ同書文安（四百年許）年中御番帳に四番一色刑部少輔云々又栗原氏の水雄岡志（ニノ世ハ丁）に皇十二世足利泰氏子十一人の内一色宮内卿律師云深三州宝飯郡一色に住すと見ゆ又牛窪密談記に云明応二年（三百五十三年）牧野左衛門尉始

めて一色城に來り賜ふ道の辺天王（牛久保氏神）三社御手洗金色清水の窪溜に野飼の牛とおほしきが安らかに臥云々牧野氏瀬不にて出生の公達引連れ彼御手洗を通らせ賜ふに件の牛起上り道を開きて通しければ御供に候ひける石黒九郎兵衛是ぞ目出度御事かな斯の如く牛起に起させ賜ひ必ず國守になり賜はん事疑なしと申上ければ成時いつに勝れて打笑ひ賜ひながら稲葉へあからせけるに不意牛頭天王の小社ありさては当社の御護と御悦喜淺からず一色の城に入らせ賜ひ社僧牛頭山大聖寺住侶並に神主某御前に召れ成時仰出されけるは金色の清水の窪溜りに牛の臥居たるにより里の名を改むへしとて一色常寒（ようだ）を牛窪とぞ改めけるとぞ又享禄二年（三百十四年）牛久保民部亟（新次郎又石馬允とも云）新に城を築き牛窪を牛久保と改められけるとぞ

市

牛窪密談記に云牛久保繁昌の為六齊日の市日を定む七郷司西村藤石衛門畔柳次郎左衛門に白袴を免す此白袴と云は上司は白き練絹下司は白布を以て袴腰を白ふするなり又説教師に也頭を定め地代など免しける是は当時戰国なれば国々窠内の為ならんと見へたり当市の盛鶴は享禄の比と見ゆそれより斯く引続きて繁昌他に比すへき所あらずとなん

牛頭天王社

同村　在祭神素盞嗚尊祭礼六月十五日社僧牛頭山大聖寺神主神保氏

金色清水

同村　在三社産土神の御手洗也此清水の由縁前の牛久保の条合せ見るべし

御代縄手

同村　在牛窪密談記に云天正年中吉田城は酒井左衛門尉忠次守護す去に依て　大神君折々軍の御評議なと有けるとぞ或時御鷹居させたまひ云々牛久保稲葉へ出させ賜ひ爰をば何と申處ぞと御尋あれば星野の長辻田某御馬の口を取りながら御代縄手と申と答ければ御機嫌勝れて銀錢を賜ひぬ云々見へたり

長谷寺

浄土宗昔は城内の近所馬出しと云所に在しと云牧野家の臣武兵衛と云人建立す

本　尊　十一面観世音　此尊像は牧野氏守佛にて霊験新にまします其由來を傳へ聞に大和國長谷寺本尊と同木にて苏子國が作なり春日の御作と呼ぶ往昔城中馬出しと云処に安置す後城外に移すとぞ即当寺是なり

准坂東十八番

「このさとにちなみもあつきはせでらのおなじみそぎのみかげとふとき」とあり

鎮　守

鐘　楼

山本晴幸守本尊　東海道名所図会に云牛久保の長谷寺に山本勘助の守佛摩利支天の小像を安置す

牛頭山大聖寺

同村　　在無縁

本尊

牛窪密談記に云当寺は一色城中に在永禄六年十月二十八日今川氏眞より当寺へ証文出し

と三河國聞書に見へたり

一色刑部少輔五輪　当寺境内に在り一色古城の處合せ見るべし

今川義元位牌　当院内在法号天沢寺殿四品秀峰哲公大居士とあり

波多野金慶墓　当寺境内一色城趾本丸とおぼしき所に在金慶は文明九年其主一色刑部少輔を弑すと三河国聞書に見へたり

一色城趾

当寺境内は即往昔一色氏の城中なり牛久保旧名一色と云しは一色氏代々当城に居住するに依て起れる名号ならん五百年前一色宮内卿律師公深当城に在しこと前の牛久保の条合せ見るへし三河國聞書に云正長十年四百六年十月四日鎌倉に於て上杉安房守憲実謀反す一色宮内太輔直兼同刑部少輔時家彼憲実と合戦す鎌倉勢敗軍し直兼は討死し時家は遁れて三州に來り吉良俊氏の許に忍ぶ翌年鎌倉持氏自害せし後宮島長山村に來りて堡障を築く土人一色殿と称す然して館舎の辺を一色村と云後南北に分れぬ可敬云四百年前文安年中より三百八十年代康正の頃は一色刑部少輔当城に在しこと牛久保の条照し見るべし其後文明九年三百六十六年時家の家臣波多野金慶其主を弑して当城を奪ふ然して後明応二年三百五十年牧野左衛門成時波多

野金慶を殺して当城主となるとぞ大永二年三百七年牧野民部丞成勝一色城を改めて牛久保城と号すと三河國聞書に見へたり二葉松に云当城に一色刑部少輔其後桑野金慶其後牧野古白左衛門時のことせ住すと見へたり又三河堤には其後櫻井庄右衛門牧野家のことなり居住とあり当城は永禄十三年破毀せしと見へて渡辺政香の筆記に永禄十三年牛久保の古城も土手を摧き竹木を伐て原野とし稲垣平右エ門林と云処も根を掘返し畑となしいつしか昔を忍ふ草の云々見へたり

岸古屋敷

同村右裏に在古傳に云文明年中稲垣三郎重泰勢州より三州牛窪に移住すとあり二葉松に云稲垣半右エ門重宗法名道善居士とあり三河堤に云幼名藤助稲垣藤助重賢の子也牛久保に來り牧野右馬允貞成に寄て此に居住す初め牧野氏　大神君に降らすして諸所に於て合戦あり然るに永禄七年　大神君兵を率して八幡一宮に出張し賜ふ此時牛久保城既に陥んとす主家牧野を諫めて大神君に降らしむ大に之を褒美したまふ重賢文禄三年に卒す七十八歳武林傳に云稲垣は伊勢國の住人稲垣三郎重泰の後孫也文明中三州牛久保に遷居す云々又三河古傳記に云碧海郡野田村に稲垣氏代々出生して後牛久保に移居すと見ゆ可敬按るに重賢の孫藤助長茂慶長五年関ヶ原の役に牧野氏の陣に在て大に戦功あり同六年　大神君長茂を召して上州伊勢崎にて一万石を賜ふ其子根津守重綱始め和泉守重種と称す元和の役に敵兵十九人の首級を得て戦労他に超たり依之翌年越後國に於て二万石を賜ふ是其恩賞なり同六年亦二千石加恩せらる重綱より五代の裔孫信濃守昭賢に志州鳥羽城三万石を賜ふ爾來当城に在て

東武の藩屏たり

三河國一色館にて

三河藻塩草　大空の春の色まつ小草かな

○一色城の所へ出すべし

牛久保城

同村　在二葉松に云牧野出羽守保成息田三郎成元同右馬允成守とあり三河國誾書に云亨禄二年牧野出羽守保成長山の岸と云処に一城を築き牛窪城と号す一色城は同名民部丞成時住す云々三河堤に云和田野民部紀重成四代の裔孫牧野民部氏勝法名春興牛久保に住す其子牧野右馬允（新三郎と云ひし）貞成も亦当村に住す其子牧野右馬允成定（幼名新三郎）も同村に居住して今川家に属す永禄四年　大神君今川家を離れ織田家と御和睦なし賜ふ是に依て岡崎に背く者少からず爰に当國西尾城主吉良義昭も大神君を叛きて其身東條の城に移り西尾城へは牛久保の城主牧野成定を招て是を守らしむ同年義昭が族荒川甲斐守故有て義昭と不快世依之荒川既に吉良を離れ酒井雅楽頭正親に依て　大神君の麾下に属せん事を乞ふ正親之を達す　大神君許し賜ふ時に正親荒川を嚮道として西尾城を攻撃事甚だ急なり城将牧野成定拒む事能はず兵を東條に分ちて遂に西尾城を避て牛久保に皈る同年六月　大神君東三河へ御働の時今川氏真之を救はんとして軍を三州に出し小坂井佐脇御油一宮牛久保等にて合戦あり氏真遂に利を失ふて駿州へ帰る亦來東國の諸將悉く　大神君に降る此時新二郎成定も　大神君

宗　祇

に奉仕し大に軍功を　す後右馬允と改む永禄九年五月廿三日に卒す法名養條院敬誉皎月光輝其子新二郎康成後右馬允に改む父の家督を継て牛久保に住す然るに出羽守保成と遺領の地を爭ひ岡崎に訴ふ　大神君御印章を康成に賜ふ其後度々の戰功有に依て御諱の文字を賜る永禄十四年　大神君秀吉公の招に応し京師に発駕なし賜ふ時股肱の昵近たり天正十八年小田原陣に大に勲功あるに依て同年八月関東御入國の時上野國大胡城二万石を賜ふ慶長五年関ヶ原の役に　秀忠公に供奉して信州上田城に戰功あり同十四年十二月卒す其子駿河守忠成の代に至りて越後国長岡（武鑑に初長峰後に長岡とあり）七万石を領し今世七万四千石にて猶長岡に在城

岩渕夜話に云永禄六年正月十九日　家康公岡崎城を御立山中に御陣を成され同二十一日牛窪城へ御登なさる本多平八郎十六歳の時なりしに牧野内にて武辺の士牧野宗次郎と鎗を合せける也牧野家來稲垣平右エ門と申者分別を致し牧野に意見を加へ酒井左衛門尉石川日向守を頼み降参仕り牧野御旗下に成幸右馬允妻女無之に付左衛門尉嘗に成御譜代衆に劣らす此御陣までは御馬印白き四方の中に墨にて厭離穢土欣求浄土と云ふ文を書たるを御持せなさるゝといへとも牧野が金の扇の印殊の外見事なりと仰られて御所望遊れ御馬印となさる然れとも牧野手前にも其侭用ひ候様にと仰付られ小田原御陣まで牧野馬印も金の扇也又武徳集成（七十五丁）永禄七年三月　大神君東三河牛久保に働き賜ふ榊原隼之助魁出の功あり又（同書十五丁）柳宝飫郡牛窪の地には牧野右馬允成定同名出羽（保）清成同八太夫定成同民部成行等今川方として城を築き割據する処に成定が臣稲垣平右エ門長茂弱年といへとも思慮ふかく武略に長す

神原魁陰乃圖

頻りに成定を勧め酒井忠次石川数正に據て　神君へ降を請ふ処則御許容ありければ即牧野出羽同八太夫同民部は未だ今川方たりと雖も成定則岡崎方の色を立牛窪小坂井の両砦に神君の勢を引入ければ出羽を始め渥美郡吉田城に走る　神君敎令を施され岡崎へ御歸城ありし又家忠日記三卷永禄九年丙寅五月大三州牛窪城主牧野成定卒去して後嗣子なし牧野右馬允康成其族牧野出羽守遺跡を爭ふて訴論に及ぶ時に　大神君牧野康成に其遺跡を領知安堵の御書を賜はる　大神君水野信元に命して牧野出羽守を追放せらる云々

産女塚

同村　在三河堤に云永禄六年三月六日　德川公千五百余騎を引卒し岡崎を打立牛窪へ押寄賜ふ牧野民部丞成継は当時今川家の麾下なりしが岡崎に降らんの下心あれば病氣と云て嫡子右馬允成守を出羽守保成に差添て防がせける保成は大功の勇士にて城外拾二三町出張し火花を散して二時計挑戰す当時稲垣平右エ門が勇士十六人まで討死し其身も深手を負て引退く彼十六人の屍を一所に埋られしに塚の通にて月暗き雨夜などには産婦鳥の如くに経をわんず。故に里人呼で経づミ塚と云と見へたり

可敬按るに産婦鳥の如くに経をわんず。と云事未だ見及ばす櫻陰漫談上ノ三十七云世に産婦と云者有此は難産に嬰て以死をいたす女配偶して怪鳥となる是を姑獲鳥（ウブメドリ）と名くと云々又本草綱目四十九禽部に姑獲鳥産所化陰慝為妖玄中記日姑獲鳥鬼神類也衣毛為飛鳥脱毛為女人云是産婦死後化作故胸前有両乳喜取人子養為己子凡有小子家不可夜露衣物此鳥夜飛以血点之児輙病驚

癇及疳疾謂之無辜疳也云々と見へたり

千頁しとき病中の吟

とぶらふもうかむほとにはよもとはじ　稲垣氏

生たるうちにわれをとへかし

金山神社

榎の藥師

同村東の端右の方に在

經塚

同村　二葉松に云経塚又十六塚とも云又大乘妙典奉納とも或は忍花藻心が墓とも云

可敬云此塚十六塚と云るは蓋稲垣氏の家士十六人討死せし塚にはあらぬか前の岸古屋敷の所合せ見るべし

若宮

同村東の端左側に在祭神　例祭四月八日当村産土神三社の其一なり

牛窪密談記に云牧野古白入道或年四月八日此若宮へ參詣ありしに其主今川氏の許より使節到來して日当國渥美郡馬見塚村の辺にて要害の地利を見立一城を築くべしと命令承りて大に悅ひ家門の誉れ何事か是に加ん殊に当社へ參詣の折柄此吉事を聞くこと偏に当神の御恵

なりと取あへす庭前の柏葉にて神酒を献し其身も狭く三献を傾けぬ猶悦ひの余り家紋の菊
相を柏葉に改めしは此所以なりと古老の言傳へなり斯くて年々宗祇宗長の両子発句を詠し
て若葉に結び神前に備へ奉り牧野氏武運長久の祈念ありしとぞ是を若葉の祭と号す其後馬
市始まりて五月五日を限りに諸人群集せしとなん此御殿往昔城中に在て先主一色氏の魂屋
なりしが後城外に移し奉りて氏神三社にあがめ奉つる世俗に若宮と称すになん

法幢山上善寺

同村　在寺領二十石浄土宗鎮西派本寺当郡御津庄大恩寺に属す開山

本　尊

鎮　守

鐘　楼

当寺は往昔瀬木村に在牛窪密談記に云牧野成時入道して古白と号し瀬木村に住す当頃定
善寺と懇切なりし後当村に移して牧野越中守大檀那となりて是を助力す御朱印頂戴の時
上善寺と文字替りしとぞ
宮島傳記に云法幢山上善寺始は天台宗後浄土宗云々昔は知恩院直末也長篠御陣に本寺使
僧を寄られし其状に云
為御陣之御見舞能使者差遣候然於逗留馳走所委細口上に申付候
条不能詳候恐々謹言

三月十九日　　知恩院

定善寺　　待者中

一色山正圓寺

本　尊

当寺は往昔正長年中一色刑部少輔時家建立天台六坊一色村金山神社大般若経奥書に三州行明
郷一色山正円寺六坊内書之と見へたり

法臼山光輝菴

同村に在寺領八石八斗浄土宗鎮西派本寺同郡御津庄大恩寺開山　開基牧野定成

本　尊

牛窪密談記に云此本尊は勢州白子にて八幡宮の神体を乱妨するに依て大神君召上賜ひし
を牧野氏拝領して当寺に安置すと見へたり
牛窪密談記に云当寺は元大運寺と云しが牧野定成の法華に依て光輝菴と云

牧野定成墳

当寺境内に在法名養修院殿前典厩敬誉皎月光輝大居士神儀永禄九丙寅九月廿三日牧野民
部丞従來尊靈三代嫡女嶺秀院殿松誉栄感大姉貞享元甲子十月二十三日建立之

石燈籠二基

養修院殿　御廟前　寛政八丙辰七月吉日從四位下備前守源忠精と銘刻あり

山本勘助晴幸故居

同村に居住せしが故居の地未だ詳ならず山本勘助晴幸は本国八名郡加茂村の産なりと口碑に傳ふ今加茂村に山本氏と名乗て晴幸の末孫なりと云人あり牛窪密談記に云山本勘助晴幸は明応九年八月十五日三州八名郡加茂郷にて出生山本藤七郎三男山本源助と云へり兄は清七清助とて二人有源助十五歳の春牧野家士大林勘左衛門真次養子として牛久保に來り是より大林勘助貞幸と改む廿六歳故有て武者修行に出三十五歳の冬大林方へ立歸り父子の縁を断て（勘左エ門実子出生の故にや）山本勘助と成母方の従弟庵原安房守方に行て駿府に九年有四十五歳にて甲州晴信卿へ召出され知行十貫文賜りける世上にては二百貫文と沙汰あれども心得がたし云々又云勘助五十二歳入道して道鬼と号し五十七歳にして男子を生ず（名勘助）母は美濃守の女なり六十一歳の時同腹にして二男を生ず（名勘助、源次郎）両人とも壮年にして討死又女子一人あり甲府神職山本伊勢守に嫁す又妾腹の長子三州牛久保の農家に在（武徳集成巻三十七永禄七年の条牧野成定が臣山本帯刀は軍旅の道に長ずるを以神君に直勤し云々見ゆ蓋山本勘助の子孫にはすや考べし）云々見ゆ又東海道名所図繪に云山本勘助故居は宝飯郡小坂井の東牛久保村に在今第跡田圃となる牛久保の長谷寺に勘助の守佛摩利支天の小像を安置す此人は甲州源氏武田家の軍師なり初は此郷に栖で躬耕に耕し或時は列國に漂流して專ら軍学を鍛ふ又天文地理を曉し謀略を諳じ胸中に八陣を蓄て天下の安危を餘所に見て此牛久保に蟄す其頃天下廿四將の其一人甲州の大守武田大膳太夫晴信駕を枉て之を顧ること三たびに及び人を屏て

籌を精好すること日々に密也云々見へたりさて晴幸当村に居住せし事其余甲陽軍鑑（巻三十七）山本勘助は三河國牛窪より今川殿へ奉公の望に参ると雖も彼山本勘助散々夫男にて云々見へ亦外史に云（十ノ三丁）晴信羣山本勘助勘助三河人眇目瘡蹇嘗学兵於尾形某云々又貝原翁の東路の記に山本勘助か在所牛久保も岡崎の東に在又続皇朝史略（三ノ十二丁）晴幸三河人善兵策云々又伊南芳通の甲陽軍鑑評判に（三ノ十三丁）評に云此山本勘助は参州牛窪の産士なり云々見へて亦本国の出生とすさるを栗原氏の説には始近江國神崎郡山本村とし後には駿州の産士なりとすそは続玉石雑誌（巻三十七）に云山本勘助晴幸入道道鬼は明応二年癸丑五月五日近江國神崎郡山本村に生る（山本村は越知川の宿南にて中山道の東なり）近江源氏山本九郎時綱の末葉と云り中暑生年廿六歳心細くも唯独近江國を立出て先京都に赴き北山辺の知己を便り等持院の長老に身を寄て將軍家の奉公を望で薪水を給事すること老実なりければ長老の意に叫ひ寺中の諸務を管轄両三年に成にけり（已上山本氏系譜及山本村里人の口碑等持院功運長老の記に従ふ）同書（十三ノ十三丁）晴幸斯くては上杉の滅亡遠からすと思ひければ更に旅装して小田原を過て北条家の制度を窺ひ箱根を越駿河国に至る爰に当國府中の今川義元朝臣は今川四郎國氏六代の孫上総介範政朝臣の曾孫治部太夫氏親朝臣の三男にて母は中御門権大納言宣胤卿の息女なり將軍連枝の貴族と云海道第一の酋長（はたがしら）なり此家に仕へて年來の本意を遂けばやと推奨の縁を求むと雖も然るへき知己もなく終に行ともなしに三河國宝飯郡牛窪に至る時に牛窪の地頭牛窪弥六郎と云者あり其身さる分限の者にはあらねども頗る人を知の量ありけれは晴幸が志を憐みこれを扶持しけり然るに晴幸諸國を遍歴して古城跡を図し古戦場を

茅屋ヲ訪フ図
過牛窪山本道見旧居
白陽集
英雄僭匿野村傍 一出能教甲府施
今日経過旧居地 寒煙淡草帯秋陽
太田錦城老人

見て勝敗の機を察知し人数積兵粮割に精しき由甲斐信濃の國々までも聞へければ郡内の小山田備中守これを武田勝千代丸に語る勝千代丸心中大に悦ひ小山田を召具してひそかに晴幸が家を訪らわれまづ行軍治定の軍機を語らひさて主従の約をなし是より衣食を饋て謀主となす実に天文三年十二月にて勝千代丸十四歳晴幸四十二歳の時なり又同書十七ノ四原加賀守昌俊進出て申けるは古語に位定まりて然て後之を禄す又功を以て禄を與るとも承り候ひつるに山本勘助未だ何の功も立候はねば其位に定り申さゞるに百貫の禄を加へらるゝ事君の麁忽に似て其他の譏をまねく端にも候はんす覽と諫れば晴信朝臣さればとよ勘助未た三州牛窪に住せし頃我は十四歳の時小山田備中守と共に遙々三州に立越彼者に兵法を学び國々の風俗弓箭の意地要害の絵図を調へさせ其後駿河に移らせて今川家の消息を窺せ関東の機密を籌らせたりし功労九年に及ぶ二百貫更に惜むに足らず今又晴幸を用る所有が故に呼寄たり怪むことなかれなど見へたり斯れば其出所を詳にせす後人の考を俟つのみ

當駅本町山本氏の云豊川村に川口氏なる者あり往昔郷土なりし当村光明寺に川口氏の石碑あり其人生國は近江國にて窄人して当村へ來りしとぞ然に山本勘助は此川口氏を便りて当國へ來れるよし土呂村大橋氏の旧記にありと云リ

玉石雑誌に山本氏は近江國とす是と符合す考ふへし因に云大橋氏は川口氏の兄弟の内より彼所へ養子に行しとぞ此大橋氏は山もゝの御朱印と世に云へる有そは　大神君何れの軍にや此土呂なる大橋氏の許に來り賜ふて身をかくし賜ひぬその時大橋氏山もゝ取て木の上に

居かゝる処に敵兵尋ね來りて大神君の行衛を問ふ中田を指して落賜ふ由答ければ敵兵彼中田をさして追行遂に危き場所をのがれ賜ふとなん其時中田八町御朱印賜ひけるとぞこれを俗に山もゝの御朱印と称しけるとぞ

可敬云玉石雑誌続々の中なりしか山本勘助は駿河國と云一説を出せり予写し取りて茲に張紙せよとものせしにいまだならず此巻を見て其上にて傳を書すべし

過牛窪山本道鬼旧居

白湯集　英雄僭匿野村傍（一出能敖甲府強　能使甲州開土疆）　今日経過旧居地　寒烟涼草帶秋陽

錦城老人

二見道

同村の中北金谷村西の端街道より左の方

三河藻塩草に云上古は宝飯郡長沢村関屋と云処に二見道ありしが中古御油の下に移りて東海道下向に左に入本坂越の別れ道なり云々又渡辺富秋の続義考に云二見道は宮道山の麓なり此道より本野原を経て豊川を渡り嶺野に至り潮見坂高師山濱名を経て濱松に出るは上道なり又二見道を分れて宮路山峰続きに嶽の麓をよぢて國府に出引馬野（可敬云佐脇原より本野が原かけてすべ云）を過て志之須香渡にかゝる是を下タ道と云遠江國にて出逢事古今同じ宮路山は二見道の南なり云々又太田白雪の云牛久保に二見塚と云あり蓋二見道の遺跡ならん又刪補松に云二見道不分明赤坂と八幡の間を云赤長沢なる本坂越の道と云或は牛久保に二見塚と云あり又八幡西明

二見道之図

寺の前とも云又貝原翁の東路の記にも云古は三河の二見道とて別路有と未は一つになるとかや長明は是より本野にかゝり豊川に行と見へ阿佛は是より渡津にかゝり志之須香の渡を越ると見へたり（可敬云いざよいの日記に志之須香の渡越しこと又東海道名所図絵に云二見道は御油より左見へず其頃渡は絶へしならん）又東海道名所図絵に云二見道は御油より左へ別れて八幡野口を経て本野が原に掛り豊川に至る是古の海道なり又万葉考槻落葉に云和名抄碧海郡呰見（アタミ）郷あり二見欤と云へり又岩瀬尚則は二川に由縁なき欤云々なと故人の数説あれど非ずかしそも二見道はまづ何れの頃にありし別路にやと其時代も考索せず故に今古の書籍を乱雑して地名の序次を聯ね或は古典に寄ざる臆断を挙て論ぜしゆへ其説く処紛々として大綱を得す可敬倩考るに二見道と云は往古当國に名高き別路にて此歌万葉集（巻三覇旅）八首の中高市連黒人の詠なり同考に云黒人の傳詳ならず云々万葉集は高野御時（孝徳天皇天平勝宝の時を云へし）橘諸兄大臣撰し賜へりと世継が物語に見ゆされど高野の御時よりも前　聖武天皇の御時ならんと思ふ事あり（下暑）　聖武天皇神亀元年より今世まで年歴凡千百廿四年集中の歌は夫より又先と見るへし斯れば其時代に近き古書の地名を以て考へ定むべきにこそ二見道を稽ふるに太田白雪併に刪補松に挙し二見塚や其旧跡ならん其はいかにと云に二見塚は牛久保の地脉にして北金谷村西の端往還より三町許北の方に二見塚と（二葉松に二女塚とあり土人はフタミ塚と云なり）に在小き塚なり往昔九百年代より以前の街道は赤坂駅西南に当りし宮路山（釈増基の遠江紀行亦遊馬楽の貫川に出増基は村上天皇の頃の人にて年歴凡九百余年になりぬ）を越今の赤坂駅（其頃赤坂はあらす今仮に其名を出すのみ）北裏の山添にかゝり引馬野（佐鵜原より本野原かけてすべ云云委しくは引馬野の条を見るへし）を過二見道に至り又矢より道を右に折て渡津駅（今の宿村より小坂井かけて古駅の跡なり彼所を披き見るべし当駅は延喜式に出て千年代よりの宿駅なり）を経て志之

須香（釈増基の遠江紀行に出）を渡り高足山（釈増基遠江紀行又和名抄高蘆郷あり）を越遠江國猪鼻駅（延喜式に出て千年代よりの宿駅なり）に出同國濱松に（和名抄に出て千年代よりの郷と見るなり）至る亦一道は直に豊川（和名抄に出て千年代よりの郷名なり）緑野（康平四年和泉式部の歌あり年歴凡七百八十余年斯れは千年代よりありしならんか）和太（和名抄に出て千年代よりの郷名なり）などを経て遠江國板築駅（文徳実録に出て千年代よりの宿駅なり思ふに今の三ケ日か）にかゝりて濱松に至る二道此に至りて會合す猶委くは雑部海道の変革の処を見るべし扨右に挙る処は皆千年代よりの地名ならん又道路の序次も順行を為かゝれは彼二見塚は蓋二見道の遺跡ならん其は猶後人の考へをまつのみ

萬葉集三　妹母我母一有加母三河有二見自道別不勝鶴（イモ、ワレモヒトツナレカモ、ミカハナル、フタミカミチユカシ、カネツル）　高市連黒人

同一本　水河乃二見之自道別者吾勢毛吾毛獨可毛将去（ミカハノフタミノミチユワカレナバワカセモワレモヒトリカモユカシ）

金山権現社

鍛冶村に在祭神　　例祭八月朔日当村の産土神とす神主

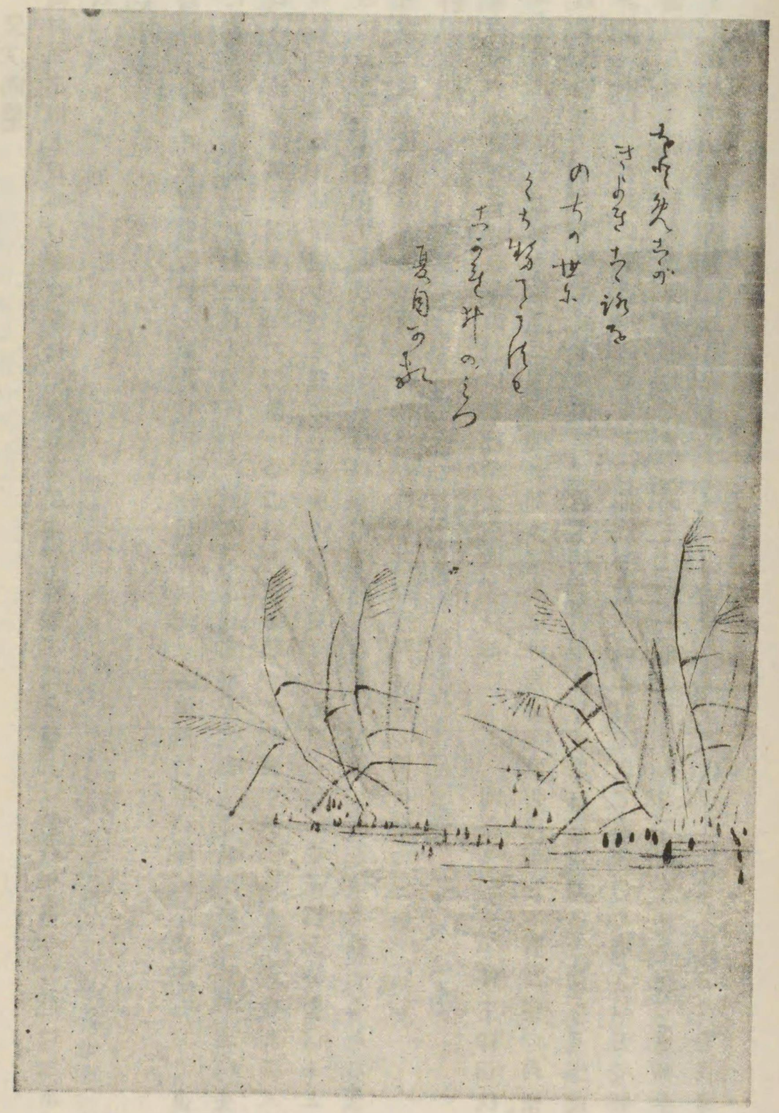
國内神名帳に従五位上加治天神宝飯郡に坐とあり蓋此社ならんと敬雄云り太田白雪の梓神子に牛久保古過云帳永禄五年の条に祐慶加治村眞木某とあり森村天王社の鏡銘に寛正五年甲申十一月十五日中条郷北鍛冶村云々とあり

古屋敷

同村在二葉松に云ふ眞木越中守定吉同善兵衛

眞木越中守墓

コがレ井
慕夫井



同　又次郎墓

同村三本松と云処に在二葉松に云眞木越中守同又次郎の墓あり驗の松ありて世に三本松と云

嶋夫井

同村　在牛窪密談記を取意して云永禄十二年　大神君当国の降人を先隊として遠江國に進発為賜ふ此に牧野右馬允の昵近に眞木又次郎岩瀬林之助とて若者ありけり衆に先達て桃み戦ふ処眞木氏深手を負て引兼けるに岩瀬之を助けて故郷に飯る而して幾程もなく黄泉の客となりぬれば親族なげき怨めとも更に其甲斐なく野辺に送りて法諱を淨賢信士と号すさて眞木氏人知れず通ひける女ありけり偕老同穴の契り深かりければ悲歎やるかたなく或古井に身を投してともに冥途の旅におもむきぬ無慙と云も愚になん

熊野権現社

東海路小坂井村より左長山村に在社領六石四斗祭神　例祭　神主神保氏

牛窪密談記に云此に東海道三河國宝飯郡牛窪郷は往昔秦氏熊野権現を本野が原に有常寒長山里に勧請す頃は　崇神天皇の御宇紀州牛門戸の湊より徐氏古座次郎舟を泛へて当国御津澳の六本松と云処に來る抑土地の形容前は海後は磯山打続きて豊饒の土地なりとて則此に御館を築き賜ふ爾來土民尊敬して恵を蒙ること少からすなんさて徐氏は秦國の姓此子孫秦を以氏とす三河國聞書に云亨禄元戊子年長山村若一王子造営棟札に云大願主牧野民部丞成

勝と在ホ宮島傳記に云牛久保長山両村の氏神若一王子権現は牧野家御先祖の氏神たる故を以て造営の寄付を頼み聞んと寛永十四年丁丑の年神主神保氏内藤氏の両氏蹤後國長岡に詣て牧野忠成侯の家臣稲垣氏に依て之を許るに依て本社幣殿等再建を為し賜ひぬと見ゆ又三河国聞書に云宝永七庚寅年吉田城主牧野大学光輝菴並に当社神主を二の丸へ召れ長山村権現へ高六石四斗御寄附と見へたり

鰐　口

御廣前に懸る銘に曰大永五年九月三州宝飯郡牛窪郷願主利兼敬白と彫刻あり

御手洗

延宝四年渡辺氏当所の御代官たりし時当社の境内に一の池を穿ちて水を留て農業の用水とせり

辨財天女

延宝四年渡辺氏此れを造立す元は金像の辨財天女なりしを盗賊の為に亡失して今木像となれり牛久保岩瀬氏是を寄付す

洪　鐘

天文以前の洪鐘なりしが　比鑄直して新になりぬとぞ三河国宝飯郡長山郷氏神若一王子洪鐘神宮足立四郎兵衛大工南鉄屋宗次と刻あり

牛久保熊野権現の欅の下にて

三河藻塩草
三河刪補松

花ざかりこゝろもちらす一木かな　牧野古白
おほろげながらあり明の山　家長

南岸山東勝寺

禪宗本寺豊川妙嚴寺長山村に春虎と云ふ道心者田ヘリの畑に住居す大風を厭ふて今永荒地に室を作る寛永年中天下一統寺社御改め有之其節牛久保に移る

本　尊

熊野新宮　太田白雪の続柳蔭に往古当國三熊野を模写す新宮は長山東勝寺とあり

光明寺

本　尊　三河國聞書に云文明二年寅歳十一月十二日三州長山村光明寺藥師再興と台座に書付あり又云天文十一年長山光明寺敬山寂開基とす

天王社

同村に坐祭神素盞嗚命例祭　当一村の産土神とす神主三河国聞書に云慶長十九甲寅年四月二日長山村氏神天王上菅頼主深田次郎左衛門とあり

隣松寺

本　尊

若子山法信寺

同村に在一向宗苔牧野家に榊原遠江守と云士あり其人の自菴なりと云或云同村若子に高橋久藏と云百姓の別家なり吉良庄青野村慈光寺旦那なりしとぞ久藏の子久左エ門といふ者若子町住居の節法信寺と名けしとなん

本　尊

台比山淨福寺

同村に在一向宗吉良より來れりとぞ慶長九年彼宗門御裏書に吉良東条庄寂言叟とあり又同年の長山村古本帳にも寂言とあり其後寛永の御水帳には淨福寺とあり

本　尊

太子山養樹寺

同村に在高田宗

本　尊

松色山了圓寺

同村に在淨土宗御代官鈴木八右衛門了圓居士の廟所有

本　尊

政直山庚申寺

同村に在此堂は牛久保浪人水野権之助建立なり勿論庚申堂なり其後元禄年中山号寺号を付て禪宗となる水野権之助は豊川村領主水野八十郎の子なり父八十郎は悪人にて家臣の爲に

紙せられ其子權之助は当村に牢人せしとぞ

本尊

補陀山善光菴

同村に在黄壁宗永禄年中知山法師の建立なり

本尊

竹村半兵衛智墓

常山紀談に云関ヶ原の時三河岡崎の田中兵部太輔吉政の子民部少輔長胤は父大坂方に同心たると云ふを聞て宇都の小山を忍出居城岡崎に歸りけるを國清公きこし召竹村半兵衛を召我吉田に飯る頃まで民部を牛窪におさへとゞめおけと仰らる竹村こは安き事には候はねど もいかさま計ひ見候はんとて道に出向ひ鉄砲の者を百姓の家に隠し置具にしたくを云含め其身は山の狭みに出て待処に長胤來れり竹村云池田三左衛門尉ひそかに申せと申す事の候て是に出候と云へは長胤馬まわりの人を遠さけられしかば竹村しづかにあゆみより別の子細も候はずおしとめ申せと三左衛門下知したるよと云もあへず左の手にて長胤をひしと捕へ一尺許の脇差を抽て長胤におしあてたり従者どもこは口おしやと怒りけれともせん方なし竹村詞をかけ近くよられなば我は殺さるとも民部殿をさし貫き申さん只おしとめ申すのみにて別の事は候はずと呼りける所々百姓の家に伏置たる鉄炮の者共馳集り鉄炮を長胤にさしあてゝ竹村を討んとならば忍民部殿をうち落申さんと聲々に呼りけり長胤力なく竹村

に從て百姓の家に入ればおし止て四方を堅く守りけりかくと東照宮聞召父既に味方なる上は許し候へと仰られしかば長胤即出られける後に公に遭て手あらきありさまにも合せ賜ひけるよと云はれしとかや

三河國聞書に云弘治二丙辰年二月二十九日今川義元証文を出す

春光塚

同村に在岩瀬嘉竹墓法名春光嘉竹岩瀬屋敷の裏畑中に在と二葉松に見へたり

加藤氏墓

同村に在由縁未詳

今日坊塚

同村西野に在りまた山伏塚とも云と二葉松に見へたり

鯉塚

同村岸通に大塚二つ並ひ在往古此辺海濱の時鯉を釣しとそ故に鯉塚と云と二葉松に見へたりされど鯉は斯る入海にてとれる物にはあらず

平井村

東海路小坂井村右の方に在渡辺政香云元祖彦坂九兵衛は平井村出生也武德集成五十に長沢松平康忠君に賜ひし印章の内六十貫文平井とあり又同書三十永禄七年吉田軍の条牧野八太夫定成は神君へ降参して後三州宝飯郡平井郷を賜ふ後山城と称す云々

古屋敷

同村に在二葉松に云中根五郎太夫清忠小坂井八幡宮棟札には中野弥三郎正宗と有世子孫井伊公に仕官して三千石を領すと見へたり

又元祖彦坂氏又牧野氏のこと前の條と合せ見るべし

坂田山東林寺

同村に在浄土宗鎮西派本寺　開山

本　尊　藥師如來　三河雀に云平井村坂田山東林寺に鎮る本尊藥師佛なり無縁地源頼光の勇士坂田公時が守本尊也寺前往來の舟帆を下ざれば舟を覆へす今は堂の向を昔てさわりなしと見へたり

又西の畑中に坂田社本墓あり未詳

兎足神社旧地

同村田圃の中に在兎足神社の旧地なりとて田中に松林あり

菱木野天神

同村に在祭神　例祭九月十五日神主山本氏当一村の産土神とす

神名帳集説に云従五位上菱木野天神宇飫郡に坐日色野村天神社長沢村松平氏永禄年中の古文書に菱木野村とありとぞ

冨士見茶屋

東海路の中下五井村に在小坂井村と吉田駅の中間なり晴天には此所より冨士峰を望む海道

冨士を望の始めとす

柳　橋

同村東の入口に在因静和尚吉野の道記に云　柳橋とかや云処の道よりは少し松原に籠りて柴の戸の幽なるあり梅の花中垣の外に匂ふ入て見るに老僧経を読みて居ます予も小柴打しきて休むかたみにきしかた行末のことなどかたる老僧の日々世の人に問はるゝ事をいとひて此処になん住とかたりとうとく哀におもふ折ふし梅の香軒端を過る

「しられじとむすびし庵の梅の花匂ふは人の心にも似ず」　老僧うなづく又曰くくたれる世の中にはわきて僧業のおとろへたる見る目もくるしと云て詩を請ふ依て賦す久謝風塵客行吟山水迂高僧還解事薄俗動談禪丘壑人間外蓬蒿吾輩前靈山今不悅長夜憶金仙

都に月比在て東へ下るころ冨士見茶屋と云ふところより

ふじ見ゆるときゝていそぎつゝ行く道にて

なつかしき冨士を見たさに走る橋はしる時雨の　眞顔

雲なかゝりぞ

経　塚　同村の中海道より左の方百歩許に在玄超院より築きし経塚なりとぞ

塚　同村の中経塚より東南の方に在往昔虚無僧刃傷に及びて死去せし故此に埋しとぞ

山王権現社

同村に坐祭神　例祭二月十一日弥冨中島三郎右衛門当一村の産土神なり天文年中の

棟札ありとぞ

役行者　境内に在

一葉松　境内に在土人云辨慶手植の松なりとぞ此松かるゝ時は外の松にうつりて二葉松も心ず一葉になるとぞ

通月山満光寺

東海路下五井村の左り糸郷村に在寺領三石禪曹淌派本寺額田郡深溝村本光寺開山明全和尚

本尊

本多信重塚

同村の万光寺の西南に一株の大松あり蓋信重の塚にはあらぬか三河堤に云本多彦次郎信重は碧海郡の人土井村に住す享禄五年天文元年世下地合戦の刻の御油縄手にて討死す時廿五歳三河雀に云下五井縄手にて本多豊後守廣孝廿三歳にて今川軍勢と一戰して討死とあり寺院奇談に出る処是に等し

下地村

東海路に在て吉田駅の入口なり吉田名蹤綜録に云当村は宝飯郡巽の境に在りて豊川を隔て東は八名南は渥美両郡の境なり旧名下河地と称す將軍足利義持卿の時代応永の頃下地と改む予按るに往昔此辺入海にてありしが次第に陸地となりて豊川の流れの下に出來ぬる村故に下河の地と云心にて下河地と名付しものならんと見ゆ何によりしものや

山伏塚　同村に在四ツ谷より北方百歩許畑中に在其由縁を知らず

稲荷社

同村に坐機杼具池より三町許南田圃の中に在祭神倉稲御魂命世里人御社宮司と称す額は正四位参正親朝臣の筆なり往昔大松樹ありて是を以神と崇む延宝八年申の二月の大風に倒れしならん享和三年碑を建ると吉田綜禄に見へたり神主冨安氏

抑往古此地海滷而自墾田圃始生一松樹居民祀祫頒稲荷神霊其清陰以祈年矣爾來歴霜幾多株根枯朽矣恐失其旧跡因立石以記之

植田子義

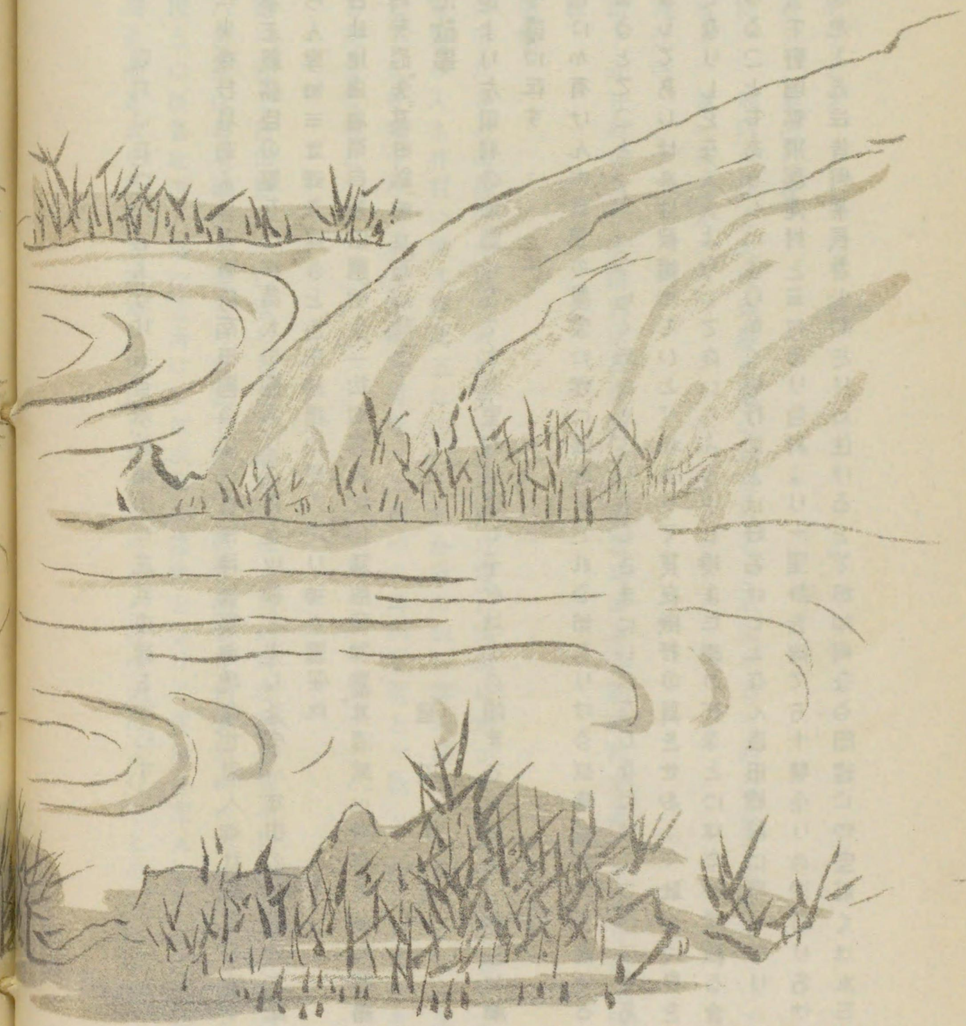
機杼具池故事

東海道より左同村の地郭に在て大蚊里村に近し予が幼少の頃までは廣かりけるが漸々に埋りて今讃に存す

何の世にか有けん大蚊里の農家に嫁に强面あたれる姑ありける或時嫁機杼を織けるが日数たちぬるとてことゝにつらく云ひやぶりあしさまにいひなしなにはにつけてもあたり日頃にましてあしければ彼嫁心もいとゞ世まりて其夜機杼の具をせおふて此池に身を投けむなしくなりしとなん夫よりして夜いたふふけし頃また雨の夜なとには今も機織る音ほのかに聞ゆることもありしによりかく機杼池とは呼名けしとなん吉田綜禄に見へたり

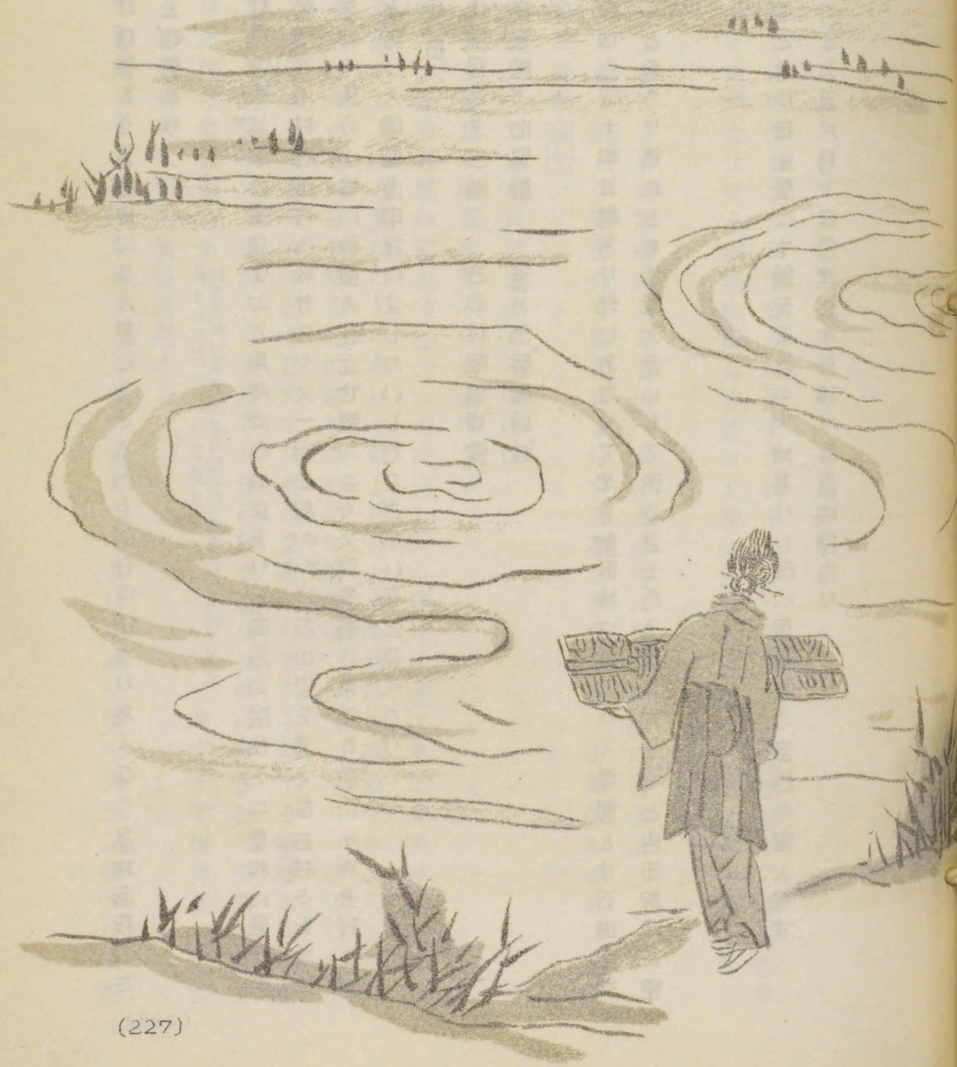
因に云下野国那須郡滝村と云処あり当村より一里許を隔て方十間余りの池あり名けてあやおりが池と云往昔何某長者此わたりに住けるとぞ扨如何なる由縁にや空能くはれたる日池

機杼
池
之
事



池のおもも
なやおり
こたるは百の水

東竜園



辺に來りて聞けば機おる音聞ゆになん是にあくる処と同日の談なり友人なる髙林海荻したくく見聞せしと物語れり

石田里

石田里とは同村の中城谷津（シロガイツ）の事なりとぞ其処に古城跡あり石田淨玄居住と二葉松に見ゆ東海道惠支路の鈴に下地村石田村小坂井云々又一自玉鉾（元禄印本）に石田里を過て左右村々と並松年ふりし海道を行に東の山陰に祇園の社立せ賜ふ云々又貝原翁の東路の記に小坂井村云々石田村下地村とあり又明暦道中記によしだいしだこざかいなど見へたり

宿ニ石田

谷口山詩集　佳境留人夕日斜　石田村裡宿煙霞
夜來枕上心弥静　簷外無聲独聽蛙

城趾

城谷津に在当所は人家十四五軒あり乾にあたりて池を型取坤は堀ありて要害とす石田淨玄と云者居城せしと云へり然れとも年歴久遠にして孰の武士たる事を知らすと吉田綜禄に見へたり

牛頭天王社

同所より三町ほと北に在此里に牛頭天王社ニケ所ありし故に里俗東の宮西の宮と号す土御門院元文二年乙丑六月十五日建立す祭神は素盞嗚尊なり

秋葉権現小社

同村聖現寺より二町程西の方に在宝暦十四年千之助と云者秋葉権現の霊夢に依て晨朝吉田川の流れに望で彳は河上より小祠流れ來る夢想の正敷に驚き急ぎとり上て宅地に勧請す

聖霊山聖現寺

同村左側に在淨土眞宗下野流髙田派本寺勢州一身田専修寺に属す開山行円上人
梅園の寺社鏡に云献上一東本右住職専修寺御門跡より申渡有し拜領時服二住職御礼無之○年頭御礼回御次一同○御暇（柳老）

本尊　阿弥陀如來　立像四尺許聖德太子の御作
親鸞聖人像　左の脇檀に安置す聖人の御自作なり
開山行圓上人像　右の脇檀に安置す当山二世行光上人の作此木像は先年津浪の節同邨前芝村の海に漂流せしを里人鳶口にかけ奉りて引上たりとぞ今鳶口の跡ありとなん

鐘樓　本堂より南の方に在天和三年改鑄享和三年の刻あり

聖德太子堂　本堂より申酉の方に在長四尺十六歳の立像にして太子自作の霊像なり毎歳二月廿二日法事執行ありて参詣群をなす慶長九年丙辰当山十三世行実寺を今の地に移すの刻み彦坂平六郎の老母如清廿月七日死去寄付の打敷ありと（神君の御代官彦坂九兵衛光正の妻なり元和七酉五）建立す其後貞享二年乙丑吉田城主小笠原壹岐守長祐朝臣再建す

凡聖德太子の霊場は衆人の知る処にして記に遑あらず当山所納の領も此太子堂へ伊奈備

州忠次の花押を寄る処を始とす其由緑を考ふるに永禄七甲子年吉田の城主小原肥前守鎮実を攻賜んとて酒井本多鈴木渡辺榊原蜂谷牧野阿部石川小笠原などを始めとして其勢都合三千余騎五月十三日赤坂に陣取して仁連木の戸田尚舎が相図をこそは待たりける　神君は猶も牧野右馬允康成をして先鋒に進ましむ明十四日　神君旗を下地に立賜へは喜見寺の塞よりは蜂谷半之丞松平主殿介に連木よりは戸田尚舎下地口よりは　神君自攻賜ふしかれども城兵こゝを専途と防ぎ戰ひける故其日の軍も引取ける　神君は則当寺を御陣営となし賜ふ即聖徳太子の宮殿にして天下太平の事を丹祈を柚て給ふ或夜御夢中に双扇を感得し賜ふの御奇瑞あり夫より一扇を以て御馬識とし牧野康成先陣に進む一扇は当寺に止めて霊法となさしめ賜ふ則吉田城程なく御手に入こそ奇特なれ（扇の馬識数説にしてこならずこは別考あり）

御納涼竹の跡（太子堂の後掠木繁茂する処を旧跡とす永禄七年神君御陣所の節御涼竹の亭を建させ賜ふと云ふ）

御風呂屋の跡　本堂の後竹藪に古木一株あり　神君御陣所の時の御風呂屋の跡なりと云

辨財天社　太子堂の北に在当山の鎮守たり社地池あり蓮多く鯉鮒亦多し

祐泉坊　当寺境内にありて即塔頭たり

薬師堂　祐泉坊の地郭にありて則支配す夫此薬師如來は往古聖現寺天台宗の時の本尊にして開山慈覚大師の作なりと寺記に見へたりしかれとも他邦の口称には鳳來寺峰の薬師同本にして利修仙人の作なりと傳へたり実に奇代の古佛にして開扉拝見するに心肝に徹し自然敬礼せらる諸人霊驗を蒙る者少なからす開山恵善後恵敬と改む永禄七年子五月

神君太子堂御陣所の節吉田の城中に大原源之丞と云勇士ありて能く射術に達し遠矢を射て神君の軍勢を悩もければ　神君御覽ありて健氣の者かなとて矢根十本酒一樽を城中に送り賜ふ其後眞光坊と祐泉坊恵敬と倶に御書を携て和儀を調ん為城中に至り赤飯など城内にて馳走ありしこと寺記に見へたり

眞光坊　庫裏より南三十歩許にありて塔頭の其一なり

本尊　阿弥陀如來　立像三尺聖徳太子作

銅鐘　享和元年山本貞晨銘之の彫刻あり

聖霊山の濫觴は慈覚大師開創の淨地にして原当國八名郡吉祥山の傍甲斐にありて今水精舎の助法務台嶺の瀆支を探り横河の流を汲し一梵刹なり其後此地に移す粤に大職冠藤原鎌足三世房前大臣の五男魚名公より十二代下野権守行方の二男大河戸四郎藤原行平の息男隨信房行圓上人住世の頃親鸞聖人專修念佛を諸州に弘め濁世末代の悪人を普く済度し賜はんが為に遥に辺鄙の関東に下り賜ふ二十余年御化益の間に時機縁熟して下野國芳賀郡高田に御堂を建立し給ふ首尾満足して六十一歳御順路の砌四条院天皇の御宇天福三年乙未正月廿一日当寺開山隨信房行圓上人不思議の霊夢を蒙り御弟子行光を伴ひ聖人を迎て御逗留の間他力易往の要路五乘齊入の眞門を開きて懇々教化ありければ行圓上人一向專修の易行は末代応機の法にして常没の凡愚を救に足れりとて隨喜感歎のあまり立所に天台の旨趣を改めて淨土眞宗の旨を會得し凡夫直入の信心を諒解せしむ此時親鸞聖人心

よげに其機の速なるを感し賜ふ直旨面授の紀念として六字九字十字の名号眞筆を下し賜ひ彼三件の名号の間に画工に命じて弥陀釈迦の尊像其外三図念佛傳來の祖影を画かしめ殊に上人の眞影は自ら御筆を染させられ尚又相契の印末世の亀鑑にして御影の後に行円行光師資の形像を図せしめ行円上人に是を給ふ安心授受の図題して光明品と号す爾來今に持傳へて毎歳霜月廿七八両日諸人結縁の為に繙て之を拜礼なさしむ他宗を論せず遠近の貴賤参詣群をなす其余天台宗よりの靈佛什宝挙るゝ遑あらす猶委くは下地綜禄にありと吉田綜禄に見へたり

芭蕉塚　当寺境内太子堂の南側にあり芭蕉翁貞享四丁卯歳東行の時此郷茶店にて吟せし所なり世人松葉塚と号す明和六年吉田俳友の輩芭蕉風雅の跡を慕ふて碑石を建つ

ごを焼て手拭あぶる寒さかな

往昔芭蕉翁此地に杖を停て残せる一句あり爰に往けるたれかれふかく蕉門の風雅を尊ふあまりはるけき近江の義仲寺に詣て古翁の墳の土を取來り此所に塚を築此石を立白隱老師に三大字を請得て石面に写し猶いつまでも旧蹤の紛なからん事を思へり其事成て此趣を石背に記さむ事を予にもとむ吁夫遠き世にかく慕ゝは翁の徳にして斯く慕ふは其人々の誠なるをや辞得ずして拙き筆を採も不朽の盛事に感あればなり

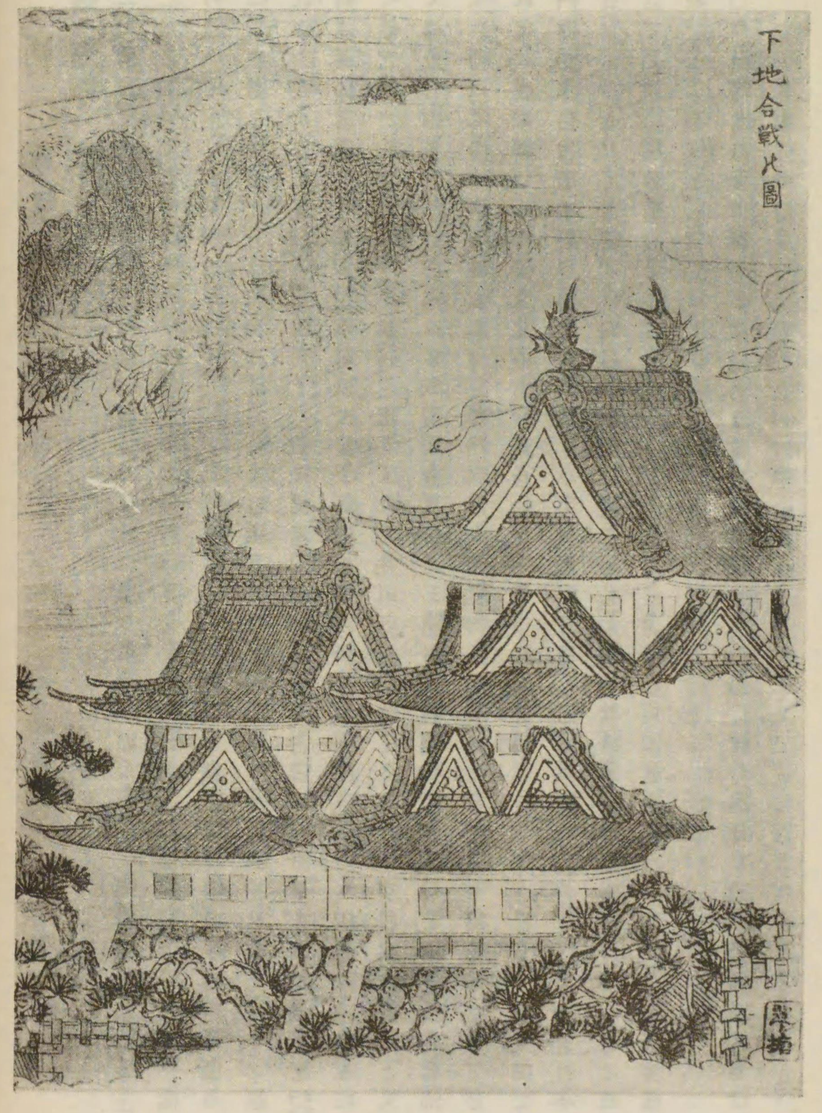
明和六歳次己丑夏四月　　尾陽隱士　衡世有誌

今橋の旧地

三河国古年代記に下地村は吉田城より西北に当りて且下地の方にて関屋口と云處爰を古渡と云又下川地と中在家あり往昔爰に土橋あり其を今橋と云なと吉田綜禄に見ゆ抑今橋の号の物に見へしは文保三年（当今まで凡五百廿余年）の輿書有沙弥明忠が作の郢曲撰要の中に新今橋の今更に又立歸る橋桂とあり斯かれば古くより橋ありし事顕然なり其後断絶せしと見へて織田眞記に天正十年壬午（三百六十余年許）夏四月十八日夙出吉田（公信長）騎（馬渡）吉田川（とあり）されと信長記（十五ノ廿三）寄則は其頃當橋ありしと見ゆ其は天正十年信長公甲州より歸陣の条に六田矢作川などにも建く橋を渡されければ（中略）諏訪を出てより大井川の外には足をぬらさず目出度さよと又云斯て信長公御上國に赴き賜ひしが駿河遠江三河三箇國の内道を作らせ石を除き断橋を続云々又三河古老傳に吉田城主酒井左衛門尉定次君豊川往還船渡へ始めて土橋をかくるなど見ゆれば一旦中絶せし今橋を其頃再び架せしものならん又此橋を今の地へ移しゝは池田三左衛門尉輝政君吉田在城の頃にて天正十八年の頃なりなと吉田綜禄に見へたり当橋を新今橋と云しより起りて吉田駅の旧名今橋駅と名を負しと見ゆ其は渥美郡吉田駅の処に委く云へり

さて当所に橋のありし頃は旅人今の城内八丁を通行せしとぞ今に八丁左側なる酒井氏の宅地に古松あり土人云是往昔往還なりし時の茶屋松なりと云

○可敬追考云郢曲撰要の中にある新今橋の云々といへる比わたせし橋は当今迫五百廿余年に成其橋は今城より二町許上の川中に橋柱のこりてあり是五百年代の往還にてこゝより


下地合戦火圖

高足山にかゝり大△山をうちこへ(うの谷へかゝる)堺川に出しと見ゆ其後当橋を廃して又関屋口に架せしと見へたり

東宮牛頭天王社

同村東の方に在当社は土御門院天皇の御宇正治二年庚申六月六日に勧請す其後寛永七年午六月吉田城主松平主殿頭忠利朝臣造営すゝを始めとして領主代々寄付建立す棟札あり茲に略す

大日堂

同村東宮天王社内に在住吉しがでらと云台刹の本尊なりと里俗云傳ふ石像なりとぞ今此社より百歩許に寺屋敷と云る田圃の字あり是其旧跡なりとぞ

矢居所

同村に在三本松と云ふより一町程坤の方に当りて田圃の字にあり永禄七年六月の合戦に小原源之丞が遠矢此所まで來りし故斯く土人呼ひならへりとなん吉田綜禄に云大神君此虚に乘じて小原肥前守が守る処の吉田城を攻撃んとて同六月十四日酒井左衛門忠次先陣として吉田城を圍む或日城中より大原源之丞と名乗て櫓に上り大音聲にて呼りけるは先陣に進みたる旗は酒井忠次の武士と見るは僻目か大将向ひ賜はんと心得て御儲の為遠江国菊川の鍛冶のきたひたる鏃を少々用意仕て候は一筋受て御覽し候へと云ふ侭に十三束弐伏箙かづきの上まで引かけ暫く堅めて丁と放つ其矢川を隔て遥かなる下地の東の岡に加へたる酒井忠

次が家士に渡本新七郎が甲の眞向金物の上二寸許射砕きて眉間の眞中に射篭たり一箭なりと雖も容易の矢坪なれば渡本馬より倒れ落て起も直らで死たりけりゝを始めとして源之丞が矢に中りて死たる者八人までそありける　大神君御覽じて源之丞が弓勢あつはれけなげの者なりとて聖現寺の惠敬と云僧を御使として矢十本酒一樽を送り賜ふ

水神社

同村三本松の東に在石田式部支配す当社は元文三年戊午十一月松平豊州候吉田城主の時水神の靈夢を蒙り社を創建し賜ふと吉田綜禄に見へたり

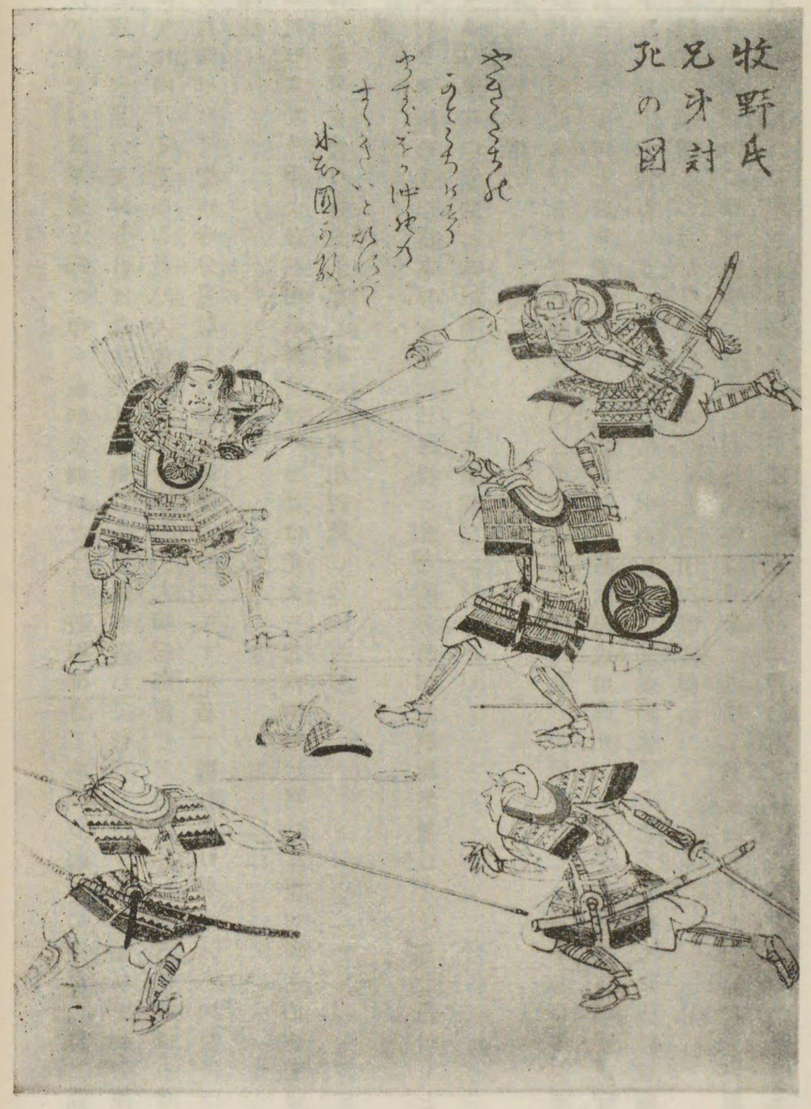
乘兼

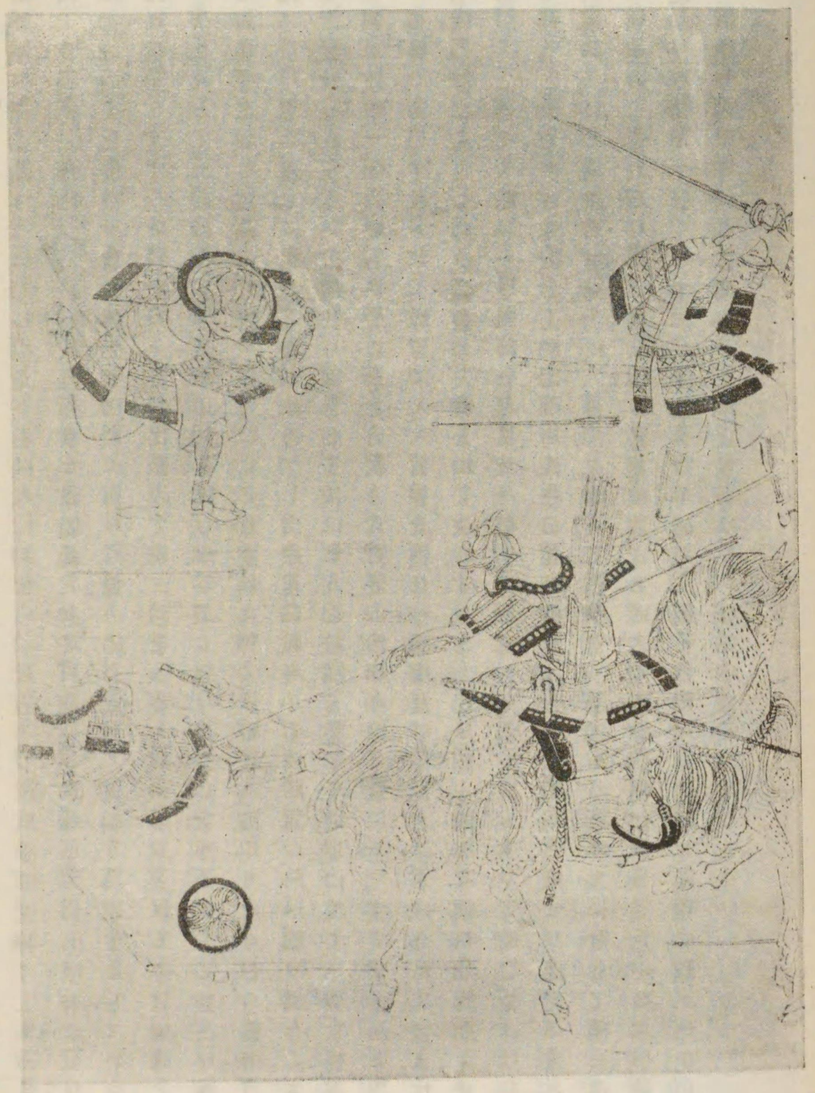
同村三本松の上に堤あり乘兼と云享禄二年合戦の時畑堤故馬乘兼しとぞ故に名付しとなん夫より東北に赤池と云川瀬ありと吉田綜禄に見へたり

三本松牧野氏塚

同村水神社より三十歩許坤の方に三本松あり五六年前の大風に折て今一本あり是を首懸松と云爰を平川と云無常所あり此にて牧野田藏(同新三)同田次切腹せしとぞ今も其近辺田圃の字を三本松の坪と云按るに牧野氏三人の塚に限るへからす其時戦死の者を皆埋しと見ゆ彼塚の畔を耕すに髑髏多く出たり是にて知へしと吉田綜禄に見ゆ

武徳大成記一巻に云牧野傳三は東三河の名族なり数代吉田の城主として一族郎黨を撫育して其勢漸く振へり東三河の諸士多く下風に属せり西三河をも奪はんと間を伺ひ計るとなん清康


牧野氏
兄弟討
死の図



君間賜ひ先立者は人を制し後るゝ者は人に制せらる此方より後れなば後悔すとも益なからんとて享禄二年（朝庭は後奈良院武家は方松院義晴）五月廿七日岡崎を起て其夜赤坂に陣取翌日小坂井に至りて下地御油に火を放たり牧野傳三吉田城にありて煙の起るを見て是必す清康軍を率て來るならん我宿望を達すへき時なり急ぎ駆出戦ふて東三河を取るゝ欤西参河を取もの欤雌雄を一時に決せんとて一族郎從引連て吉田川を渡り船突流し返り渡らじと思ひ定めて進だり両軍の先鉾勇氣を励し攻戦ふ牧野が兵火にして我軍稍々却く佐野共八郎申すは今日の戦味方危く見へたり軍を返して重ねて発向然るべし清康君曰敵今小刀の勝軍に將は驕り備なく士卒は敵を軽せり此我得たる所なり敵を必す擒にせんと旌旗を整て下地堤に推上らる牧野傳三傳次新三新次一面に駆向ひ勇を奮て力戦す佐野衆に告曰今日の戦に云々生て還らんと思は勇士の義にあらすとて馳て敵軍に入人皆是を感せり清康君は信定と二軍に分れて進ませらる清康君馳出んとし賜ふ轡者二人轡を加て放さす放せと怒り賜ふ坂部友助杉浦鹿助久世甚五郎つゝと寄て大將の糸は執時の有事ぞ今暫く待せ賜へと云ふやゝありて時こそよけれ懸らせ賜へと勧むれば糸を振上馳出賜ふ先手の軍兵御旗先を見て勇気百倍せり信定は冑をぬき大童になりて清康君と諸共に入替々々馳入て烈敷突て撃破らる敵陣大に敗れて傳三傳次新三新次悉く撃れたり傳三は柴田中書撃取傳次をば大岡忠右衛門討取殘る吉田の兵は散々に遁たり牧野が一族に年十三の童武者軍の破れを聞て吉田川を打渡り敵軍に駆入切死に死たり清康君吉田城に入せ賜ひて軍法正敷ありしかば城中皆安堵せり云々

吉田綜禄に此時新二郎は打死と偽りて淺瀬を渡り赤岩の法言寺に忍ひ居し後には戸田の家をぞ続たりけると見へ其餘諸書に挙る処牧野氏兄弟四人とす然て武德集成（ミテ）に傳へ称す牧野左エ門佐成時入道古白か子田藏成三は東三河を隨へ家富て族多し然るに長男傳三成命（法諱吉外言公）二男傳次（法諱三休位公）ともに享禄二己丑年居城宝飫郡吉田（旧名今橋）の城に於て亡滅す成命が子傳藏成継尾三の間に落魄し今茲に横死す三卅八名郡眞木村（牧野なり）住士眞木新次郎成定は傳藏が族にあらずして別家なり眞木越中守牧宗次郎は皆成定が家に分る然るに田三成三亡て後各牧野と称す当時世に行はるゝ書に成三が弟を三人とし新次新藏と云る寓名を載る斯の如き謬に妄に泥むへからす予が実父根岸暫軒壮年にして浅羽成儀に親從して其聞所斯の如し右少將摂州の大守義行君の予に語り賜ふ処も亦斯の如し頃年牧野越前守成憲に尋るに家傳最違ふ事なし爰を以てこれを記し松下閑翠軒二階堂不入済が徒の謬説を解んと欲するものなりと見へたり

辞世

吉田傳記　豊川に立くる浪の音たてゝ　牧野成信

流れの末の名こそたかけれ　同　成高

木枯にあらそひかねて死出の旅　同　成村

弥陀の御舟にのりて浄土へ　同　成国

若宮八幡宮

同村天神社より北三町許に在豊川路の傍なり長禄三年己卯八月十五日勧請す祭神は　応神天皇又は太王命をまつる。

白山権現社

同村若宮八幡社より東一町許に在是も道路の傍なり祭神加賀国白山と同体なり　正親町天皇の御宇天正五年丁丑七月十八日勧請す当社の権輿を尋るに往昔小島氏なるもの越の白山に詣て祈信を発し帰路に赴きしが背に負し荷物次第に重りける故開き見るに石あり取すてゝ行に一日ありて亦先の如く重りける故開き見に又石あり奇異の思ひをなしけれとも山路けはしくして山川数里を隔てたれば路次の疲れをも厭ひ心なくも亦打捨てゞ帰りける日数漸々積りて飯国し旅のつかれも漸く休まりしかば荷物をひらきけるに彼途中にて捨し石思はずも荷の中に在小島氏不思議の思をなし是たゝ事にあらず必す白山権現の応験ならんとて則ち社をいとなむとぞ吉田綜禄に見へたり

◎是より御油駅欠間へ戻りて本坂街道に出る

八幡村

東海路左の方にて本坂街道の中なり当村は往昔国府の地中にて國司の館舎は此わたりより

久保村の内にありしと見ゆ其は船山の条に云べし扨此辺は千年以前より鎌倉北條氏の五百年代までは旅人今の赤坂駅北裏の山添にかゝり國府に出て二見道に出る街道なれば往來常に絶へず其上本国府中の地なれば其栄昌なりしこと推て知るべき事になん其頃の海道は今の道より一町許北にありしと古老の物語なり武徳集成五丁世永禄五年長沢松平康忠の領地の印章に一百三十貫文分地とも八幡同西方一四十貫文同本所方一六十貫文光久方一二十貫文岡本方一六十貫文八幡本と見へたり

鷺坂

同村の中西明寺門前鷺坂と云三河雀にも此坂を古場戦の鷺坂なりと記す然るを太平記評判又梅松論などには鷺坂は遠江國となすなれど非ず如何と云ふに太平記を以て考れば上畧日既に暮ければ合戦は明日にてぞあらんずらんと鎌倉勢皆河より東に陣を取て居けるが如何思ひけん爰にては不叶とて其夜矢矯を引退き鷺坂にぞ陣をぞ取たりける懸る所に宇都宮に科愛曽伊勢守勢田根津大宮司後れ馳にて三千余騎義貞の陣に着たりけるが矢刈の合戦に不合事を無念に思ひて打寄るとひとしく鷺坂へ押寄て矢一つをも射ず抜連て攻たりける鎌倉勢鷺坂をも亦破られて立足もなく引けるが下畧矢作の合戦に不合事を云々鷺坂へ押寄て云々の処の文章を観るべし矢刈に遠からさる事を亦太平記評判を見るに矢刈合戦の条日西山に没しぬれば両陣既に物別れしつ翌日早天に宇都宮熱田等川を渡りて東の岸に着に鎌倉勢早此陣を引退きければ宇都宮愈追て其日の暮までに行路十六里を走りて遠江國天竜川の西

の端に陣を取とあれと矢矧川より天竜川までは行程凡十九里程なるを甲冑を着て一日に馳付しとは其虚説なること顯然なり矢矧川より此鷲坂までは五里半許の行程にして夜陰に引取道法に叶べしかゝれば鷲坂合戰は当所にまぎれなからん其は後人の校正を俟

同二日たかし山と云ところに三かわのかみ李綱たひのそうそくつかはしたるにそへたる　橘為仲朝臣

家集　さしてゆく衣のさきのはるけさは
立かへるへき程ぞしられぬ
みかわのさきさかと云ところにたよりにつけてかへし

同　忘るなとかたみにきつるたひ衣
きみをみかの立うかりけり　同

大寶山大梅院西明寺

同村に在寺領廿石禪宗曹洞派本寺尾州緒川乾坤院に属す開山大素和尚

本尊

当寺の盤鶴を尋るに人皇六十六代　一条院天皇の御世三河守大江定基朝臣当國の刺史として当所に住せり然るに愛妾力壽姫に別れしより一向佛道に志し仕終るを待て後冠纓を断敷山源信僧都の室に入て至心に阿字を観ず法諱を寂照と云然て後愛妾力壽が終焉の地なるを

以て再ひ当所に來りて茅屋を斯山中に営して俗塵を厭ふ封署扁額して六光寺と号す台宗の梵刹となしぬ今尚土人其地を指して六光寺と呼長保四年寂照遂に入宋して異域に遷化す其後星霜貳百廿余年を経て鎌倉の執事最明寺時頼入道諸國修行に出賜ひしが暫く当所に杖を停む因て六光寺を改め西明寺と称し宗旨もまた改宗して禪刹となしぬ其後亦星移ること二百廿年許日に明応年中に到り駿河の刺史水野氏当所を領するを以大素禪師をして再ひ法燈を輝さんと欲し強て招請して此に移住せしむ禪師は尾陽乾坤院芝崗師祖の嗣子なり然て乾坤院は水野黨代々の菩提所になん其後永禄七年駿州の今川氏眞大挙して当國に入此時　神祖岡崎より渡御在て御油東の台にて爭戰あり其時節当院の住僧等粥を焚て我軍に饋る之に依て寺領廿石寄付し寺号を西明寺と改め賜ひしとぞ

最明寺時頼朝臣諸國斗藪の事増鏡巻六また参考太平記三十五ノ廿九丁又北條時頼記一ノ十丁等に見へ亦馬琴の玄同放言に委しくあぐ

○鎌倉福源山禪眞寺と云は平時頼開基之を最明寺と云北条越後守平実時の法名を称名寺と云其子顯時父の菩提に武州金沢に称名寺を建る是を思ふに時頼の孫北條相模守貞時入道して宗瑞と号す六十余州を巡ること四年とあり然れは祖父最明寺も巡國のことあれは顯時の例にまかせ國々の最明寺は貞時の建立にてはなき欤

最明寺時頼墓碑　当寺境内に在碑面に当寺開基最明寺殿道崇大居士とありさて時頼入道諸國遍歴せし事増鏡巻六に時頼謝臣は康元元年にかしらおろしてのちしのびて諸國を修

八幡村
西明寺
之図

行しありきけり、それも國々のありさま人の愁なとくはしくあなくりみきかんのはかりごとにてありけるとそ云々又参考太平記（巻五ノ廿九丁）西明寺の時頼入道禪門（平時氏子法名覚了坊道崇）云々見ゆ因に云時頼入道諸國修行の時末世の形見とや思はれけん國々に塔婆を一本つゝ建立し賜ふ扨ればまた改めさせん為に其処の諸役を免除なし置れしが星霜を経又度々の逆乱に依て諸國の平都婆退轉しゝと見へたり其中丹州高平都婆村には当時までありしと室町殿日記に見へたり

武家系図に云時頼童名戒壽丸正五位下相模守執権たり三十歳の時出家最明寺入道覚了坊道崇三箇年一天下芊簽し民の邪正を正し給ふ東鑑に云弘長三年癸亥十一月廿二日戊刻入道正五位下相模守平朝臣時頼御法名道崇御年三十七於最明寺北亭卒去（シ）玉御臨終之儀著衣袈裟上縄床令坐禪給聊無動揺之氣

頌曰

業鐘高懸三十七年　一槌打碎大道坦然

大江定基墓碑　同所に在碑面に当山開基　勅特賜円通大師石裏に前三州刺史大江定基入道六光寺寂照公とあり此寂照の事は当郡力壽山舌根寺亦赤坂駅長福寺また当村舟山の処合せ見るへし

水野氏墓碑　同所に在石表に当寺功徳主乾徳公大禪定門横に前駿州刺史水野氏と彫刻せり

五輪石塔三基　当院より東の方六光寺と云山にあり其処に古き五輪の石塔あり大江定基朝臣の石塔なりと云傳ふ長德元年当国八幡村の中に在山間に草庵を結ひ住する頃夜毎に山より六筋の光明を放つ是六道の闇を照破する表相なるへしと是に依て此庵を六光寺と号す今に西明寺山の東の麓を土人六光寺と云然れとも其境地寂照の心に叶はさるにや明年の春庵を山の奥に移して寺院を建立し又六光寺と称すとそ其後最明寺時頼入道当寺に暫く寓居し賜ひしより最明寺と云則今の西明寺是なり

三河守世をそむきける後ふる里の月を見て

拾選百番歌合　今こんといひてわかれし君により
有明の月をいく夜見つらむ

○此歌前の大江定基墓の所へ入るへし

光明権現堂

秋葉権現堂

辨財天の祠

宝篋印塔

鐘　楼

愛染明王

芭蕉塚　西明寺門前本坂街道の側にあり

かけろふの我肩にたつ紙子かな

船山

同村の中民家の裏に在此舟山は往昔大江定基朝臣愛妾力壽姫と遊宴の地なりと三河雀に見へたり憶ふに船山は自然の山にあらず此わたりは三河守たる人世々居住なしつる所なりせは四時の風景を増さんと築きしもの欤船山とは其形船に似たるを以て号しならんさて往昔國司の官舎も最手軽き事と見へて諸国々司の舘に死人なと有時は已がじし舘を外へ作り替しと見へて其を制禁なし賜ひしこと続記（十五ノ七丁）又類聚三代格（七巻）等に見へたり且此船山は鷺坂の側にて国司の舘舎ありしこと明なり其は前の鷺坂の所に三河守李綱朝臣の鷺坂に住し事なと照見て悟るべし

大江定基朝臣傳

前三河守大江定基入道寂照は平城天皇の後胤諫議太夫大江斉光（マサミツ）朝臣の第三子世（続往昔傳元亨釈書）早く祖業を嗣で栄爵の後三河守となる性文章に長じて佳句多く書も亦二王の跡に恥づ或時夢中に霊告ありて必ず往生為べしとぞ未だ発心為さるの前は唯好んで狩猟を事としければ人皆笑て曰此人夢にだも往生すべき器にあらずと（続往生傳）然て一条天皇の御宇当國の刺史として当所に住せり当時赤坂の長者宮路弥太郎長富の方に一人の女あり力壽姫と云（続世継に此女京より見し来るとあり）深窓に養はれて嬋妍たる粧は大液の芙蓉未央の柳に比したる貴妃の容貌にもおさ〳〵劣らす定基朝臣何の隙にか垣間見

けん遂に此船山の舘に迎て巫山の契り深かりけるを會者定離の理り叶はさりける縁なしにや力壽姫不図病にかゝづらいて打臥ければ定基朝臣はさらにもいはす侍女奴婢（ヌヒ）に至るまで甚く驚き藥餌介抱限りなく盡しぬれど其験なく遂に黄泉の人となりつれど猶愛情やるかたなく喪儀なども執行はず歎息のみしてありけるが紅顔漸く変り行くを見て憂世のあじきなきを悟り一向佛道に志を進むかくて一七日の後文殊菩薩の夢中の告を蒙り即力壽姫が舌根を抜て当郡陀羅尼山の境内に至りて彼舌根を山嶺に埋且其上に文殊菩薩を安置す此霊像は姫在世の時深く信仰ありしとなん亦傍に一宇の道場を創建して力壽山舌根寺と号して敗賀寺の南に在しが今世を去事年歴凡八百余年何の程にか彼寺院は廃頽して唯其山上に文殊堂のみを存せり扨任果て京師に登りけるに五月の霖雨しける頃品賤しからざる女の定基（拾選集雑入には為基朝臣の許へと有）朝臣の許へ鏡を賣に來りぬ見るに五寸許なる柄覆ひなる張筥の活懸地黄に蒔るを陸奥紙の馥きに裹てあり見れば鏡の内に薄様を引破りて可咲（ヨカシ）氣なる手して

けふまでと見るになみだの増かゞみ

なれにしかげを人にかたるな

とあり定基朝臣此を見て道心を発したる頃にて極（ハテ）く悲んで米拾石を車に入て鏡と共に彼女に遣しけり（古写本今昔物語巻二十四又十訓抄下の二又沙石集第五又本朝語園巻三等に見へたり）然て永延元年三月（ヤヨヒ）の頃定基入道入空上洛して入道を請ふ（日本紀畧）同二年望の如く冠纓を脱断て叡嶽に登り源信僧都の室に投して早く講学に名あり（百練抄巻四元亨釈書五ノ十六）長保四年再上洛して宋国に向ふ（百練抄巻四日本紀畧巻六）既に渡海に進発の時山崎宝寺

に於て母の為に八講を修す聽問の衆涕泣せずと云人なし此日出家爲し者五百余人婦人の如きは髪を切て講師に奥ふとなり（続往生傳）

今昔物語（十二ノ十六丁）今はむかし律師清範と云学生山階寺（山城国宇治郡）の僧なり清水の別当にして智深くして人を憐み説経並びなくもろ〳〵の所に行て法を説て人に聞かしめ道心をおこさしむ其ときに入道寂照と云人あり俗にて大江定基（寛光の男三河守式部太輔）と云ひける寂照清範と俗の時より得意にてたがひにへだつることなくして過しけるに清範が持たりける念誦を入道寂照に与へぬ其後律師死して四五年を経て後寂照震旦に渡りけり此時まで清範の与へたる念誦を持て震旦の天皇の許に参りたるに四五歳許の皇子走り出て寂照を見て倭語を以て其念誦はいまだ失はずして持たりなと云寂照おどろき是は何仰せ賜ふぞと云皇子の曰其持たる念誦は自らが奉りし念誦ぞかしと寂照おもひけるは此持てる念誦は清範律師の得させしぞかし此皇子は律師の再生なりと心得てこれはいかにかくてはおわしましけるぞと問ければ皇子宣く此國にて利益すべきもの共のあればかくまゝで來りたるなりと答て走り入給ひけり時に寂照彼律師は皆人文殊の化身にてましますと云しがまことなりけりとあはれにかたじけなくて拜し賜ひしとなん語り傳へたるとなり

寂照上人入唐し侍りけるに裝束おくりけるにたちけるを知らでおひてつかはしける

新古今別　きならせと思ひし物を旅衣たつ日を知らずなりにけるかな　読人不知

返し　これやさは雲のはたてにおるときく　たつことしらぬ天のは衣　寂照法師

同　もろこしへわたり侍りけるを人いさめ侍ければよめる

詞花第六別　とゞまらんとゞまらしともおもほえず　いつくもおなじ住かならねば（ひのイ）　寂照法師

寂照法師入唐せんとて筑紫へまかりくだるとて七月七日船にのり侍りけるにつかはしける

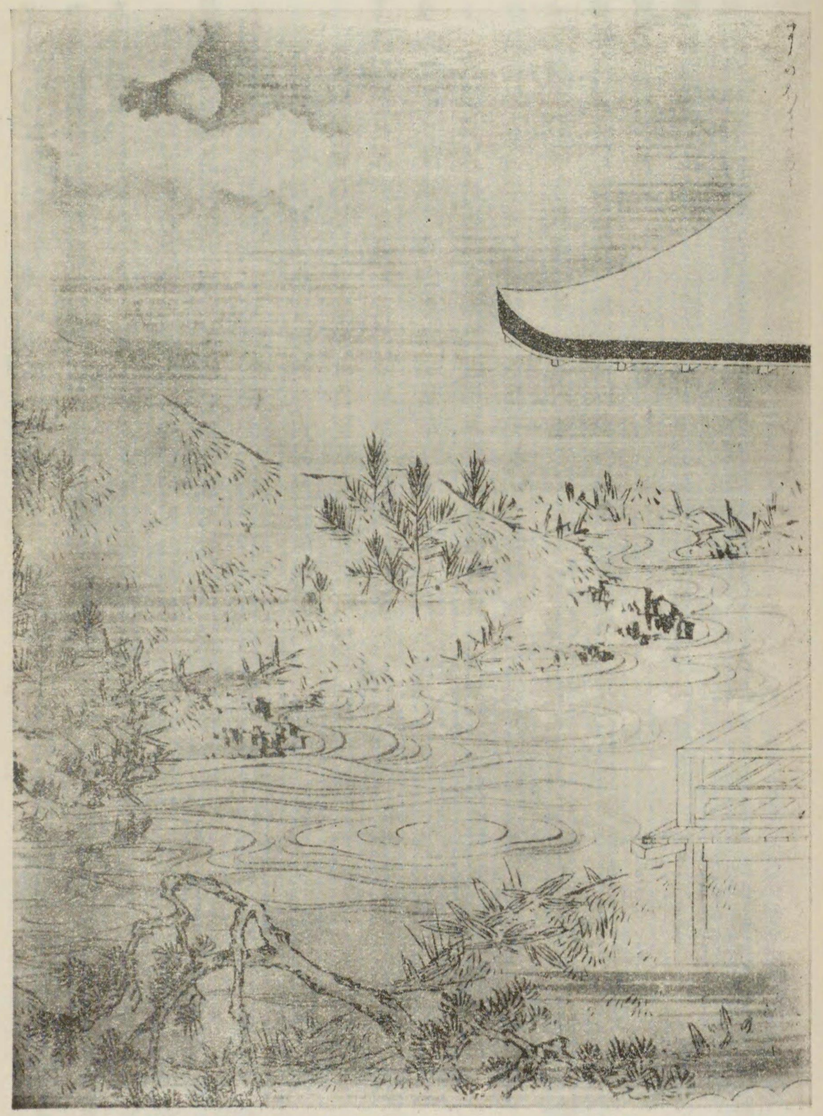
後拾選第八別　天河のちのけふだにはるけきをいつとも知らぬ舟出かなしき　前大納言公任卿

入唐し侍りける道より源心か許におくり侍り

同　そのほとゝちきれるたひの別だにあふことまれにありとこそきけ　寂照法師

かくて長保五年秋八月廿五日寂照法師は心細くも肥前国を離れて万里の波濤を渡り（扶桑畧記第十一）宋國に入ぬ時に彼地は景德三年なり宋帝召見て紫衣束帛を賜ひ然て上寺に館せしむ寂照天

定基朝臣
力壽姫と
船山遊宴の
圖



台山に遊ばんことを願ふに詔して縣道をして続食を給ふ姑蘇人丁謂寂照を見て甚だ是を悦ひ爲に其山水の奇絶を語り且見せしむ寂照心に之を愛す因て錫を吳門寺に止む或時彼朝の高僧連坐して飛鉢の法を修し齋食を受寂照其席の末座に在けるが次て此に至る此時心中大に耻て一向本朝の神明佛陀を祈るに寂照の鉢亦自ら飛出て佛堂を三匝して齋食を受て來る見る者感涙をたれずと云者なし皆曰嗚呼扶桑人を知らず此僧をして奮然として渡海せしむ人を惜まざるに似たり又或時寂照黒金の水瓶を以丁謂に寄る詩を賦して曰

提携三五歲日用不曾離曉井斟殘月春爐釈花斯鄰銀難免侈藁石易成斯此器堅亦実寄君応可知

丁謂寂照を深く尊信して月俸を分て之を給す景祐元年（皇國長元七年に当る）杭州清凉山の麓に於て正念端坐して遷化す臨終の刻祥瑞揭焉たり

茅屋無人扶病起香炉有火向西眠笙歌遥聽孤雲上聖衆來迎落日前

雲のうへにはるかに楽の音すあり人や聞らんひか耳かそも

と末期の詩歌を殘す追号して円通大師と云（元亨釈書十訓抄源平盛衰記続往生傳）其後星霜百九十余年を経て天福元年鎮西の船藝備の海濱に泊る円通大師其船中に再生して後釈順空となる其事詳に元亨釈書に見へたり

八幡宮

同村の中街道より左の方に在國内神明帳に云八幡三所大明神とあり社領百五十石社説に云

天武天皇白鳳元年豊前國宇佐より鎮座中の坐は三女神西の坐は応神天皇東の坐は神功皇后三座相殿に坐と云り例祭八月十五日同夜丑の刻神輿三基幸あり当村の産土神とす神主寺部氏

神明帳集説に云按るに駿河風土記（九ノ巻）有渡郡八幡岡の八幡神社の条に　孝謙天皇神護景雲三年九月太宰神主阿曽麻呂五畿七道に各置（誉田先君宮）とあり続記を按るに此阿曽麻呂醜法師道鏡に媚事へて其年九月八幡の神の敕と矯て和氣清麿主を大隅國に配流さしめし時にて甚く　天皇の寵を得たる折なれはなり委は続記（三十ノ五丁）後記（巻四）類聚國史（百四十七）等を考合すへしかゝれは一國一社の八幡宮は此時鎮坐し奉りしならん欤考ふへしと見へたり

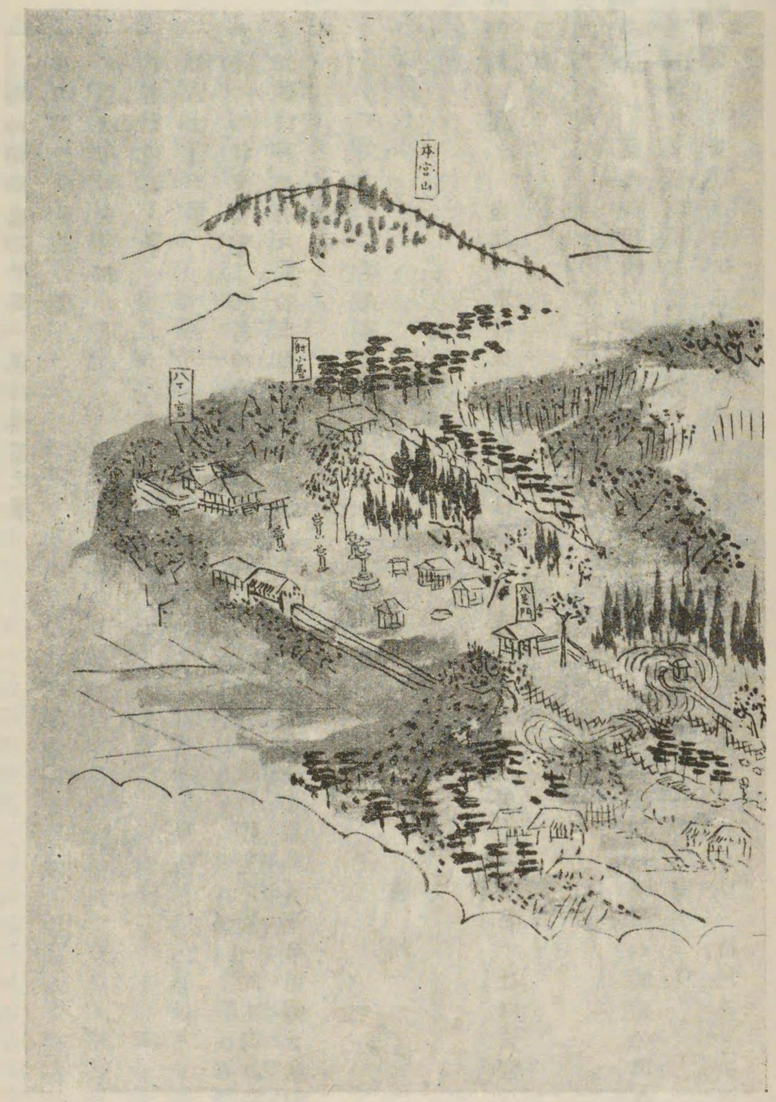
○天文廿三九月廿日今川治部大輔下知状

○永禄五年十月朔日の制札あり

○宮島傳記を按るに慶長七年御検地の時当社神主よりの訴状に八幡領の事先御判形に有御座分の御縄之積り千五百石程御座と雖然彼御判形は高辻御座候而只今百五十石可在御附候由備前殿被仰候左様に御座候而は年中七十五度の御条修理以下又者宮僧祢宜等堪忍も被成間敷云々と書上たる由なればそのかみ神領千五百石なりしにこそ備前殿とは伊奈備前守殿なるべし

○德川台德院殿朱章に八幡神主とのへとあり

参河国宝飯郡八幡宮の事


本宮山
新小屋
八幡宮

八幡村八幡宮
並国分寺之図
国分寺

一八幡神領同廣石并岡一色神領等之事
一光久同設樂經由の事
一於当社中殺生禁斷の事
一供僧勤行等之事
一祢宜出仕之事
右条々如年來領掌了然者神領等之事無他綺可為神主計縱雖有競望之輩一向不可許容若地頭代官非分之儀於申懸に者披露之上可下知云々此旨神事祭礼等不可怠慢之狀如件

天文二十三年九月七日　　神主　孫八郎との　　治部大輔　書判

八幡祠二座　当社の末社なり本社より辰巳の方なり一社は男山八幡宮一社は若宮八幡宮なり

天満天神祠　当社の末社なり本社より南の方にあり

一品(イチシナ)社　國内神明帳に從五位上市階天神坐宇飫郡とあり集說に八幡村八幡宮の根社に一品社あり又総國風土記宇飫郡の条に北限市師浦とあり考ふへしと見へたり

射場　本社の右に在毎歳八月十五日甲乙人遠江より集りて的あり　持統天皇の記に詔

左右京職及諸國司築習射所と見ゆこれ射場の始ならん

石燈篭

鐵燈篭

八足門

神鐘

辨女祠

石鳥居

國府莊山國分寺

同村に在寺領五石七斗禪曹洞派本寺同村西明寺に屬す

本尊　薬師如來　長一尺許

当寺の権輿を尋るに人皇四十五代　聖武天皇の御宇天平年中　勅願に從ひ奉りて從四位下石川朝臣年足從五位下阿部朝臣小島布施朝臣宅主等五畿七道に進発して國司國師と共に勝地を簡み定めて諸國に創建する所の一院にして本堂金堂僧房及ひ七層塔瓦を並へて巍々然たり然て其号を金光明四天王護國寺と云僧廿人をして栖居せしめ法灯赫奕たりしも何か諸堂も頽廢して今纔に小院に唯其名のみを存せり統記十四ノ三丁に　聖武天皇天平十三年又毎國僧寺施封五十戸水田十町尼寺水田十町僧寺必令有二十僧其名為金光明四天王護国之寺一十尼其寺名為法善滅罪之寺両寺相去宜受敬戒若有闕者即須補満其僧尼毎月八日

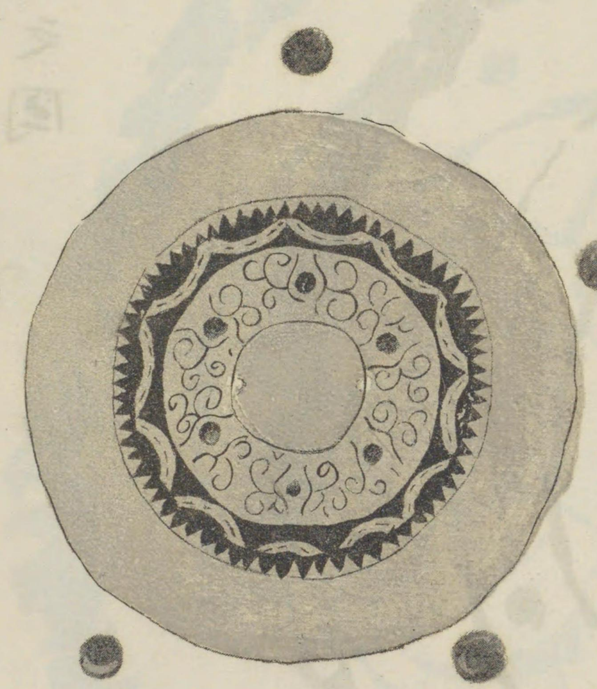
心応転讀最勝王経每至月半誦戒羯磨每月六齊日公私不得漁獵殺生國々等宜恒加檢校又同書十五ノ十六丁　天平十六年の条甲申に　詔曰四畿内七道諸国國別割取正税四万束以入僧尼両寺各二万束每年出挙以其息利永支造寺用又同書十七丁　天平十九年の条己卯に　詔曰朕以去天平十三年二月十四日至心発願欲使国家永固聖法恒修遍詔天下諸国国別令造金光明寺法承寺其金光明寺各造七重塔区並写金字金光明経一部安置塔裏而諸国司等怠緩不行或殃寺不便或猶未開基以為天地灾異一二頻來蓋由茲乎　朕之股肱合如此是以差從四位下石川朝臣年足從六位下安部朝臣小島布施朝臣宅主等分道発遣検定寺地並案作状國司宜与使及國師簡定勝地勤加営繕又任郡司勇鞫堪濟諸事專令主当限來三年以前造金堂僧房悉皆令了若能契勅如理修造之子孫無絶任郡領司其僧尼寺水田者除前入数已外更加田地僧寺九十町尼寺四十町便仰所司墾開応施又同書同巻廿九丁　孝謙天皇天平勝宝元年の条乙巳に定諸寺墾田地中畧限諸國分金光明寺寺別一千町又同書十九ノ廿丁　同天皇八年の条に六月乙酉　勅遣使於七道諸國催検所造國分丈六佛像又同書同巻廿丁　壬辰　詔曰頃者分遣使工検催諸國佛像宜未年忌日必令造了其佛殿兼使造備如有佛像並殿既造畢者亦造塔令會忌日　夫佛法者以慈為告不須因此辛苦百姓國司並使工等若有称　朕意者特加褒賞なと見へたり

鐘　楼　本堂の前に在高龍頭まで凡四尺五寸径二尺七寸厚二寸五分形古風にして中古の類にあらす恐くは当院創建せし時の古鐘ならん

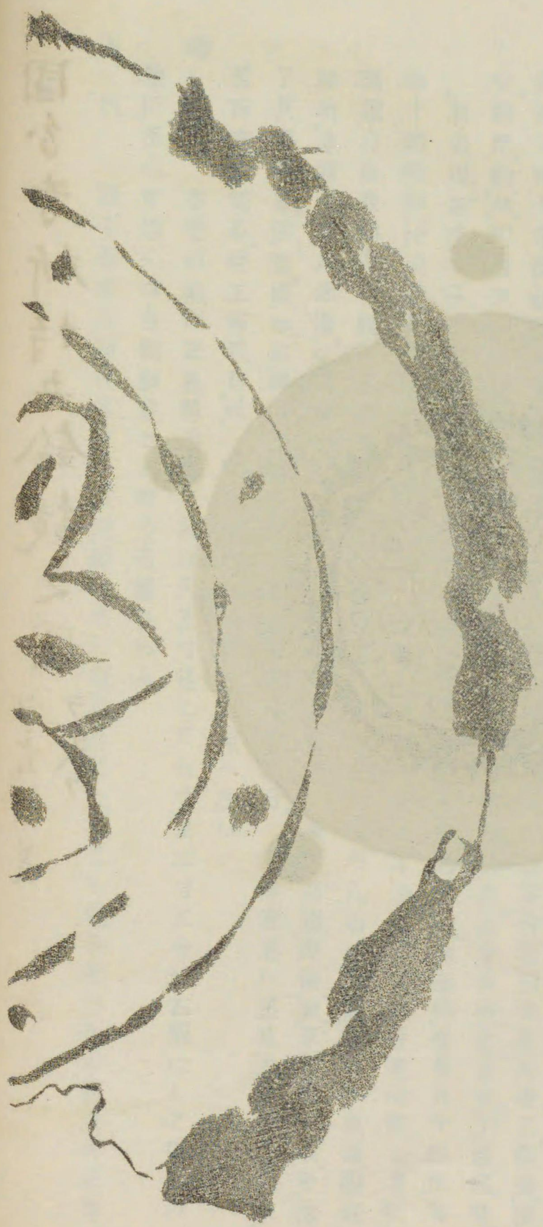
古　瓦　図する処の古瓦は往古当院開基せし時の古瓦にして千歳を経しものなり今当寺

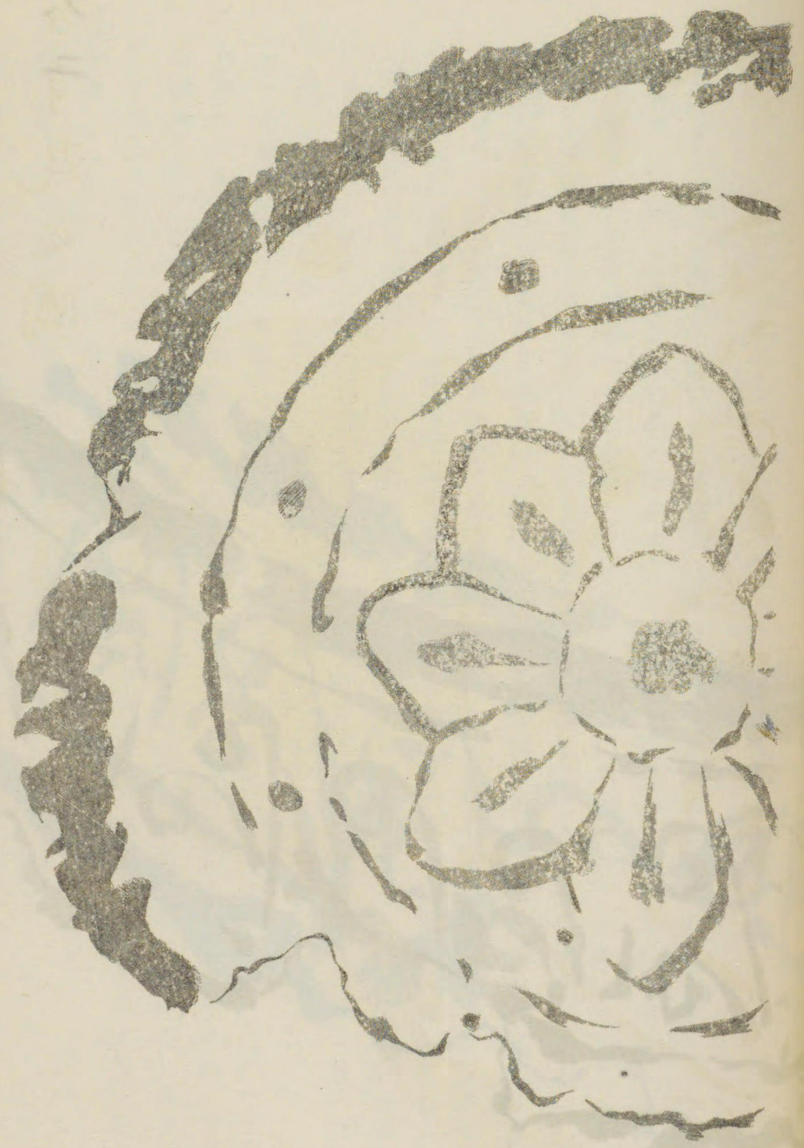
國分寺所持五鈴鏡之図

ヨシムヘシ是ヲ失フ

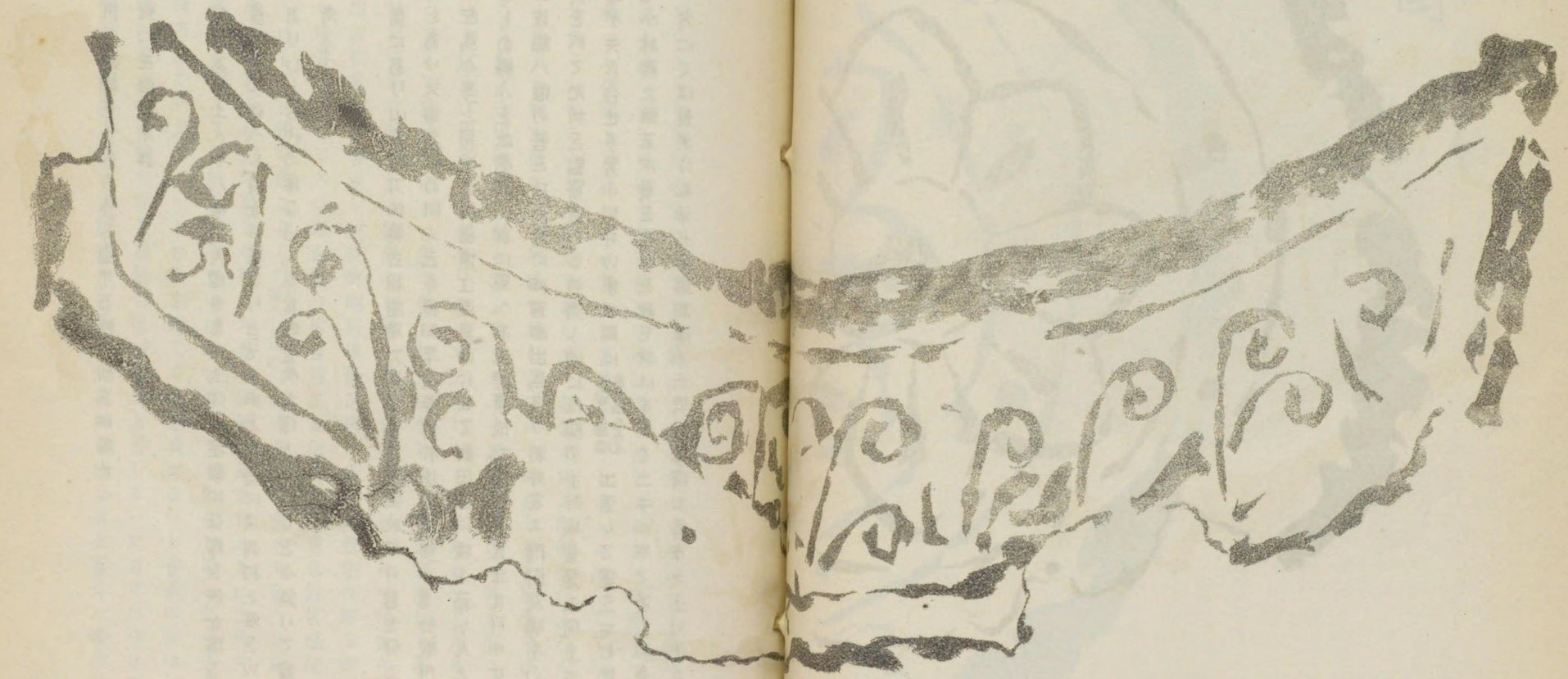


國分寺瓦之図





其二



の四辺を掘試るに古瓦の破損せしもの多し図する処の如きは稀也

五輪石塔　同村船山の処に在由縁未詳

供女塚

二葉松に云久保村供女塚とあり土人今八幡村大塚寺と云法印の屋敷に在塚を供女塚なりと云同書に云こは大江定基朝臣に仕へし侍女の墓なりとぞされと同書に久保村と在を以考ふれは今久保村に一の塚ありいと古代の塚ならんか其塚を供女塚と云ひしを今誤りて傳ふるか久保村の処合せ見て考ふへし

城跡

二葉松に云一町田と云處にあり山本帯刀住異云縮垣帯刀板倉彈正重定此所の砦を守ると云又剛補松に云板倉彈正とあり又御年譜の附に云永禄四年構要害於佐脇八幡中略自駿州籠置板倉彈正同主殿助三浦左馬介等と見ゆ又神祖遠江国見附に在て鎌田原に城を築かんと思召山本帯刀をして縄張せしめ賜ふと武徳大成記に見へ亦武徳集成(廿五六)永禄五年九月小廿九日諸録皆年月誤れり今川方の設楽郡佐脇八幡の砦を攻ん為に神君御出馬あり酒井左エ門尉及福釜の松平三郎次郎親俊等千余兵を以て地利を監察あらしめ賜ふ所に佐脇の主将板倉彈正同主水二連木の戸田及牛窪の牧野が兵を合せ多勢小坂井の東の岡に(可敬云御油東の岡ならん)出張して軍を始む地勢険多味方利を失ひ親俊並小林勝之助正次勇を振ふと雖も叶はすして二手に成て退く板倉勝に乗て二方とも追撃す一方にては長沢の松平兵庫頭親廣か六男七平同七男市之丞以下五六七

騎戦死す松平源七郎康忠功を尽す夏目次郎右エ門吉信国府までの間に六度踏止り後殿す又一方へ退く味方には渡辺半蔵守綱石川新七郎同新九郎畔に添て退き三十三ケ度踏止り戦ふ後には両石川も退く半蔵一人後殿して返し戦ふ事十ケ度槍を合すること三度にして剌へ矢田作十郎足を痛め馬をも失て引兼たるを半蔵是を肩に掛て御油赤坂の間敵を拒きながら退く渠か功を以此口へ退く味方一騎も討たれす矢田も馬を得て皈る敵将も慕ひ来る処に神君御動座あり既に御旗至るを見て米沢藤蔵も競ひ踏止まる米沢と渡辺と小塚の隠れ居て敵の至るを待けるが半蔵思惟しけるは藤蔵は老兵なり我は壮年なり同し様に知ること勇劣れるが如しと聊塚の陰敵方へ進んて待受敵山下八郎か衆に抽て馳来る所を躍出突落して其首を得る米津も亦功を遂る神君先隊の敗するを聞賜ひ御馬を早め着陣し賜ひければ板倉兵を集め引取る処に味方酒井忠次松平親俊等返し付板倉剛将故奮ひ戦ふ時に神君躬ら鉾を取て敵に中り玉へは味方の諸士粉骨を尽して大に敵を破り板倉彈正を前島傳二是を討其婿板倉主水以下多く討れ遂に付入にして八幡の砦を抜く(此後亦氏真砦を構ふと見ゆ)殘党悉く二連木牛窪へ逃走る酒井忠次等神君　今日不慮に救援を成玉ふ事を怪む　神君曰佐脇の敵を攻ん為に出馬する所小坂井に軍ありと聞径路より進んて勝利を得る事は神助に因へしと歎喜し賜ふ又渡辺を召て宜く今日一方へ退く味方汝か功を以て一人も命を捨てず其忠莫大なりと褒賞に及はせ賜へり是よりして世に　徳川家の鎗半蔵と称す夏目吉信か軍労を賞して一尺五寸二分の備前長光作及切あれとも大物切の脇差を賜ふ又同書(廿六)永禄七年神君千余兵を遣し八幡の砦を

躍山場躍之圖

攻らる処に牛窪より牧野右馬允成定ニ連木の戸田主殿助佐脇の城兵を合せ多男御油の上の台に出張し地利に依て防き戦ひ味方頗る敗北の機あり其節　神君御出馬ありて稠く戰ひ賜ふ敵大に敗績し八幡の砦へ逃入又同書（七十七丁）永禄七年五月大七日今川氏眞ニ万余兵を率て中畧九日氏眞兼て三浦左馬允等の逞兵を入置三州宝飯郡佐脇八幡の砦に着し五々又家忠日記（巻三）永禄七年の条に小原肥前守吉田の城辺佐脇八幡に要害を構三浦左馬允をしてこれを守らしむと見へたり

○山本帶刀以下括弧内朱書

（三文図会（六十八巻）云山本帶刀（ハ）山本勘助頼純（ガ）下戚腹（ノ）弟也長尾家（ノ）軍学（ヲ）能学（ヒ）兼（テ）山本流（ノ）学（ヲ）弘治二丙辰年六月十一日徳川家（ノ）被召出（テ）家康公並当家軍士御指南申（ケル）天正五年長尾家（ノ）軍略末鑑並神傳抄（ト）云兵書（ヲ）献（ル）軍略末鑑後改与（ル）軍鑑要枢録）天正十八年八月関東御入國之時山本帶刀頼重（ニ）下総国佐倉領大門五千石賜（フ）後与付越前秀康公（ニ）三河堤に云頼重嗣子無（シ）跡断絶（スト）云々

創業録（巻三）牧野右馬允成定（ガ）家臣山本帶刀成氏軍旅（ノ）道（ニ）長（ヲ）以（テ）神君（ノ）御家人成（ル）

躍か山堺躍

当山は平尾八幡両村の境と見ゆ毎歳七日十六日夜両村より此山に登りて躍をなす世に堺おとりと云ふ一村其党五六十人編笠を被り一刀を帶しなとして山上に輪をなしておどる太鼓を敲て唱歌あり両村先へ登りし方より躍り始むとなん日くるゝ頃より始めて初夜過に終る近村より見物の人群をなす

古塚

久保村の内道路の右に在当村も往昔國府の地中ならん村落いと物ふりて見ゆ音羽川も往昔百年以前は当村の辺りを流れしと古老の物語りぬさて此古塚は其由縁未た詳ならす二葉松に云久保村供女塚は大江定基朝臣侍女の塚なりとあり土人は八幡村大塚寺の屋敷の塚を供女塚なりと云されと二葉松に久保村とあれば蓋此古塚や供女塚ならん欤後人の考をまつ古老の云往時此塚を掘しことありしが髪毛なと出しゆへ其まゝ止ぬとなん又思ふに八幡の方を供女塚とする時は此塚は若力壽姫の屍なと埋し塚ならすや此辺は三河守住居の地にて彼船山も此所より近く又此塚と八幡村の塚とは道路をへだつのみ又其塚の形もいと異様にて唯道路の傍に長四尺許の石を二つ据たる儘にて塚と云形にもあらずされど髪毛なと出しを聞けば屍を埋し塚なる事は著し又思ふに物部朝臣廣泉も三河守となりて当國にて終る事雑部にあぐ蓋其人の塚か考ふべし

（本行原本の侭写す）

同村に在三河国聞書に云永正十四年丁丑十一月久保村氏神造立棟札に刺史牧野平次とあり

祭神　　例祭　　神主

古屋敷

同村に在二葉松に云牧野平次永正年中住せし事前の棟札に見ゆ

白鳥大明神

東海路左の方本坂海道に在白鳥村に坐國内神明帳に正三位白鳥大明神宮飯郡に坐とあり祭神日本武尊例祭　神主山口氏当一村の産土神なり

神名帳集説に云当社元禄五年の棟札に奉書写棟札白鳥大明神人皇十七代御宇　仁德天皇十年壬午初而建立云々とあり又天正十五丁亥十二月十七日の棟札に奉造立白鳥大明神三州宝飯郡宮路郷云々とあり

因に云同村の字は総社と云処に総社大明神の社あり今白鳥の社を下の宮と云ひ総社を上の宮と称す古くは国府の地なりしを中古総社村白鳥村と両村に分り今亦合して一村となれり此地は今の國府の北東五町許に在て往昔の府の地にて今の八幡上宿久保白鳥辺かけて古への国府の地なるへし

括弧内朱書

（白鳥社藏大般若経奥書に永和五康暦等年月にて数十巻あり

又野田繁慶の奉納せし長二尺五寸許の鉄砲あり銘に

奉納三河国白鳥大明神　野田善清　慶長十七年八月吉日　日本六十余州御神殿

とあり）

白鳥大明神

同村櫻町の北に若宮白鳥大明神在神名帳に從四位上白鳥之御子明神宝飯郡に坐とあり

総社

同村字総社と云処に在上の宮と称す神明帳集説附録に云総社と云ふ称も正史令式などには見へざれと中昔の書にはかれこれと多く見へたりそはまづ東鑑十二ノ十四丁建久四年八月九日相模国の神社ともに奉神馬条に総社柳田一宮佐河大明神又同書六ノ世六丁文治二年五月廿八日神社佛寺興行とある条に被注其国惣社並國分寺破壊及尼寺顛倒事等云々亦同書四十七ノ十八丁諸国二ノ宮総社云々斯く一宮国分寺等より上に挙られたるを見れば其頃いと重みし給ひし事知れたり坂谷川氏の和訓栞に古昔國府必建総社有事于國内官社則國司率僚属先修典礼於此其儀如京師神祇官

此事早く黒川道祐松岡玄達等も云へり其本據は詳ならす五畿内名所図繪にも此文を出せりと和訓栞に依て挙たるものなるべしまた紀伊国名所図繪にも南紀神社録と云を引て総社とは国府に在て国守朝廷の命を奉りて國内の官社へ幣帛を班ち捧る所にして京師の神祇官に比すへし然に後世所々に於て総社と称する社多し是朝廷神祇官の政おとろへて土俗漫に其称謂を混する者なりと云り実に後世総社と称する社所々に多かるは各々も憑をかけ奉る神等を総祀ひて私に一社となせるものなるべし

と有るは未た古書の證を得されど暫く是に依て按るに往昔諸国の国の司始て入府せるときは國内の神拜として其國内の諸社を悉く順拜（フガミヌ）れる定式（サダメ）なりしかば其諸社を一社に総祀て其府の辺に立て拜所となし毎年二月の祈年の祭を始め四時の祭典月毎の朔幣また大嘗會の幣其餘臨時の祭祀なとの度毎に國司自ら僚属（シタガヒ）を率て総社に参てまづ神事の儀式を調へ諸社を拜

して奉幣使なとを使して幣帛を班ち奉りしと知へたれば何の国にても総社は必す国府の辺に在なり（今京師の神乐間なる神祇官代にも八神殿を始め五畿七道の諸神を一国一社に総祀りてありと相発レて弗ふべし）今も総社と云社は何れの国にも国府又其の近き辺にある事なり此国にも宝飯郡国府に眞近き白鳥といふ村に在ていと古き宮居なりと見へたり

○括弧内朱書

（棟札に

智鯉鮒宮

奉献立総社五十八社大明神宮

永和十二月十三日　神主若井六郎右工門とあり

今本殿は三間四面の社なり）

焼地藏

同村に在長三尺許の石像なり土人云此地藏尊時に觸れて地中より火立のほりて燃ることあり偶之を見し人云遠く之を望めは火燃上りて石像火中にあり近く立寄見れは消失すとそまた其傍に古き五輪の石塔あり未た其由縁を詳にせず

古屋敷

野口村に在二葉松に云印具甚藏板倉主水と在

三ッ岐路

同村に在東海道濱の砂子に云野口村に三つの岐路有本坂と鳳來寺と牛窪とへ別る道也

市田村古城

東海路左の方本坂道左方一里許りに在二葉松に云牧野四郎左衛門とあり又三河国間書に云寺禄三庚寅年市田四郎左衛門等在之と見へたり又武徳集成（五ノ十五）永禄五年八月六日の条に長沢松平侯へ賜ひし領地の印章に四十五貫文市田半方瀬と見へたり

鳥居強右工門勝商は当所の出生なりとぞ

八幡ちかきところ牧野四郎左衛門尉宿所本野原と云

野を分て至り一日連歌あり

手　記　ゆく袖を草葉のたけの夏野哉　宗　長

○東海路左の方本坂道より左に在り

諏訪茶屋

同村の出郷なり本坂道と鳳來寺道との追分なり

本野村

本野村は吉田駅より北三里許にあり郡名起原の処に挙る如く当村即郡名の本土なるべし宝飯郡は元宝飯郡（ホノカハラ）当村は宝飯村（ホノムラ）今宝川（タカラ）と云は宝飯川（ホノカハ）今本野原と云は宝飯原（ホノハラ）なるへしと官社考に見へたり

本野原

本野村より南に当る土人本野が原と云藻塩草に云宝飯郡にあり又和訓栞に云本野が原は本飯郡より轉じたる名にて今も本野村云々と見へたり前の本野村条合せ見るべしさて此原

燒地藏

は往古当郡佐脇原より東北此本野が原かけて引馬野と云しならんそは当郡引馬野の処照し見るべし其後こゝを本野が原と云ひて鎌倉への海道なりしこと左に記せる歌詞を以て知るへきになん

新選六帖　住なれしもと野の原や忍ぶらんうつす　右大弁光俊卿

むしやにむしのわぶるは

貞応海道記　かくて本野が原を過れば嫩かりし蕨は春の心を生昔りて秋の色うとけれとも分行駒は鹿の毛に見ゆ時に日重山にかくれて深夜に立出て見れは

云々　源朝臣光行

ほむの川原に打出たれはよもの望かすかにして山なく岡なし秦甸の一千余里を見わたしたらんこゝちして草土ともに蒼茫たり月の夜の望いかならんと床しくおぼゆ茂れるさゝ原の中にあまたふみわけたる道ありて行末もまよひぬへきに故武蔵の前司道のたよりのともからに仰せて植おかれたる柳もいまだかげとたのむまではなけ

れともかつ〳〵まつ道のしるべとなれるもあはれなり下畧　源朝臣親行

仁治紀行　植置しぬしなき跡の柳はら猶その

かげを人やたのまん

月清集　うつしうゝる庭の小萩の露しづく　後京極良経公

もとのゝ原の秋や恋しき

本野原合戦

東海路左の方本坂道の又左に在櫻雲記巻中正平六年北朝観応二年正月恵源南方の軍兵を催し京を攻んとす桃井直常是に応じ北國より攻上る尊氏飯京の合戦直常敗軍す然れとも人皆師直を悪て恵源に從ふ故に尊氏西国へ落行中畧同八月五日三州本野原に於て冨永高兼同直資と恵源方冨永直兼合戦高兼直資敗軍して戦死す八月尊氏北國へ赴んとす云々見へたり

僧力壽姫の霊に逢ふ

三河雀巻四ニ丁に云神無月始の比三河国本野原をある桑門の通りしに俄に日暮野寺の鐘も聞へす人家に煙りおほいて定かにも見へさればあじきなく鴨の長命可敬云長明なりか蕨ふみわけたる野原の玉ほこたどり〳〵て宮路山の紅葉も見まほしき心をたへ金烏とゞめん魯陽が術もなく衣をかゝげていそぐ処に燈かすかに見ゆれば嬉敷木陰に立よれば内の体三所に高燈台か

張僧繇畫雲龍之圖

丶げ家居さわやかに侍る欄干により窺ひければ琴の音しばし絶しに二十ばかりなる女房長き髪をたよ〳〵とふりかけらうたけたるよそほひにて童女子に手燭もたせて端ぢかくゆるき出衣紋をつくろひ袖をかゝけて僧に向ひてわらわは此家の主に侍る御僧は何地より來らせ賜ふ聞かまほしやと云は愚僧は遥か遠國の者にて候が本野の原より俄に日の暮て候行衛さだめぬ獨坊主に候へば斯る人家を便りに立寄侍る見奉ればやんごとなき女性の御身にて斯くいぶせき野原の家に何とて住せ賜ふらん覚束なし出家の事に候へば今夜の御宿は色をも香をも知らせ賜へと云へは主の女性昔の江口の君は西へ行人に宿ををしまれたると承る妾はそれとは違ひまし草の枕もよしや君かり寐の夢をおしむべき今夜はこれに御休らへ申に付て恥しけれとも先に我身のすくせを問たまへはあからさまにしらせ侍る世の中の人の心は白むくの染てくやしき其色の名も赤坂の長者長福が娘に力壽の前と申遊君にて候が曰も西山にかたぶけはあふさきるさの旅人に打馴朝な夕なの身の勤めつらく重るさよ衣我妻ならぬ仇枕寐覚の床のくやしく三年月日を重ねつゝ人見曲輪に身をよそほひなかれの竹のうき思ひつらき中にも妹背山過世おかしきものそかし我かづらきの神姿此国の史將大江定基に見初められ後はわりなきあいさつ漢宮の栄花もたとへて云はゝ塵ならん此船山に月花を写し遊仙台と愛しつゝ長生不老をそねみしに定めなき人世ぞや俄に病の床にふしつれなくも黄泉におもむきしかなしや地獄の分野御僧に語り申さん娑婆にて作りし罪障の山高くその悪業は定張の鏡に移り替るな替らじとの空誓文獄卒鉄鋏にて舌をぬく夜毎の客の极盃

打こぼす酒のしづく水火の流れと成て大紅蓮にたゞよふすでにわらは命終に近づきしときに君名殘をおしみつゝ目を吸口を吸つて舌を吸出し賜ふ此愛念に輪廻して終にまどひの種と成かかる苦み見賜へとてうつくしき丹花の唇より一丈余りの紅の舌をぬつと吹出しあゝかなしやと倒れ花の姿を変しつゝあらぬ形と成たすけ賜へ御僧と衣の袖にすがれは僧は出廣長舌は弥陀のちかひなりと思ひ南無阿弥陀佛々々々々と唱へて紅の舌を打落せは姿は失て茫々たる草むらに文珠の像そ殘りける僧は奇異の想をふし里人に語れば昔日大江定基と云人有て此船山に力壽姫を愛し偕老同穴のかたらひをなせしに姫身まかりければなきがらを此里の傍に石経書て葬られし其亡魂のあらわれてさこそ候にやと云は僧はいよ〳〵哀におもひ文珠の像を安置し力壽山古根寺と号し菩提をとぶらふとや

六十塚

本野か原に在太田白雪の続柳陰に云こは往昔永文と云聖六十六部を納めし経塚なり永文菴室の跡は豊川村にあり六十六塚を六十塚と畧すること六十六部を六部と畧するが如しと見へたり

常心院

東海路左本坂道亦左に有西原村に在寄藻翁の云三河國西原の常心院は定基朝臣に仕へし女房尼になりて此里に菴を結ひて常泉院と名付彼朝臣も坊にふれて此菴に來りて逝しとそ土人此旧地を尼の御所と云ふと三河堤に見へたり

本尊

三川竹

三河堤に云定基朝臣愛し賜ひし三州竹を分て植置しとて今当院の側にありと見へたり

雨中の柳をよめる

三河記　はるさめの柳の枝の糸にもれておしまぬ　常樂尼

花や下草の露

羽鳥大明神

東海路より左本坂道亦左足山田村に坐祭神素盞嗚命例祭三月八日当一村の産土神とす神主加藤氏

國内神名帳に云正五位下服織天神は宝飫郡に坐とあり此社旧くは今の社地の麓にありしを慶長年中今の山に遷し奉れり其旧跡田の中に少し空地ありて大杉二本立り其辺の字をハトリと云と加藤氏の物語りぬと神名帳集説に云へり

古城跡

同村に在当城はは秋山新九郎居住せし由二葉松又奥平家略譜に云へり秋山は武田家の士なりと三河堤に見へたり

四國八十八ヶ所の像

犬頭明神

東海路より左本坂道亦左に在千両村に坐祭神　例祭九月十九日神主大井氏当一村の産土神とす棟札に千両大明神犬頭宮とあり

当社は当郡兒渡(ウドト)庄千草郷下千両村に在て犬頭大明神と称す鰐口の銘に天文年中云々三河国宝飫郡千両郷信次とありこは近き年比羽田村常木八郎兵衛氏の屋敷にて掘出せし由其所は池田輝政君吉田城主の時の組屋敷の跡なりとぞ敬雄此社に参詣して其村人に問ふ古老の云傳に古往或浪人体の人來りて此村を開発せし時其人犬を連來れり然るに其犬金を糞す其金毎年千両(チギリ)つゝ有しゆへ村名を千両と号すさて其犬死して埋たる処に社を建て犬頭大明神と号す又此村の出郷に大崎六角と云るニ村あり大崎は旧は尾崎と書て彼犬の尾を埋し処亦六角は犬頭に六角の角の如きものありけるそれを埋られたる処なり今近村に足山田村と云るありこはその足を埋たる処と云傳へたりなと物語れり余今昔物語の故事なと語り聞かせつるに村中にて其事知る人曽てあらずと云り扨社内に大木有て朽果たり其木を如何なる木ぞと問に朽て年歴を経し事故知人なしとぞ蓋桑木にてはあらざりしかと神明帳集説に見へたり下の犬頭糸の条合せ見べし

犬頭の糸

犬頭の糸の事諸書に挙ると虽も未た其産所を詳にせず蓋当村より献りしにはあらずや古写本今昔物語集六に云今昔三河國□郡に一人郡司ありけり妻を二人持て夫れに蚕養をせさせて糸多く儲ける而るに本の妻の蚕養何なる事のありけるにか蚕皆死して養得事なか

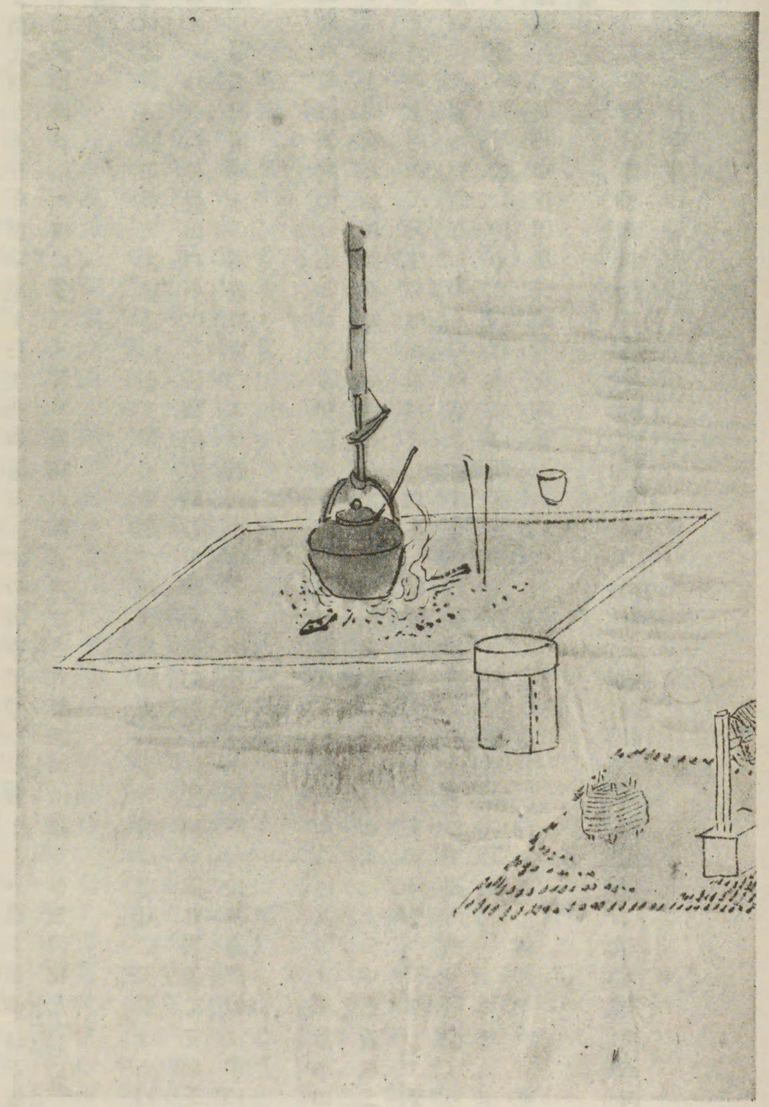
りければ夫も冷かりて不寄付成にけり然れば從者共も主不行成にければ家も貧く成て人も
なくなり如然れは妻唯一人居たるに從者僮に二人計なん有ける妻心細く悲きこと限りなし
其家に養ひける蚕は皆死ければ養蚕絶て不養けるに蚕一つ桑の葉に付て咋けるを見付て是
を取て養けるに此蚕只大きになれば桑の葉を擺入て見れば只失ふこれを見て哀に思ひけれ
ば掻撫つゝ養ふに此を養立ても何かはせんと思へども年來養付たることの此三四年は絶て
不養けるに斯く不思に養立たるが哀に思ひければ撫養ふ程に其家に白き犬を飼けるが前に
尾を振て居りけるに其前にて此蚕を物の蓋に入て桑咋を見居程に此犬立走て寄來て此蚕を
食つ奇妬く思ゆれとも此蚕を一食たらんに依犬を可打敏(ミ)にあらず然て犬蚕を食て呑入て向
ひ居たれば蚕一つをだに不養得て宿世せけりと思ふに哀に悲しくて犬に向て泣居たる程に
此犬鼻をひたるに鼻の二つ穴より白き糸二節一寸許にて指出たり此を見て怪くて其糸を取
て引は二筋繭に多く巻取つれば亦異巻に亦□ぬれば亦異繭を取出て巻取る如此して二三
百の繭に巻取るに盡もせぬば竹の棹渡して絡懸尚其にも尽せぬば桶共に巻く四五千両許巻
取て後糸の畢被絡出ぬれば犬倒て死す其時に妻是は神佛の犬に成て助け賜ふ世けりと思て
屋の後に有畠の桑の木の生たる木に犬をば埋めつ然て此糸をば細して遣方无して繚ふ程に
夫の郡司物へ行とて其門の前を渡ければ家の極を□氣にて人氣色もなければ□に哀と
思ひて此に有し人何にしてあらんと糸惜く思ひければ馬より下て家に入たるに人もなし只
妻一人多くの糸を繚居たり此を見るに我家に蚕を養冨で絡懸る糸は黒し節有て弊し此糸は

雪の如く白して光有て微妙き事无限此世に類ひなし郡司是を見て大に驚きて此は何なる事
そと問へは妻事の有様を不隠語る郡司是を聞て思はく佛神の助け賜へる人を吾愚に思ける
事を悔てやがて留て今の妻の許へも不行して棲けり其犬埋に桑の木に蚕彈て無蚕を作りて
有然れば亦其を取て糸に引くに微妙き事无限郡司此糸の出來ける事を國の司□と云人に
語て出したりけれは國の司公に此由を申上て夫より後犬頭と云糸をば彼國より奉るなりけ
り其郡司が孫なん傳へて今其糸奉る窰戸にては有なる此糸をば藏人所に被納て　天皇の御
服には被織せけり　天皇の御服の料に出來たりとなん人語り傳へたる今の妻の本の妻の蚕
をば構て敏(ビ)たると語る人も有　に知ず此を思ふに前生の報に依こそは夫妻の間も返合ひ糸
も出來けんと語り傳へたると世又神明帳集説に云延喜式九(ヨツ)丁主計寮式の上に云三河二千絇
犬頭糸　又同書四(ヨツ)巻十　諸國調輸錢の条に三河國云々犬頭の白糸二千両調(ツキ)とも見へ亦和訓栞(シヲリ)一丁に
云犬頭の糸と云事今昔物語にあり又彼足山田村に服部天神鎮座又其隣村の東上村産土神を
繭繰明神と称して安産の守り神にて人皆其賽報には必す小キ繭に糸を巻て献るなども今昔
物語の故事に由縁ありげ也考ふへしと官社私考に見へたり

鑄物師

金谷村に在当鍛冶は何れの頃より始まりしと云事未た詳にせす森村天王社の鐘銘に寛正五
年(凡三百八十年)云々中条郷北鍛冶村云々見ゆ又牛窪密談記に云天文七年(凡三百六年)牛久保城に牧野出羽
守保成守護す当時鍛冶大工異論の事見ゆ其時牛窪より証文を出せし事あり宛名は北金谷大

犬頭糸之故事



工助九郎とあり今世中尾十右工門中尾与三次の両家繁栄して数千人の職人を使ひて産業とす其鑄器は多く大坂に運送す其が荷物の夥しきこと大概諸国に冠たるもの欤

古宿村

当村は東海路左の方本坂道に在て豊川の南に在往昔鎌倉將軍の頃は宿駅にて東は当村の坂口まで北は今の豊川村かけて皆宿内の地なりけん坂口の下は豊川の流れ貫通して前芝にて海に落る其頃旅人の宿舍は坂口より西へかけてありしと見ゆ其は貞応海道記の文中に見へたり

可敬追考に云世に何宿と称する処古人多く古駅の跡なりと云へとさにあらす往昔市中の傍には必す何宿とか又は別所又は隠内なと名付し所あるものなり如何にと云に古昔は土人まで也汚穢を忌みて死生のけがれはさらにも云はす小事の汚れにも彼何宿へさがりて別居し忌明に本宅へ歸るなり斯れは何宿と称する処古駅の遺跡にはあらず彼汚穢の宿なりと悟るべし必す繁昌せし所のかたわらには何宿と云処あるべき事はりになむ

古屋敷

同村に在田部民部太夫同筆人

松鷲山花井寺

寺領十五石禪曹洞派本寺同郡豊川妙嚴寺開山東嚴文兼和尚三河國聞書に云天文十五丙午年古宿村花井寺建住持勧請

本尊

地藏堂

船井塚

二葉松に云大江定基召仕の女花井岩井船井と云三人尼となる死後此處へ埋地藏を建るとと云

豊川村

東海路より左本坂道の又左に在当所は吉田駅より一里半許北の方に在武德集成五廿五長沢家へ賜ひし印章に四十貫文豊川又同書八ノ五十五貫七百文豊川市場方と見へたり和名抄に当郡豊川止与加波東鑑三十二ノ五丁嘉禎四年正月將軍頼経卿上洛の条に七日着御豊川宿又同書三十ノ十丁同十月同卿飯路の条に十八日云々入御矢作宿十九日云々着御豊川駅廿日出御本野原云々又貞応海道記に豊川の宿にとまりぬ深夜に立出て見れば此川は流れひろく水深くして云々又仁治紀行に豊川と云宿の前を打過るに云々なと見へたり憶ふに豊川は往昔宿駅にて今の古宿村より東の方同村坂口まで北は今の豊川辺かけて駅中なりけん且前文にあなる深夜に立出て云々なと思へは当時豊川の流れ牛久保篠東豊川辺の岸通りを流れし事明なり斯れは豊川の流れをかゝへし所なるゆへ豊川駅と呼しと見ゆさて当今川筋替りて東に依れり抑当駅の事貞応海道記に始て見へて今世を去事凡六百廿余年先の宿駅なり亦其先八百年代に至りては当駅の名は見へすして鳥捕山綱渡津の三駅のみ延喜式に見ゆ亦六百年代に至ては渡津の駅は衰微して当駅起りしものならん其頃は今の赤坂宿西南に当る宮路山を超へ國府に今の國府八幡久保村辺往昔府の池中欤かゝり本野原を過て当駅に至り古宿村東の坂口を岸通りに北へ通りて今の三明寺の右にある

鎌倉海道（今三明寺石に鎌倉海道と云処あり）に出夫より再び亦本野原にかゝり豊川の流れを渡りて赤岩村石前村（今岩崎と書なり）など経て舟形山（雲谷山を云）を越る夫より遠江國橋本駅に至る又仁治の紀行を考ふるに八百年代志之須杳渡絶にし故其後六百年代まて其中間二百年の間は旅人皆此豊川へ掛りて通行せしが志之須杳の入海漸々陸地と変化せし故六百年代仁治の頃に至りて一筋の道を開く是を渡津の今道と云（今の小坂井より吉田までなり）尓來旅人多く其道に掛りて通行せし故亦当駅日を逐て衰微になりけんさて当所の人民彼今道の街道へ家居を移しゝ事仁治の紀行に見へたり河辺に過類くは雜部海道変革の条又当郡ニ見道又渡津今道の条など合せ見るべし

名寄　風わたる夢のうきはしとだへして　鴨長明（衣笠内大臣イ）

袖さへふかき豊川の里

豊川の宿にとまりぬ深夜に立出て見れは此川はながれひろく水深くしてまことにゆたかなる渡りなり河の石瀬に落る浪の音は月の光にこへたり河辺に過類風の響は夜の色白し又みぎはひなのすみかには月より外にながめなれたるものなし

貞応海道記

しる人もなきさに浪のよるのみぞ　源朝臣光行

なれにし月のかげはさしくる

豊川と云宿のまへをうち過るにある者の云ふをきけば此道を昔よりよくるかたなかりし程に近頃より俄にわたふつの今道と云ふかたに旅人多くかゝる間いまは其宿は人の家居をさへ外へのみうつすなどぞいふなるふるきをすてゝあたらしきにつくならひさだまれることゝ云ひながらいかなる故ならんとおぼつかなしむかしよりすみつきたる里人の今更ねうかれてこそかの伏見の里ならねどもあれまくをしくおぼゆれ

仁治紀行

おぼつかないさとよ川のかわる瀬を　源朝臣親行

いかなる人のわたり初めけん

千本天神社

同村西北の方原野に坐牛窪窟談記に云豊川柳の室は大江定基植賜ひて千本の天神を勧請なし賜ひぬと見ゆ是定基朝臣にはあらず北条泰時朝臣なりそは本野原にあげしに治紀行を以て知るべし扨当所は本野原東の端にて此所より八幡村辺までは其原凡ニ里許もあらん廣野世斯かる廣野ゆへ暑中には通行の人暑さに堪へすして衆人之を憂へければ泰時朝臣是か為に柳を多く植させて旅人炎暑を避るの便とすさて当社の鎮り座所は彼柳を多く植ける所故

千本天神の号ありと土人の口碑に存す亦当社の傍に柳下なと云字の地所あり往昔鎌倉將軍の頃は旅人当郡ニ見道より此千本の柳へかゝりて通行せしと見ゆ武德集成訪永禄六年長沢家へ賜ひし領地の印章に千本給又星野給なと見へたり其頃までは千本給と呼し事明らかせ又白雪の云東三河千本の柳は文台に用ゆるよしある諸侯よりたのみありて調進せしと云へり

古屋敷

同村に在十王堂より北の方に当る二葉松に云右大將頼朝卿幼少の頃大江入道定嚴住居す後小笠原少目水野佐渡守同八十郎領三千石寛永七年八月廿八日卒と見ゆ鎌倉実記に云伊豆日記に曰永暦元年三月二十日朝曇巳刻天晴出都趣伊豆配所彼國坪領使藤原祐親代官狩野茂光在京於于六波羅侍所小行司坪預流人前右兵衛佐頼朝畢國人清田太郎南条四郎右衛門尉請取下向雜色徳黒一人許之彼者弥平兵衛宗清預之時介抱与國廣等奉公之志深者也申畧三月廿三日熱田差申畧二十五日矢作宿二十六日大江定嚴豊川館休息定嚴大江三河守定基末孫熱田大宮司有所縁云々見へたり

○大日本史九十九列傳廿六皇子四 成良親王傳云建武二年北條時行襲鎌倉成良与直義出走直義留三河大江時古成良還京師元弘旧記裏書 とあり此事敬雄の神明帳集説に加茂郡大井天神の条に出す

水野八十郎墓

同村　境内に在三河堤に云水野八十郎は当村の住人なり悪人にて下人に弑せらる今此墓時々火燃る事あり此人の悪行此辺口碑に種々調傳ふる也此人の鏡今鳳來寺鐘堂正面に在大方鏡なり彼の堂の処合せ見るべし

龍雲山三明寺

寺領二十石禪曹洞派本寺遠州濱松普濟寺今妙嚴寺預り寺なり開基大江定基

本尊

辨財天女

三河堤に云辨財天女の持賜ふ虞の琵琶は大江定基朝臣所持の名絃也と云傳ふ此像御長常人の如く和服を着し賜ふ諸願ある人の寄附に依て時々服を着替させ奉る寄付なき時は住僧服を奉るとそ天女の面容佛像にあらず殊に和製の服を用ること不審なり熟按るに当寺開基の時定基朝臣愛妾力壽姫の像を彫刻して納め置けるに後人誤て弁財天女と心得宝冠を添て辨財天と称せしならん定基朝臣の秘藏の琵琶を持せると云和製の服を用ると云ひ面容佛像にあらざるなど旁おもひ合するに決して辨財天女の像にはあるべからす能く心を付て拜すべし正月七月十六日参詣の人群集を為す霊験尤多しと見へたり

柳原

同村に在古歌名跡考に云按るに豊川村に千本社と云有て柳の古木一株あり是其旧跡なりと或人云へり又白雪云東三河の千本の柳は本野ケ原にある所の柳の事なりと云り文台に用ゆるよしにて或る諸侯よりあつらへありて調進せしこと有しと云へり

円福山妙厳寺

同村に在寺領四十五石禪宗曹洞派開基東海和尚本寺遠州浜松普濟寺当寺は往昔東南の崖に
ありしと見ゆ

○梅園の寺社鏡に献上一束一本 住職弟子譲り ○入院御礼無之本寺遠州普濟寺より申付 ○年
頭御礼面御次一同 ○御暇無之

本尊

塔頭

山門 本堂の前に在

籠り堂 本堂右の方に在

鐘楼 山門の傍に在

手水鉢 本堂右の方に在

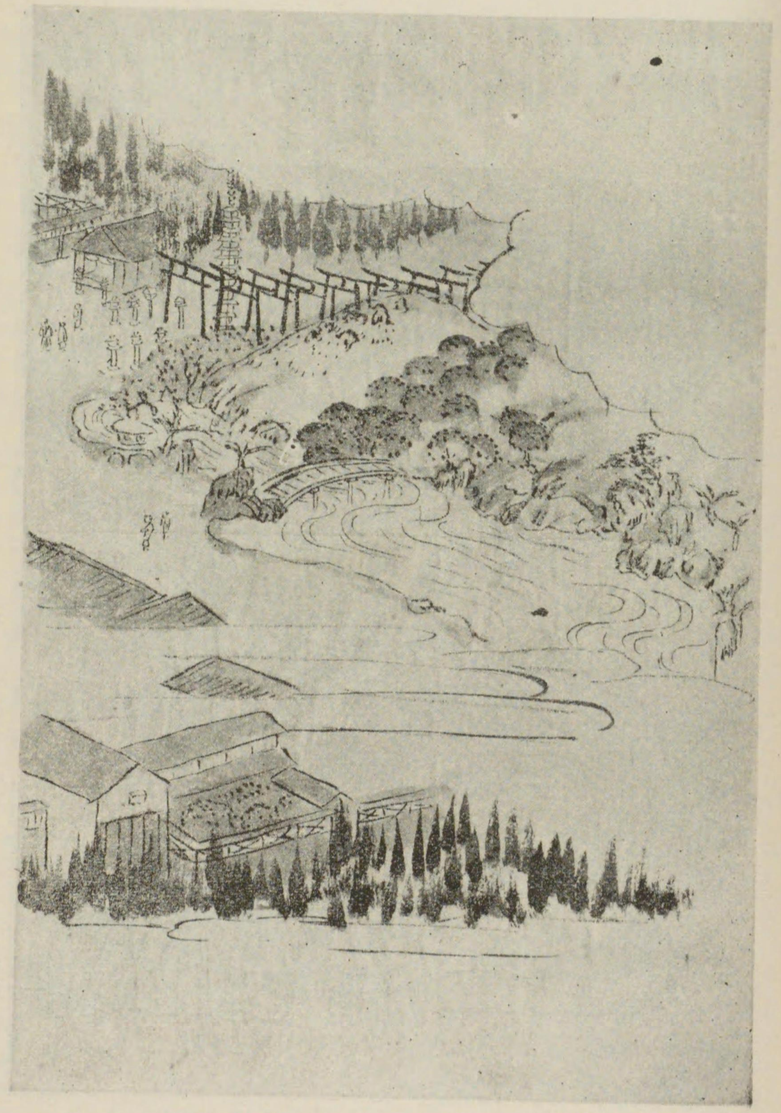
額堂 本堂右の方に在

秋葉祠 本堂右の方に在

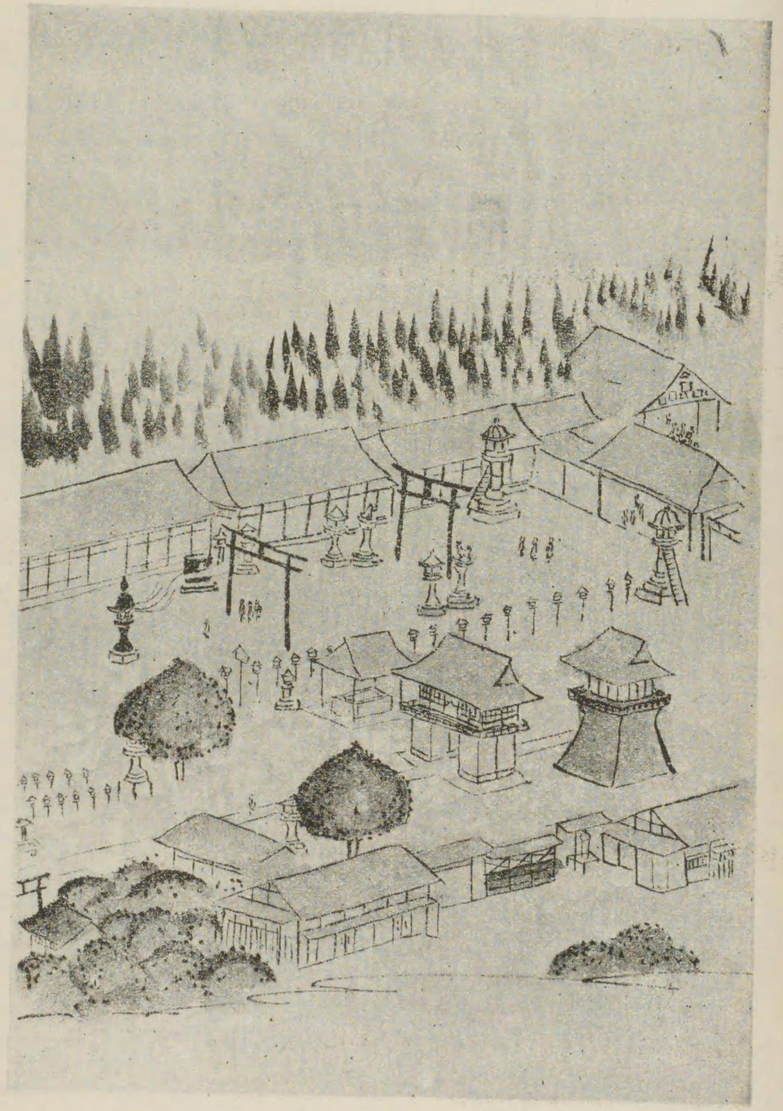
福壽石 奥の院入口に在

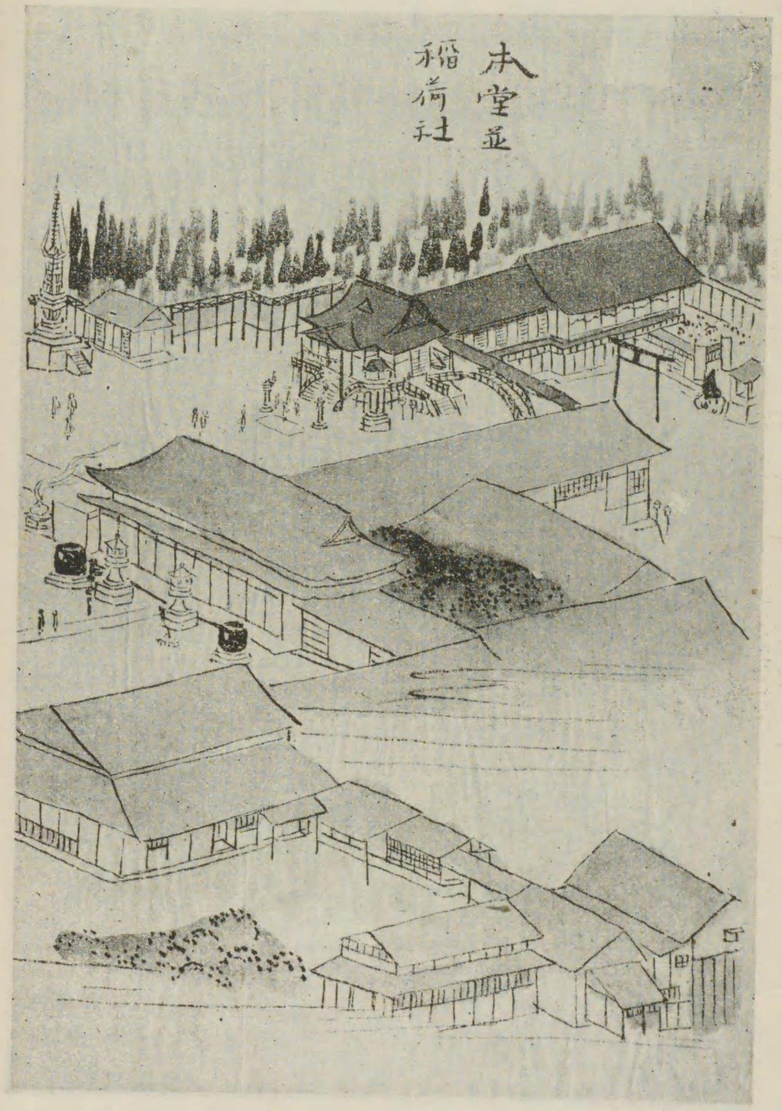
鎮守稲荷社 本堂西南の隅に在当寺の鎮守たり世諺并畧に云三州豊川村平八狐云々又野
翁物語に云平八いなりとて近來時行の神あり云々見へ又刪補松に云当寺境内に平八と名
くる狐あり近年祠を建稲荷大明神と崇むと見へ又渡辺政香の云宝暦の頃吉田領西島村よ

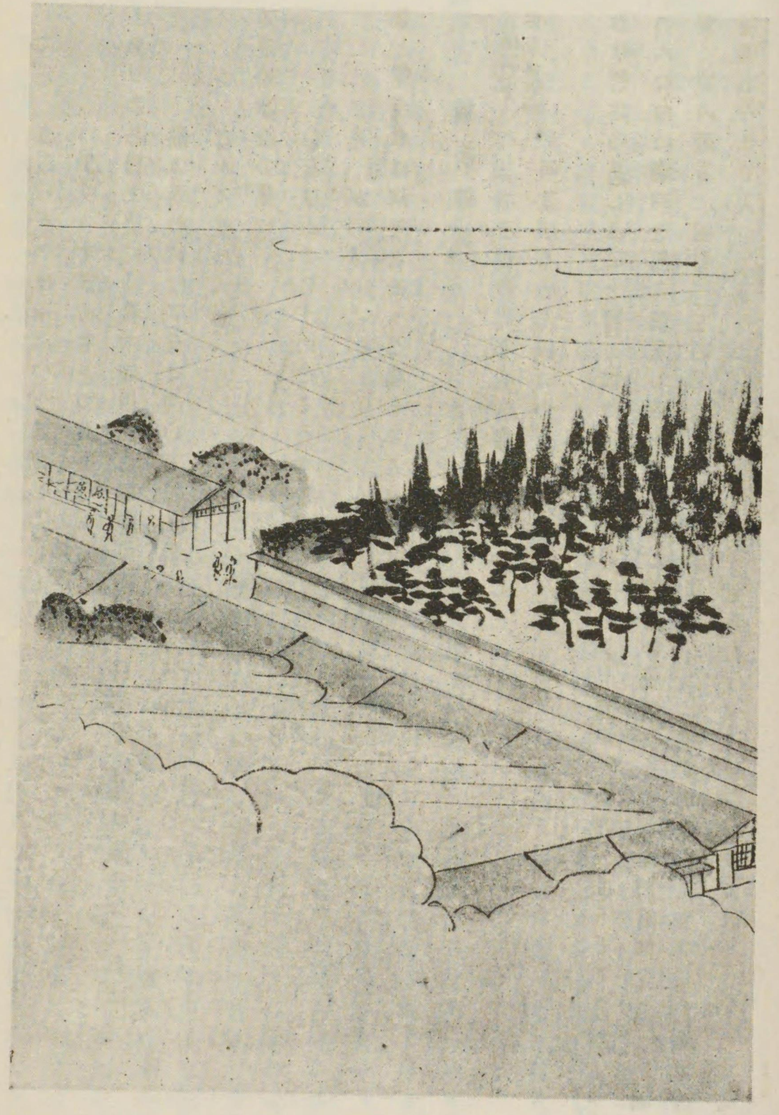
り豊川村妙厳寺境内平八狐の婿になりたりとて婿入の夜は西島より豊川までの野道松明
を数百燈したる如く燦然たりしと謳歌し夫より参詣たへず尤霊験新たなりと見ゆ抑稲生
神は書記神代巻一 保食神の腹中に稲生とあるを本據とすイナリは稲生の義にして稲
は飯の根生は生産の義なり書記万葉に生成産業の字皆なりと訓せり伊勢國奄藝郡に稲生
村あり延喜式に伊奈冨神社又朝野群載にも見へて保食神を祭れり又文永五百六十九年十一年正三
位藤原経朝卿の書賜ひし額に正一位稲生大明神と有とぞ然れば稲生と書へきを文德実録
に九百五十余年稲荷神三前とあれば古昔より稲荷と書き來りしと見ゆされとも荷の字古書にりと
訓たる例なし一説に荷はハリと通り古は稲荷と云しならん云々又書記神代巻の一書に伊
奘諾尊伊奘冊尊飢時生兒倉稲魂命倉稲魂此云宇介能美施磨と号く亦諸社記に云 元明天皇和銅四年二月
九日倉稲魂神始現于伊奈利和漢合運三和銅四年稲荷神現ル地主神は則荷田明神也其地祀之故に稲荷大明神と
号す又豊葦原卜定記に云辰巳乃方に当天倉稲魂乃垂跡阿知夫神和百穀於播玉故に名奉神
代乃昔与利此峯に向玉毋不知只三峯に顕玉之和人皇四十三代 元明天皇和銅四年辛亥二
月十一日に垂跡す誠に諸人哀憐之御心深々倉生作年物和草乃片葉末天百乃災於攘玉公事根元集解
に云和銅五年二月十日戊午初現于伊奈利三箇峯なと井沢長秀の俗説辨又茅原定の茅窓漫筆に見へたり因に云初午祭りの
事を按るに雍州府志に云稲荷出現は和銅四年二月九日也以長暦推之則其日当初午今亦用
九日而用初午之日諸人参詣俗謂初午と見へ亦新撰六帖に光俊朝臣の歌に

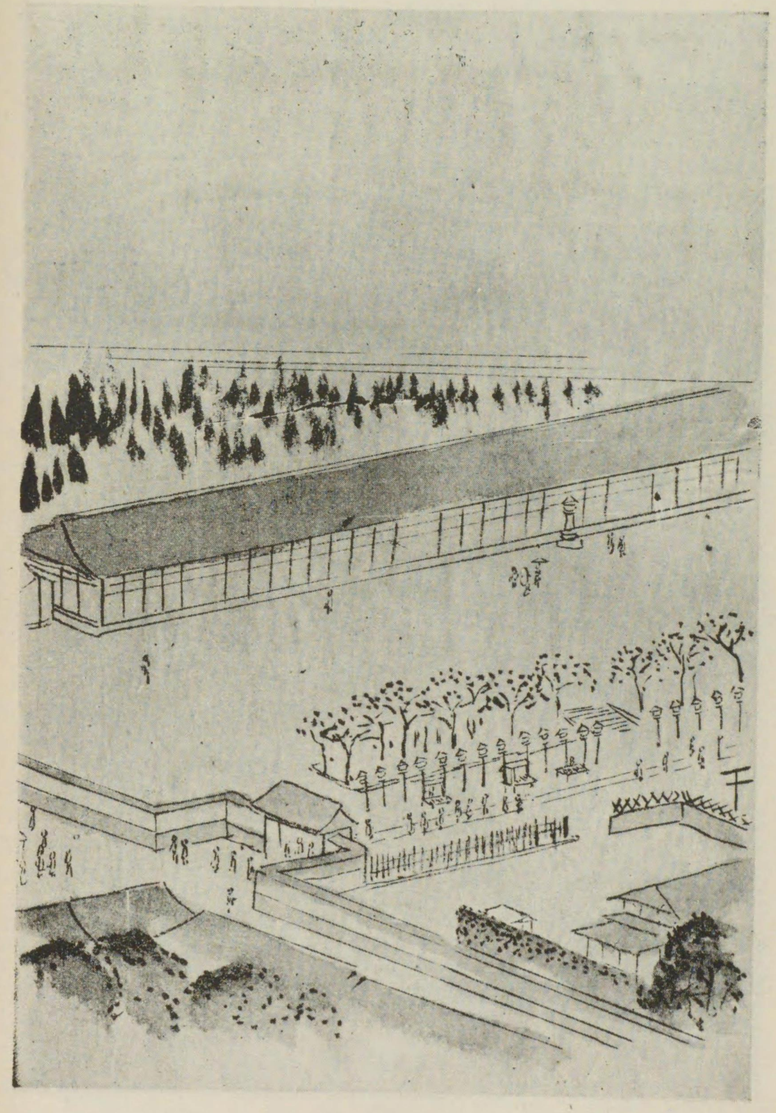


豊川林泉奥院之図




本堂並
稲荷社





きさらぎやけふはつうまのしるしとて
いなりのすぎのもとつ枝もなし

どありまた貫之集に延喜六年月並の屏風の歌に二月初午いなり詣でしたるに

獨のみわれにてなくにいなり山春のかすみの
立かくすらん

又源順朝臣の集に

いなり山そのへにたてるすき〳〵に行かふ人の
たへぬけふかな

など見ゆれは初午と云へる事もふるき世よりありし事と見ゆ

稲荷神詠

清輔朝臣の袋草紙巻四

なかき世のくるしき事を思へかし
何なげくらん仮のやどりを

当社感応の著しきこと響の物に応する如く形の影に嘯ふに似たり此をもて遠郷より参詣の人々日に増月を越て群集し往來連綿として常に絶間あらされば門前瓦を並べて酒飯を鬻く境内葭蘆に囲ひて左右茶店を列ぬ其繁昌なること都會の人も肝をつぶす殊に紛失の祈願出奔せし人の足止等にいたりては身の毛弥立ばかりの霊験挙て計ふへからす縁日は

廿二日になん　釈日連の神佛冥応論にイナリはせ二日と見へたり

義易禪師

洞上聯燈録五巻普済華藏義曇禪師法嗣ニ参州妙嚴寺東海義易禪師本州源姓幼業武甫十五為僧見老宿挙若不登樓望安知滄海源便知有宗門中事遂参宗匠即便放下身心如是十余年莫未嘗暫捨及参華藏入室次挙嚴頭見德山話問之師所疑頓釈後得徹悟藏以伽梨鉢盂付之時永亨十三年辛酉正月廿五日也泊藏遷化応世干普済法道大振三州豊川檀越某氏剣砂嚴寺延之不数載成叢席後坐脱於本寺

僧源髙之事

因果物語ミナに云三河乃土井川と云処に妙嚴寺乃源髙と云長老あり此長老の師匠牛雪和尚と寺公事致し江戸に三年つめて奉公所へ目安をさゝげ理運にして寺を請取たり其後はま松普済寺の輪番役に当りすなわち普済寺に住せらるしかる処に寛永十二年の春ある夜夢にあやしきもの來りてわれはゑんまの使なり源髙長老の存命十年の約束なりはや〳〵來り賜へとの狀をもち來るなりこれ〳〵見たまゝとてさし出す其狀を見れば此寺に入院してよりまことにはや十年なり夢中ながらもおどろきて硯筆をとり十の字の頭に一点うちて千の字に直して云ふやう唯今の口上はいつわりなり此狀は千年とありいそぎかへれと云ふ時かの使云やうたしかにゑんま王は十年とおほせられけるが千の字なれは力およばすとて歸りけり長老はゑんまで出て見賜へば門ぎわにおそろしきおに二人くろがねのぼうを引さげなわを持て立たりこれを見て長老やがてたえ入賜ふつよくおびへてうめく声を聞て僧衆おき來り何事にて侍ると云さておそろしき夢を見たりまづあせ

ぬぐへといふまことに水中より出たるが如し漸くに本氣になり賜へり其後妙嚴寺に皈り此祈禱に末寺の僧衆をあつめて日待をし賜ふに長老は唯一人室の中にねぶり居て又くるしみの声高し人々入ておこし参らせ氣をつけて後いかにと問へは唯今まだおそろしき鬼來て我を引立てゆかんとするをやう〳〵もぎはなしたりとて大あせをながすかくて牛雪和尚加茂と云所に隱居しておわしける処へ行て右両度の夢を委しく語りてさんげせらるさる程に寛永十五年十二月廿七日に篠田と云処の旦那死す彼の源髙長老引導に出賜ふに旦那の門に至りてあつと一声云ふて馬より落て申さるゝ様我にすこしも虚妄なしこれはこと〳〵くまどひかなと云て其まゝ無性になりにけり件の僧衆亡者をとふらひけり長老はのりものにて寺へ皈るせ八日には総身赤くなり吟声牛の如しせ九日には惣身ふすぼりたるごとく黒色になりいよ〳〵牛のやうにうめく声大なりその暮方に命終りたまへり地獄へおつる相の生なから顕れけるこそおそろしけれとあり

馬の眞似する僧　新著聞書十四に云三河豊川妙嚴寺の僧つね〳〵伯樂仕來るにいつとなく物くうことも手にはとらで口をつけしが後には豆をのみ食ふ馬のいなゝくまねして舌内通せず手足の働きも馬にひとし天和三年の今にありしと他宗の事ならば佛祖かけて語るまじきと同宗の僧申されし沙門のなすまじきわざにて現在より斯かるおそろしき業服こそかなしきにあらずや聞くも身の毛よだちぬと見ゆ

竜雲山三明寺

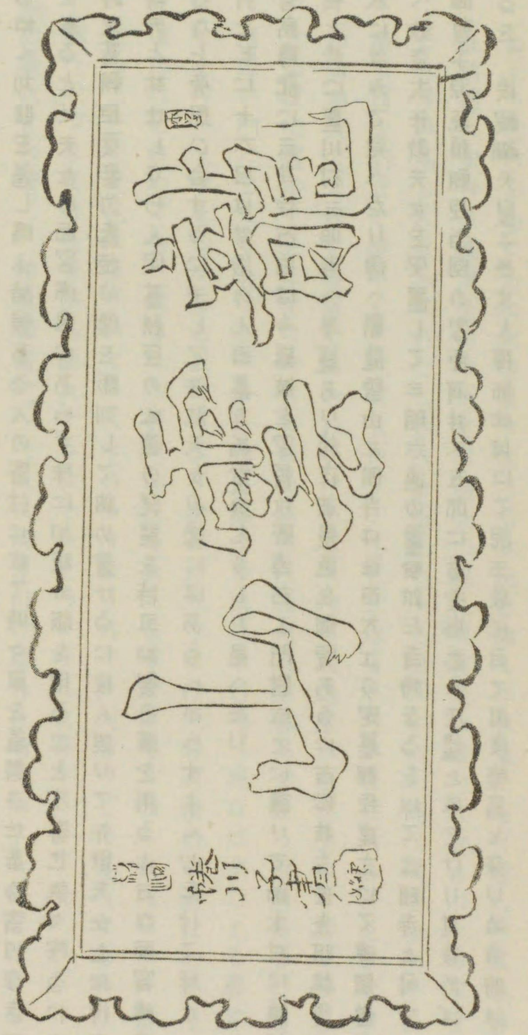
同村に在寺領二十石禪宗曹洞派本寺遠州濱松普齊寺今妙嚴寺の預り寺なり開基三河守大江定基朝臣と三河堤に見ゆ

本尊　間数録に云大御堂一阿弥陀堂四尺四方境内東西四間四方支配新右衛門とあり

辨財天女社

三河堤に云弁財天の持賜ふ処の琵琶は大江定基朝臣所持の名絃なりと云傳ふ此像御長常人の如く和服を着し賜ふ諸願ある人の寄付に依て時々服を着替させ奉る寄付なき時は住僧服を奉るとぞ天女の面容佛像にあらず殊に和服の服を用ること不審也熟々按るに当寺開基の時定基朝臣愛妾力壽姫の像を彫刻して納め置けるに後人誤りて弁財天女と心得宝冠を添て辨天と称せしならん定基朝臣の秘藏の琵琶を持且和製の服を用ると云ひ面容佛像にあらざるなと旁思ひ合するに決して弁財天女の像にはあるへからすよく心を付て拜すへし正月七月ともに十六日は参詣の人群集を爲霊験尤多しと見へたり

宮島傳記に云其後古白は今橋城を家督牧野傳右エ門尉成之に讓りて御本村に隱居す或時宗長と共に豊川村三明寺へ参籠あり終夜彼景色を御覽あるに古松枝を垂光明赫奕たる月輪池水に浮みて見へたり傳へ聞龍雲山三明寺は往古大江の定基朝臣建立にて佛閣僧房壬甍を並へ妙音大弁財天女を安置して三明六通の霊験新た奇特なるを以て三明寺と号す元暦年中蒲御曹子源範頼朝臣当國の家臣河井又五郎に責堂塔悉く灰燼と成てけり其後形ばかりなりけるを　後醍醐天皇子無文大禪師此所にて説法教化有て再度繁昌となりぬ当時は今川氏親の



明月　宗長

三男去無和尚住職故に別して古白も尊敬なれば終夜法樂の連歌ありしとそ聞へし

三明寺の年賊天に詣でゝ

三河藻塩草　しるしある池のこゝろや秋の月

室町殿日記第二

三好日向守亡父の命日ことに僧を請しけるにあるとき義貞は僧の生國はいつれにてと候やらんと問申けれは曰愚僧は丹州高卒都婆（高ソトバ塔ノ卍世）の生れにて候七歳にて父におくれ十一歳より法師に罷成てかなたこなた修業仕よし答ふ義貞聞給ひ度々聞及申候事に候へ共終に高卒都婆と申因縁をいまた不聞候珍敷在名に候〳〵所の生れに候へは其古事しろしめされん承らんと宣へは僧聞給ひて就中鎌倉最明寺入道殿は古今未聞忠賢將にてまします外は政を直にして内には慈善をひかへて民を安からしむこと迫願ひ給さるによつて下さまの事共直に聞召れん爲六十余州を只一人旅行おはします時に末世の形見と思召て國々に塔婆を一本宛建立し給ふ朽れは改させんか爲に其所の諸役を免除し給ふされ共星霜をふり又は度々の逆乱に依て諸國の卒都婆の退転仕ると口てたり然共丹州其頃の地侍さのみかはる事もなく大形とりつゝきける故に無恙今に相勤申候由申けんば日向守聞給さては鎌倉最明寺殿の御建立にて御入候哉まことに有難き御心さしに候物かなかはかりの大將は末の世に可有とも不覚とそ感せられける

○日藏上人感夢記曰日藏上人感見金峰山金剛藏王菩薩菩薩曰汝無慚破戒當墮地獄其地獄相

及閻羅王界見不答言欲見菩薩即申手敬北方幽邃之黒山中暑復至鉄窟苦所有四鉄山相去四五丈許其間有一茅屋屋中有四箇人其形如灰一人有衣覆背上餘三人裸形也蹲居赤灰曽無牀席悲泣嗚咽獄領曰有衣一人上人本國延喜三餘三人其臣也君臣共受苦王見佛子相招給即入茅屋敬屈奉王曰不可敬冥途無罪為主不論貴賤我是日本金剛学大王之子也然而隨共鉄窟苦所我居位年尚矣其間縱種々善亦造種々悪悪報先熟感得此鉄窟報出鉄窟之後善法愛重故当生花楽天乃上人還如我辞可奏主上我身切切辛苦早々救済給又摂政大臣可申為我苦起立一萬卒都婆可給三千度者一一塔婆法華涅槃普題如來證卅及読行無常等一偈拜佛頂隨求無所不至等大秘密令納七道諸國各々名山大海大路辺起立一日同時令供養給其度者諸寺諸山練行清浄沙弥近士誓求令度習行具足名僧三百口請三千人度者大極殿前可修佛名懺悔之法乃如此供養我生破レテ不明

三層塔　境内西南の方に在宮島專記に云其頃佛閣多く造り磨かせ賜ふ中に三重の塔有是は今川家牧野家風流を好み賜ふ故上一重は唐造り下二重は倭作りになす此図世にまれなりと見へたり

石橋　辨財天女の前に架す

門の額

入定の松　境内入口東南の隅に在

竹　当寺境内の竹は其廻りいと太く其性殊によろしければ風流の人々賞愛して花器に用ゆ濱臣翁家の集にも三河國豊川村三明寺の竹にてきりたる花入に豊川と云ふ名をおほせて

〜〜浪の花とはにさかせよ梓弓引とよ川のなかれての世もん

なとよめり

宗牧東國紀行　さらばこれよりとて西郡九衆はかへしつ又牧野平四郎と下きむかわれて田三郎豊川の寺にてまたれけるよしなり長老母出座有て盃たひ〳〵歴々のしたて過分なり酒半無理にまかり立たれば道まで色々持せられて平四郎平三郎其外同名中冨長也かくまでおくられて云々

蜻蛉日記上天暦八年　とあるほどにわがたのもしき人みちのくにへいでたちぬときはいとあわれなるほどなり人はまだみなるといふべきほどにもあらず見ゆることはたじさしくめるの見ありいと心ほそくかなし

きことものにに見る人もいとあわれにわする
まじきさまにの見かたらふめれと人の心はそれ
にしたかふへきかはとおもへはたゞひとへにか
なしう心ほそき事をのみおもふいまはとてみな
いでたつひになりてゆく人も勢きあへぬまであ
りとまる人はまいてゆふかたなくかなしきにと
きたかひぬるといふまでもいでやらず又みなき
すゝりにふみをおしまきてうちいれて又ほろ〳〵
とうちなきていぬしはしは見無心もなしみいで
はてぬるにためらひてよりてなに事とそと見れ
ば

後拾遺別

きみをのみたのむたひなる心にはゆくすゑ
とほくおもほゆるかな

とぞある見るべき人見よとなめりとさへおもふ
にいみじうかなしくてありつるやうにおきてと
ばかりあるほどにものしたりめもみあわせずお

もひいりてあればなとかよのつねのことにこそ
あれいとかうしもあるはわれをたのまぬなめり
などあへしらひすゝりなるふみを見つけてあわ
れと云ひてよととてところに

後拾遺

われをのみたのむといへばゆくすゑの
まつをちよをもきてこそは見め

となんかくてひのふるまゝにたひのそらをおも
ひやるたにいとあわれなるに人の心もいとたの
もしけには見へずなんありけるしわすになりぬ
よかはにものすることありてのぼりぬゆきにふ
りこめられていとあわれにこひしきことおほく
なんどあるにつけて

女

こほるらんよかわのみづにふるゆきも
わがこときへてものはおもはじ

なといひてそのとしはかなくくれぬ

簑寺　同村に在准坂東拾九番に

〜ゆきあられあめをもしのぐみのでらの佛のちかひふかきとよ川〜

本尊

産物　煙草同村に産する処最よし

柴屋宗長

掌中書画年契に云宗長三河人也永正九壬申年柴屋宗長依今川氏親之招移居駿河藁草庵号柴屋軒

東海道名所図絵巻四に云連歌師宗長古跡　柴屋軒宗長法師は　後花園院御宇文安五年駿州島田邑にて誕し幼にして敏智たり國守今川上総介義忠之を愛して左右に近仕する事三年十六歳にして宗祇法師に謁して連歌を学び世に鳴十八歳にして薙髪し醍醐普捨院にて灌頂を遂紫野一休和尚の禪扉を敲く四大本來空を悟り大德寺の山川再興に力を尽し縁を慕ふて風雅に道遙し諸國に遊ぶ明応四年宗祇法師に　勅有て新筑波集を撰す其内に宗長の吟二十八句あり永正九年今川氏親の招請に依て此泉谷に卜居して菴を結ひ自ら柴屋軒と号し風流を專らにして一節切を嬢て常に老を養ふ閑居幽邃にして西の方に天桂峰聳へ東の方に吐月嶺の清輝鮮にして庭中に水を湛ふこれを七星池と云曾て庭前の風色宗長の好にして庭作りの法を漏さず老松枝たれて風の音濃かなり終に享禄五年壬辰三月六日八十五歳にして此に寂すと載たり生長の地三州駿州の両説あり後人の考をまつと渡辺政香の三河誌に見へたり

下地村　当村の事実前に云りされど道の序次によりて再ひこゝに地名を挙ぐ

古屋敷　東海路より左の方新城道芝居村に在二葉松に云山縣三郎兵衛暫く忍居しと云

定方塚

同村に在二葉松に云定方塚五輪石塔有又定方天王祠坐と見へたり今五輪石塔の在所詳ならす憶ふに定方天王祠の少し北に塚の形聊存せり土人は地藏尊なりと虽も恐くは彼塚の跡ならん

大村藻

大同類聚方一八十丁加比世万比の条に三河国口郡大村乃家迩傳而朝家ホ所上奏之方也藻法之

○藻は古比須　久壽世迩の二味也本書を考べし

星野里

東海路左の方新城道又右に在今行明村と云吉田駅より北一里余りに在三河藻塩草に云星野は宝飯郡行明村なり今行明村に星野明神の社あり和漢三才図絵に星野は在豊川東又日本鹿子六十三にも星野は豊川より東方にある名所なりと云り又名所方角抄六十豊川の条に星野など云ふ処に近しと見へたりおもふに行明村は往古星野里と云しならん今行明柑子正岡辺を星野庄と云　光明天皇の御宇暦応年中の比此辺を星野行明と云し人領せしより以來行明村と呼しものならん又群類五百一四十丁康正二年造内裏段銭帳に三貫文毛利宮内少輔三州行明段銭とありまた武德集成六十丁永禄六年　神君より松平主殿助へ賜ひし領地の印章に千本給星野給

三明寺
馬場三
橋牧野
村之図

石望隨筆

高聲三明古燒宮
蒙鐘老勢晚風中
奮非怕道發明客
不免一時征性空

秋道岡

三明寺の竹ふてきりたる
毛入を見川てふ家を
おわせて

家集

なきのすゝ
けるふやうのせよ
樣ら引き川の
ゐのきて民世を
慶作

山ふまや
東天寺ら
西五

色いろ
やさしー
神の山家臣
慕社

など見へたり

星野大明神

同村に在当社は星野行明の廣なりしとそ往昔驗の松ありしが其木を伐て後当社を建しとなん

星野池

同村の中ならんされど其処詳ならず三河藻塩草に云星野池は八名郡下條の地脉也星野と云時は宝飯郡行明村なり星野某居館の地と見へたり二葉松に行明村に星野乃旧跡あり本歌ふ見又刪補松に下条村にあり星野とばかりは行明なり白雪云或書に三河国星野乃池の水を朝ごとに汲て宮古に登すと云り此事ふるくより云傳へし説とおぼしくて名所方角抄豊川の条に星野などと云所に近し星野とは名所なり昔みかわ水を奉ると云ふ説有之　帝の御びん水と云説如何と見へたり星野と云もふるき池と見へて太平記（巻五ノ四丁）に大島左工門佐義高当国の守護を給て星野行明と引合せて國へ入ける云々（続太平記巻六ノ十六丁相模国早川尻合戦の条にこゝに三河国足助西条星野の者共小勢と見なして云々）と

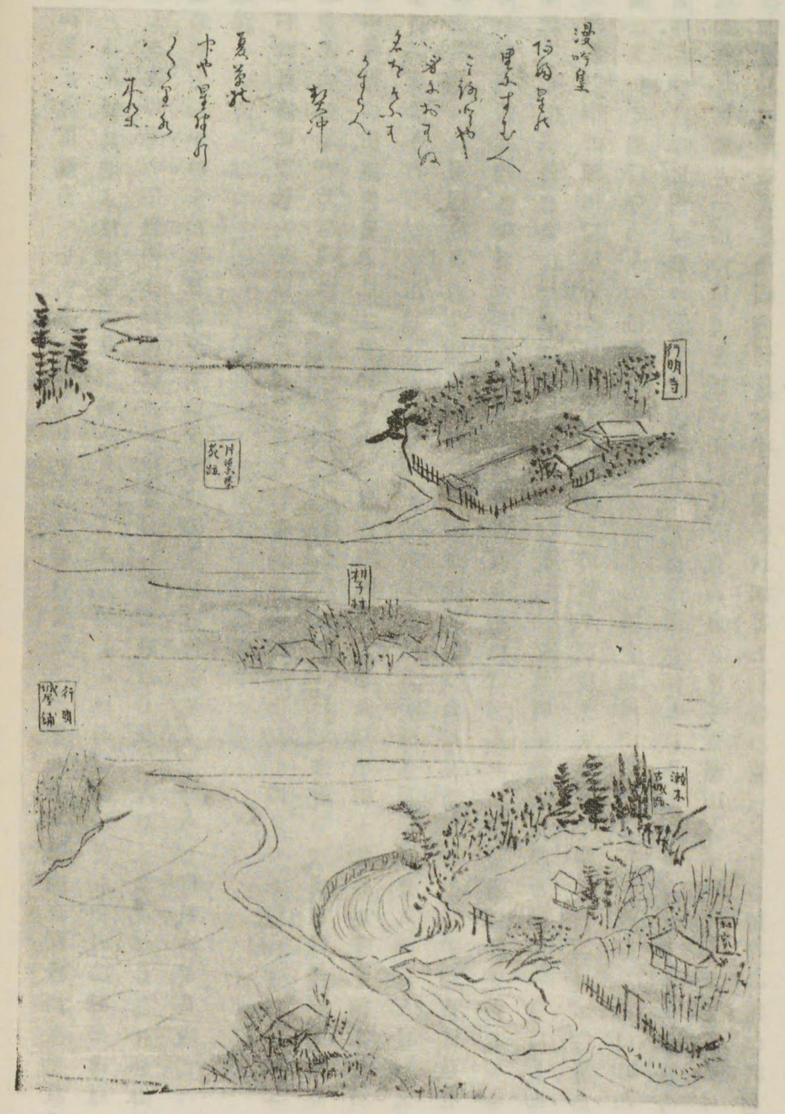
あり今も行明柑子正岡辺を星野庄と云りと古歌名跡考に見へたり

可敬思ふに統義考に云星野の池水　帝の御髪水に朝なゝに献せし事諸記に見ゆ何れの帝と云事を記さず按るに持統帝当國宮路山引馬野行幸の時名水なれば其行在所へ朝なゝに献せしを云ならん彼行在所は程近ければさも有へしと見ゆ是等を以て考ふに由縁なきにはあらす当國八名郡下条村に御所ヶ池と云あり往古はいと廣き池の趣田圃の字に存すさて其

傍に貴人の居館ありしとぞ土人は　文武天皇の皇居と云今其辺の田圃を堀るに土器数多出るとなん蓋其池より朝毎に其御殿へ水たてまつりしにはあらず欤それらの口碑に傳はりありしを訛り傳へて当国より帝都まで水奉りしなど誤りしならん能く考ふべしされど御所の溝の水をみかわ水と云其事〻〻に記るさんと欲すれともくたゝしけれは是を除く

古城跡

同村に在今城屋敷と云当城は往昔右大将家鎌倉に在職ありし頃よりと見ゆそは清和子の原田通記に云星野大宮司は（左馬頭義朝の妻由良御と申は熱田大宮司李範が兄の秀頼が女を養女として義朝に嫁すと鎌倉実記に見ゆ）李範の次男従四位上上野介範信三州星野に在城吉田より二里北豊川の辺に古城あり是なり一男千秋駿河守憲朝千秋の号是より始まる今の千秋の祖也二男星野左衛門太夫範清等一族子孫星野氏と云など見へ又塩尻に云星野は三河國の在名なり熱田大宮司家の庶流なりと云々又星野千秋の両氏此辺を領せしと見へて参考太平記（廿四ノ四丁）同供養の条に佐々木三河守星野刑部少輔と見ゆ又太平記（廿四ノ三十五ノ二丁）に細川相模守は此度南方合戦の時鈴木左京太夫三河の星野行明等が守護の手に属せすして相模守の手に付たる事を忿て彼等か跡を闕所になつて家人共に充行はれたりして同書（三十五ノ二丁）に吉良治部太輔もに木か語らひを得て三河國の守護を所存に遠ふて思はれける云々又（同巻三十丁）に吉良治部太輔もに木か語らひを得て三河國の守護代西郷兵庫助と一所に成て矢矧の東に陣を張海道を差塞き畠山入道が下向を支へたりけるが大島左工門佐義高当國の守護を給て星野行明等と引合ひ國へ入ける路次の軍に打負て西



行明寺
行基茶苑
城屋舗
天王社
星宮明神
羽衣松
神明社
古城跡

郷伊勢へ落行けれは云々又東鑑（四十巻）建久三年正月の条十日辛未星野出羽前司李義とあれば当村の城主と覓へたり又康正二年の頃は毛利氏当村を領せしと見へて群書類從（五百）康正二年造内裏段銭帳に毛利宮内少輔（三州行明段銭）と見へ又同書（五百十一）永享年中御番帳に毛利宮内少輔とあり又同書同巻長享元年着倒の条に八番星野宮内少輔と見ゆ又三河堤に云行明村古城星野日向守代々（俚語に云古地名を星野里とて名所なり其領主を代々星野行明と称る人武威盛にして近郷を領す日向守弓術をよくす大神君に召出され義直卿に賜る今星野の家尾州侯に仕ふ）と見へたり

星野山行明寺　同村に在

本尊

鎮社

鐘楼

片葉茶苑

二葉松に云星野氏妻室の墳畑の中に茶木一本あり世に片葉茶園と云今は枯失しと見へたり土人の口碑に云往昔当村の川辺に美麗なる女來りて衣を濯ふを見れば傍の松木に羽衣を懸ぬ土人其衣を取て家に皈れば彼女來りて妻とならん事を請ふ然して夫婦睦しく暮しけるが一人の男子を生す其子長するに及て母ひそかに羽衣のある処を問それを着して云母の紀念に茶苑を殘しけるが自然に片葉の茶となりしと此辺の口碑に存す三保の諷と混雑せしと見ゆ

羽衣松　同村新城街道右の方にあり前の条と合せ見るべし

矢落松

東海路左の方新城道に在吉田駅より北一里許に在長瀬村道路の右にたてり土人の口碑に云往昔和田村より遠矢を射しに其矢此所に落しとぞ三河堤に云和田村八幡宮に一寸五分木の弓あり往昔和田村に渡辺図書助淨と云人の射し弓なりと見ゆ恐らくは其人の射し遠矢ならん

○行明村の前へ入るへし

悪僧に弔はれて迷ひける事

東三河の行明と云処に妙厳寺の源髙長老の檀那の母死けるを源髙之を弔ひ賜ふに彼母の頭は外所へ飛て胴体許を焼けり灰寄の時之を見付て又首許を焼たり源髙死去の後四五年過て彼女我娘に付て種々口走り冷（スサマ）じ近所に増岡と云村に全鏡と云僧を頼て施餓鬼を修して弔ひけれとも更に験なし其時村の庄屋申ける様汝は源髙と云禅師に弔はれなから何とて斯様に迷ふそと云へは娘口走りて曰く其源髙は牛鬼になりて大なる苦みを受らるゝ世我等まで其苦を受る也されとも我は軽き故に人に便りて水をも呑也と云て久敷狂氣しけるを妙厳寺へ連て行牛雪和尚を頼みて種々弔ひければ娘の狂乱醒にけり此弔に逢たる僧の語られし実に亡者を弔んこと其出家の志さし邪ならばいかでか浮ぶ道あらん能師を撰ふべき事なるに放逸無慙の僧ともいはず無智無徳の法師をも嫌はす我旦那坊主とだに云へは誂て亡者を弔はする心元なさよ用心あるべしと因果物語（ミノ サミテ）に見へたり

香渕御薗

柑子は東海路のの方新城道亦左に在敬雄の御薗考に云神鳳抄に云内宮香渕御薗十一月一日饗料所今宮飯郡柑子村あり可考光尋云柑子村の内字は烏帽子田と云処に田畑一反六畝ありて其を神田と云傳へたり合せ考ふへしと見へたり

○神鳳抄に河内御薗　建久年中行事十月一日更衣神事饗膳の条に三河国所在河内御薗也とあれは柑子にはあらじ

出雲大明神

柑子村に坐神明帳集説に従五位上出雲天神宝飯郡に坐とあり柑子村出雲大明神例祭四月十一日社人なしにて村持なり当郡大木村の条合せ見るへし

古屋敷

同村にあり今世豊川村妙厳寺領の畑となる鍬柄百度右エ門息同樫右衛門松平玄蕃頭家臣按るに慶長五年吉田城主池田輝政播磨國を賜ふて所替あり其跡を竹谷松平玄蕃頭宗清に賜る鍬柄は池田家第一の老臣たる故に別に此所に置れたる欤など三河堤に見へたり

天王社　行明村に在

○行明の処に入べし

古塚　天王社境内左の方にあり由縁未た詳ならす後考を俟つ

古屋敷　東海路左の方新城道亦左に在正岡村に在吉田駅より西北一里許に在参考太平記巻四十三

菊地合戦の条に見参岡三河守（金勝院本名高ナネ）とあり見と眞と相通す当処の人欤考ふへし又当所に牧野傳兵衛成敏居住と二葉松に見ゆ其頃渥美郡吉田城には牧野傳蔵（四ミ成信成）成敏（成命）同傳次成高小傳次成國新三成村と共に（吉田城の処合見るへし）籠城の処に牧野傳兵衛正岡の砦を守りけるが牛久保を背き亨禄二年正岡を追払ふに傳兵衛は清康公に属すと牛窪密談記に見へ又藩翰譜下四ノ亨禄五年五月傳三傳次兄弟次郎三郎殿（清康君）の為に戦死して城亦陷る是は牧野が族傳兵衛尉某益岡の城に在て岡崎表に心を合せしが故也やかて傳兵衛尉して其城を守らしめらる云々又三河堤に云按るに成敏は和田野左エ門尉則成の嫡子にて牧野田内兵衛と号す田兵衛は其子なり武家系図に云田兵衛某は益岡に住すとも云なと見へたり

○桶地蔵

本尊　地蔵菩薩

和泉塚　同村道より右の方に在由縁未た詳ならす

稲荷社　東海道左の方新城道亦左にあり西島村に坐す

当村九百年代先は志之須香渡の奥にて此辺総て蒼海なりし事彼条を合せ観るへし漸く六百年許先に桑田此所彼所に出来て仁治三年の紀行より小坂井辺より吉田へ通行せし道始めて開けし趣なり其をわたふつの今道と云しとそ故に隣村沖本住吉大磯正岡なと皆海辺に由縁あり扨当社の鎮坐何れの頃よりと云事未た詳にせず往昔はいと繁昌の宮居なりしを宝暦の頃社内の狐より豊川平八狐へ婿を遣はしゝより彼社は日々に繁昌し当社は衰微に及ふとそ

亡者勘左衛門の事

因果物語巻おなしく東三河に西村と云あり庄屋勘左衛門と云者あり寛永十九年に死す長山の眞源院是をとふらはれけり三年目の六月に子息の勘左エ門内の者二人畠の稗を切て居たる所へ死したる祖父來りてなんぢらにことづてせんとて來れりと云一人は新参者なれは見知らす今一人は譜代の者なる故によく見知りたれは言葉をかけて祖父殿かと云へはされば久しく逢さりし別に子細にあらす我は食物なき故に佛に問ひ申たれば何にても典ふへき食物なし汝が子を喰と仰せあり此よし必す勘左エ門に云ひ傳へて聞かせよといふて立歸るをみればつかの上に上り穴のうちへ入やうに足をふみこみて入にけり其まゝ家に皈り此よし斯くとかたりければかへつて大にしかり腹立て弔はさずおとろかぬ体にて居たる処にやがて五六歳になる庭子にはかにびり〳〵として死けり不幸なる者にてとぶらひをもしかといたし待らさりし故にかくありけるなりと人申ける子供あまたありしみな死はてたりまことにおそろしき事なりと見へたり

古城趾

東海路左の方新城道に在瀬木村に在二葉松に云牧野古白とあり此人の傳当郡牧野村又渥美郡吉田城の所披き見るべし又宮島傳記に云其後古白は今橋城（今吉田と云）を家督牧野傳左エ門尉（成信）之成に讓りて瀬木村に隠居すと見へ又吉田駅龍祐寺の旧記に云明応年中今川家の命に依牧野左エ門尉成時当國宝飯郡瀬木村に一城を築くと云々可敬当村に至りて城跡を見るに外堀な

ど古昔の侭に存す

神明社

同村城跡に鎮ります祭神皇太神宮例祭六月十六日当一村の産土神とす棟札に牧野氏造営とありとそ神主

古城跡

東海路左の方新城道右に在三橋村に在本坂越の海道なり鎌倉時代飯尾因幡入道在城す古証文ありとそ後牧野助五郎も此に住す領地一鍬田村助五郎方に制札残れりと二葉松に見へたり

天王社

神明帳集説に云從五位上温谷天神宮飫郡に在雨谷村産土神天王社社領黒印三石例祭社人松野氏　当村は往古平六左エ門尉兼隆の知行所にてはあらぬか考ふへし南山巡狩禄追加に参河国ろ（為勲功之賞）平六左エ門尉兼隆（知行者大塔宮令旨如此　延元元年十二月廿四日）

大和国宇智郡新町久兵衛藏

牧野村

東海路左新城道右の方に在当村は往昔中條と云しか今碧海郡に上条村あり当村を中条と云しか八名郡に今下條村あり其由縁を知らす武徳集成巻五に永禄五年長沢家に賜ひし領知の印章に七十貫文中条方又同書巻に五十二貫七百文豊川市場方八十六貫九百五十文同中条方と

見へたり

古城跡

三河堤に云阿波民部太夫成能（重）八代の孫和田民部紀重成始めて讃州より來り牧野村に住す故に和田野を改めて牧野と称す今牧野村に讃岐屋敷と称るもの重成の宅地なり其子和田野傳内左エ門成清同村に住し今川義範に属す当郡牧野馬場三橋雨谷等を領せしとぞ其子牧野傳内左エ門頼成其子牧野左エ門尉成時入道古白は頼成の次男此人和歌連歌を好みて世に鳴今川氏親殊に之を愛す武も又世に秀す故に三州今川家の麾下の隊長たり成時今橋庄（今吉田城）に一城を築く氏親大に悦て此に居らしむ後薙髪して古伯と号し永正年中卒す法名月拳古白大禪定門（古白の城の処見るべし）其子牧野傳藏（助）成信家督を継て今橋（後するに其頃は吉田と改む）住す亨禄二年徳川清康君の為に敗績し岡崎方の士大岡忠右エ門忠信傳藏成信を討取る（家忠日記には柴田中書討之とあり此軍当郡下地村の処を見るべし）法名邑外音公其子傳三成国（継）（父成信の妻は尾州知多郡の人なり胎子として七ケ月にて成信討死す故に適れ去て知多郡に隠れ此成国を生り成国壮年害に遭ふ）其子傳三成里は尾州知多郡に産れぬ十六歳にして父の讐石川隼人を殺して勢州長島に遁れ滝川一益に仕ふ其後長谷川藤五郎に仕へ其の方又大神君に奉仕すと見へたり

冠塚　同村に在中条殿墓と云今祠を建て中条明神と号す

牧野頼成墓

同村に在牧野傳内左エ門頼成の墓也法名清誉淨永居士天文廿二癸五十月廿一日とあり同郡御津庄大恩寺過去帳に法諱を記し位牌を納むと又当村に讃岐谷と云処あり土人傳内塚と云

と二葉松に見へたり又古墳記に牧野塚俗名傳内左エ門頼成法名淨祐長山村大恩寺に位牌有墓同村讃岐屋敷に在と見へたり

檜物師

東海路左の方新城道に在矢川村に出す続柳蔭に云中頃中条の城主牧野左エ門尉成時入道古白村々に諸職人を置其由緒今猶存せり当村より桧物を作り市にひさぐ事今に絶ずなん

麻生田村

東海路左の方新城道に在当村に字上野と云処有往昔上野氏の所領なりしが又碧海郡にも上野在り瓊日鈔巻五に上野殿云々見ゆれば蓋し其頃此処に住し人欤左なくは上野氏先祖此所に出生して上野氏を名乗欤康正の頃に至りて上野氏若狭国を領知して当村には目代なと置て支配せしかいづれ上野氏の領知せし所と見ゆ辞書類従一五百康正二年造内裏段銭帳に七百五十文上野刑部大輔若狭國神谷村段銭三河国宝飯郡三ヶ所段銭とあり又同書十二音文安年中御番帳に四番上野刑部大輔と見へたり

古屋敷

贄掃部爰に住すと二葉松に見ゆ又武徳大成記に永禄三年五月十九日大神君丸根の城を攻め賜ふ時贄掃部衆に先ちて城内に入しとあり

贄塚　同村上野原に在贄掃部の墓なりと二葉松に見へたり前の条合せ見るべし

弓作（ユミヅクリ）　同村に在続柳陰に云牧野古白入道初めて弓作をして当村に住せしむと在

鍛冶内裡三郎塚

同村上野的場と云処に有此塚燃ることありとぞ鈴木正三の因果物語に出と二葉松に見ゆ続柳陰に云井上奈利三郎佐竹藥王寺國総髙天神兼明 三河政家も暫く此処に住とかや世に達広と云とあり当國に住して銘中原云々又佐竹葉王寺又藥王寺云々とある銘挙るに遑あらす先其三四を云は五百九十余年文安の頃佐竹藥王寺吉光当國に住す其後四百五十年許先藥王寺久原住貞吉応永の頃当国に住すと鍛冶備考に見ゆ國総と云は四百十余年先永亨の頃当国に住して三州住國総とも又中原国総とも銘すと古刀銘集録にあり葉王寺と銘する事を思に慶保亂碧海郡藥王寺を過る時の文章本朝文粋に見ゆれは蓋し藥王寺と銘する事古名に隨てうちしか斯れは藥王寺は碧海郡なり又中原と云は渥美郡二川駅の東北に当りて中原村あり 新編 改むべし又久原とは設楽郡に在考ふへし又前に三河政家も此所に住すとあれとも政家と云人当国に住せし事を見当らす古刀銘集録亦鍛冶備考に正光と銘する人あり当国に住て後濃州蜂屋に移る世に蜂屋達广と称す疑ふらくは此人の誤敎されと此正光と云しは八名郡髙山村に住せしとぞおもわるそは彼の条と合せ考べし

因果物語野東三河一ノ宮近所上野云々兵九郎と云鍛冶あり其女房殊の外りんき深き故に常々いさかいて身をもやし侍りしかわつらひ付て死けり塚をつきてうづみければ其七日目より彼女房塚の上に火燃出てやけ侍りしを死人の弟に全齊と云僧彼の塚に行て見るに火つよくもゑたり此亡者をば長山の正眼院より弔はれしなり後に妙厳寺の牛雪これをとゞめ賜ふ

兵五郎も三年目にむなしくなる寛永四年のことなり

牛蒡　同村に産するを以大なりとす

楠本天神

東海路左の方新城道右に在敬雄の神明帳集説に從五位上楠本天神渥美郡に坐とあり宝飯郡に楠木村あり木と本と誤りし例は神名式に伊典国樟本神社とあるを三代実録 七ノ 楠木神とあり祭神　祭礼　神主

一宮村

東海路左の方新城道右に在当村市師庄と云へり下の津守大明神の処合せ見るへし

敬雄の郡郷考に和名抄雀部 敬々部 今一ノ宮辺をサヽベの郷と云り当抄上野国雀部 佐々伊部 とあり元サヽキベなるを音便にサヽイベと唱へ又サヽベと呼なれたるなるべし

古事記 中ノ十四丁 神武天皇の皇子神八井耳命者雀部臣雀部造祖也 姓氏録左京皇別又和泉国皇別にも有 同書に建内宿祢之子許勢小柄宿祢者雀部臣之祖也旧事記 五ノ五 勝間山代根古命者雀部連祖也と見へたり

砥鹿神社

同村に在当國の一の宮とす延喜式に載る所の官社なり社領百二十石神主草鹿砥氏世に大宮とも云和漢三才図絵 六十九丁 に云砥鹿大明神は云々　文武天皇　勅使公宣をして建立せしむ公宣に草鹿砥氏を賜ひ神職とす其子孫相続すと有扨一ノ宮の号は群書類從四百五十四雑部 神 に諸国一二宮事と見へ又髙田友清の棟梁集 三十三丁 には一ノ宮二ノ宮三ノ宮四ノ宮五ノ宮六ノ

宮と云事見へ又平田篤胤の玉だすき四五に云諸國一ノ宮二ノ宮など定められし年時は古書に詳に所見たる事なし或說に　聖武天皇の御代に六十六ヶ國に一社つゝ撰み置玉ふと云るはさもあらんか又或說に　崇神天皇の御時に定め置賜ひし天社を一ノ宮と称し其後垂仁天皇の御時に定め置賜ひし地社を二ノ宮と称するなど云へれと信し難き說なり三河國渥美郡羽田村神明宮の神主羽田野敬雄主より恒の消息のついでに一ノ宮と云は國司神拜又祭礼奉幣せらるゝ時ことに最初に事行ひし社なるかと考へ侍りさるは國内神名帳の和泉三河駿河伊豆美濃上野若狹紀伊などの國々悉く第一に一の宮を挙たれはなりと見へたり

○塩尻云一ノ宮砥鹿神社は　文武帝の時草鹿砥公宣勅を奉て創建云々祠官代々草鹿砥氏世云々

○神名帳考証に一ノ宮記に云大巳貴命但馬國刀我石部神社

祭神大巳貴命

國内神名帳に云正一位砥鹿大明神と見へ又総國風土記佛教十九に云砥鹿神社主田五十三束所祭大物主神也　文武天皇元年始奉主田加神礼と見へ又神社啓蒙四巻又貝原先生の龢亦雅の巻の二又和漢三才図絵及社說とも皆祭神大巳貴命とす日本紀神代巻上一書に云大國主神亦名大物主神亦國造大巳貴命号又古語拾遺六に云素盞嗚神國神女聚大巳貴命生と見へたり毎歳五月四日祭礼走馬流鏑馬の形粧あり文德実禄三に云嘉祥三年秋七月丙子朔授三河國知立砥鹿神從五位下又同書三に云仁寿元年冬十月乙巳進三河國知立砥鹿両神陞並加從五位上又三

代実録八に云清和天皇貞観六年二月十九日丙子授三河國從五位上砥鹿神正五位下又同書六云同十二年八月廿八日戊申授三河國正五位下智立神砥鹿神並正五位上又同書十九同十八年六月八日癸丑授三河國從四位下砥鹿神從四位上又続群書類從八巻六十足助八幡宮縁起の中に東海道三河國賀茂郡足助総社八幡大菩薩の元興を窺ふに仁王三十九代　天智天皇の御宇当國宝飯郡大深山と云ふ山に怪異者三ツ出來せり一は猿の形一は鹿の姿一は鬼形にして大木の梢巖上の上飛行自在に見へたり人々あやしみを作す処に猿形なるは石舟に乗飛行高橋庄猿投大明神是なり鹿の姿なるは彼所に止り則砥鹿大井と化現せり当一の宮是なり亦鬼神なるは能物言我は是紀州牟漏郡熊野本宮より國廻する者なりと言彼大深山を鬼出來するに依て其後鬼見山と云又本宮山と云り云々見ゆ又宮島傳記に云永正十三丙子年十一月十六日当國一ノ宮砥鹿大明神本社棟上あり牧野田三平信成祈願に依て是を造営す亦田三別腹の子を以て一ノ宮神職を継く左工門太夫と号す三河国郡書是に同じ　又明応四乙卯歳八月廿一日一ノ宮甲斐左工門太夫卒す三河国郡書見へたり

○社領百二十石内二十石は本宮領　元和三年御朱印に一宮神主とのへ　同本宮領には一宮孫十郎とのへとあり

今社家十家あり内藤氏今泉氏戸賀里氏あり

○当社毎正月三日夕田遊祭の神事又二月末日夕火舞祭神事あり古雅なる唱歌あり予が三川事蹟見聞集二ノ巻に記せり

○類聚國史九十二 湯藥部　欽明天皇九年丁酉春令千田直遣參河国宝飯郡砥鹿山得双鹿列卒有屠之者忽患疫死自此其疫轉而余卒不患疫万許也知爲神領而自官寄付臨時祭田也

此の丁仙石本にものせす旧支大成経にも見へすと云ふとも其末社に六角社と云ありて鹿御霊を祭ると社傳に云へり

○但馬続風土記に二方温泉の記を引て上古大穴持少彦名二神入田道間洲開瀬門経営此温湯後居朝來郡赤渕宮終向東方参河國とあり

式に朝來郡刀我石部神社あり可考

砥鹿三御子明神

神明帳集説に云從四位下砥鹿三御子明神砥鹿神社の末社に三ノ宮と云あり祭神建御名方命なり此社乎とあり

津守大明神

神明帳集説に云ふ正三位津守大明神宝飯郡に坐すとあり今一の宮村砥鹿神社の摂社に津守大明神と云あり社地は舟の形にして本社北の方に在津守氏の祖神田裳見宿祢を祀る今も田の守にツモリデンと云処ありと同学草鹿砥宣輝神主云り新撰姓氏録十二丁云津守宿祢尾張宿祢之同祖火明命八世孫大御日足尼之後也とあり亦同書九十丁又百七丁にも見へたり田裳見宿祢の事は日本紀九神功皇后の御巻に見へたり可敬云此辺は往古蒼海にて風土記殘缺に南は宝飯湊を限り北は市師浦を限るとあり当村を市師庄と云ふとぞ彼是合せ考るに津守の名称由縁ありげなり此辺入海なりし事委しくは当郡しがすかわたりの所合せ見るべし

參河國名所圖繪

寶飯郡之部

參考圖書所藏 國會圖書館

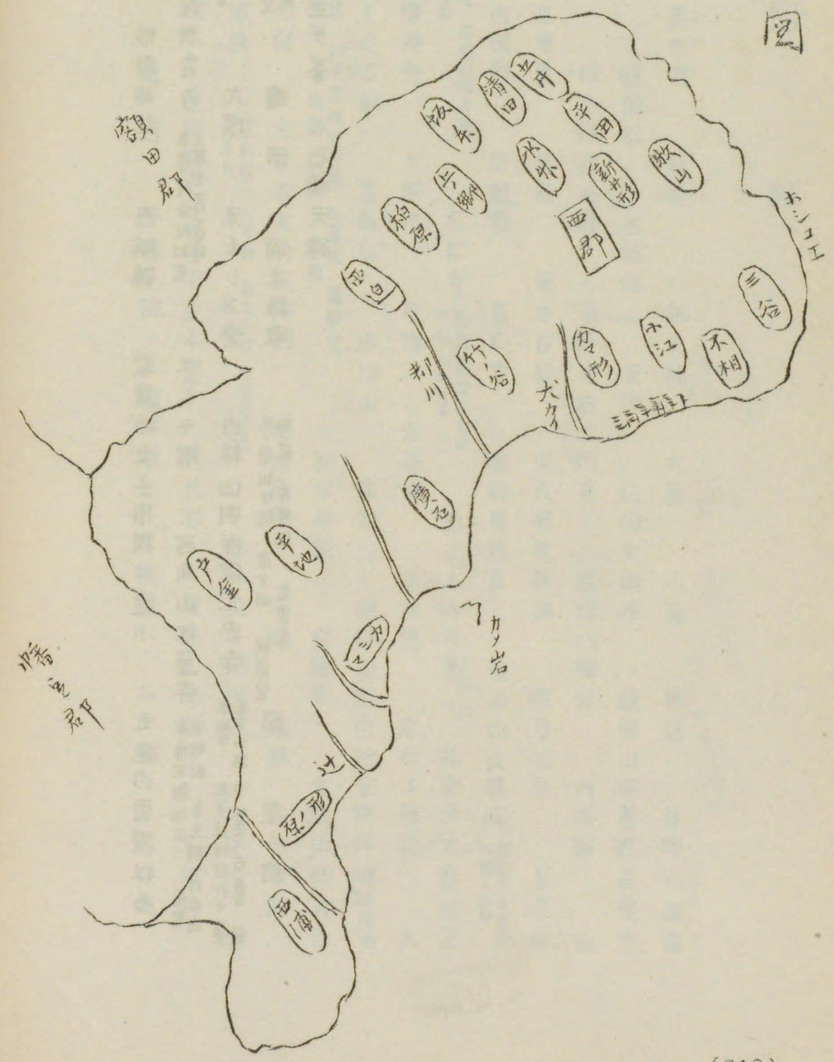
所流汗砥乎登遐刀
毎多辰低奈津比森
流伸砥毋加志古改
何加比古濫雲
椎田義方

目　録

三谷村　美世濱（ミヤ）　星越　八劔天神　大島　小島　佛島　産物　小海羅（コガノリ）
竹島辨天社　龍燈松　古城跡　産物　砥神大明神　龍田山安養院長泉寺
本尊藥師如來　鐘楼　鎮守祠　松平伊昌石碑　小野涼右工門墓　若宮八幡宮　古城跡　当
城合戰　古屋敷　西郡　蒲形古城　俊成卿屋敷跡　恋の松原　雀の森
蒲方庄　古屋敷　古屋敷　善応寺　熊野権現社　竜台山天桂院（本尊天桂院大婦人墓）
久松俊勝の廟所　四頭三曲の松　長存寺（鶴殿長持の墓　大婦人の墓）　貞遠上人の事　松全山大寶院藥
松平清昌代々之墓
勝寺　極樂廃寺　犬飼港　産物　赤孫郷　赤孫焼　赤日子神社　赤
引糸　宇土の古城　名取山　堀切山　産物　楠林山和合院安樂寺（傳通院御位牌）
久松佐渡守定俊墓　松平忠利室の墓　臥竜松　鐘楼堂　勧学廃院　常顕院　永尾山勝善寺
十王堂　鎮守八幡祠　手洗鉢　山門　塔頭
坂本観音堂の図　安樂寺水竹天神図　藥勝廃院　古鐘　鐘銘　古城跡
竹屋里　城趾（恋松原　上之郷　赤日子社　竹屋里　王子社　都川　瘤松）　若一王子権現社　六本松　都
川　山伏塚　矢問塚　松平主水墓　竜若塚　東光山西福寺　太鼓岩
鹿島明神社　亀岩　芦若足跡　鴨の喰上　同図　三ケ郷　形原郷

甚兵衛塚　形原神社　古城跡　家廣の女子串刺に逢ふ　五色の雲現はる
上野山利生院潮音寺（本尊阿弥陀如來　正観世音菩薩）　シユシキ塚　西浦山無量寺（本尊不動明王　四町松　年天祠　白山祠　尾塚）
稲荷祠　観音堂
内裏松　大塚　テイシン堂　法林山樹祥院光忠寺（本尊　松平紀伊守代々墓　松平山城守墓　古墓　鐘）
楼　金比羅山札堂
地蔵菩薩　八幡祠　蝿田　海上詠歌
大　殯　三ケ峯　石神天神　（芦ノ原利生院　蔵王祠　観音堂　光忠寺　稲荷　古城跡）　図　産　物

山内之畧図


賀田郡
西郡
三谷
不相
不江
名形
大谷
相原
宇野
宇田
清田
吉田
牧内
宇賀
宇治
宇賀
宇賀
宇賀

三谷濱ならん欤松葉集鮓尓雅等にまた考へすとあり美養は和名抄にも出てだ旧村なり

うつほ藏開　宮濱のすさきにおりて鶴の子に
　　よる波たへぬ崖を見せはや　　方遠

夫木廿五　みやはまのいさごのこずなわが
　　君の宝の位かぞへ見んかし　　清原朝臣元輔

星越

同村東の入口の山なり三河藻塩草に云宝飯郡美養郷三谷村と大塚との境ひすこしき山坂これ星越なりとあり

十二月十日西郡をたち待るに百人ばかりうちおくり
みやこしこへと云ふおもしろき海つらより別れたり
東國紀行　さする人なくて別れし旅寐にも　　谷宗牧
　　名殘はさそな老のこしこえ
ほしこへをこしこへときゝたがへて若衆たちへのざれ事なり申なほして　　同
　　立かへりまたもあはまくほしこへや
　　うす〳〵あかぬ老の坂かな　　同
うしくほよりむかいの人にまでと藤太郎又三郎以下

駒なべて行くに大塚と云ふ里あり

八劔天神

同村に坐す神名帳に云從五位上八劔天神坐宝飯郡とあり集説に云ふ三谷村産土神八劔大明神例祭九月九日社領二石七斗神主武内左衛門五郎とあり

大島

当島は同村の南に在て同村に属す人家唯一軒のみ蓋同村の人困窮に迫りしもの村中へたのみて此島へ移り渡世をなすに必ず其家貧困をまぬかるる是れ貧人を救ふの一助実に天幸の属島になん

小島

同村に属して大島に對して在大島より小く人家なし故に小島の名あり

佛島

小島の傍に在岩石並ひ立て其形佛像立並ひしに彷彿たり故に佛島の名あり二葉松に云岩立並ひて千体佛の如し陰顕は潮の満干に從ふなりとあり

此辺にて俊成卿のうたとてもつはら傳ふ

　　刪補　松　大島や小島が先の佛しま
　　雀のモリに恋の松原　　二葉松に出

産物小海羅（ユデ）

竹島辨天社

東海路右の方形の原道に在不相村に在同村南の方二町許り社領四石八斗神主酒井氏当國三辨天の其一なり例祭九月十八日西郡凡半程荒井方同村三ケ所の産土神とす二葉松に云不相村八百冨神云々又三河雀に云西郡村不相里竹島弁戝天女云々此島は竹島に似り日本七天女は相州江の島安藝宮島紀州天の川江州竹生島常州不世野州野屻三州竹島なりと見へまた剛補松に云ふこの島は往古俊成卿江州竹生島の竹をこゝにうつす故に竹島と云とあり

龍燈松　本社より南の方に在海神より燈を献する時此松にかくると云ふ

古城跡　同村に在二葉松に云城主不知天正年中家康公築き賜ふと云とあり又軍物語に云十二月十五日於三州竹島合戰被疵之由吉良左兵衛佐満貞注申せ尤以神妙弥可抽戦功之状如件貞治二年二月四日天野左京亮殿とあり斯れは天正以前は天野氏当所に居住せしもはかるべからず猶後人の考をまつ

産物　貝蜘（二葉松）　貽貝（同書）　海松（ミル同書）　塩

砥神（トガミ）大明神　東海路右の方形原道右手牧山村に在神名帳に云正三位砥神大明神坐宇飫郡とあり集説に云牧山村に十鹿見大明神と云あり例祭十一月十一日（十月イ）又丹野村鬼頭（トガミ）大明神と云ありて牧山村社の東の山に在と見ゆ可敬云遠鹿見山俗に三河冨士と云峯に多賀大明神ありしを今麓に遷す牧山村雨乞の時松明を燈して登山し神をいさむるとそ

龍田山安養院長泉寺　東海路右の方形原道右五井村にあり寺領五石一斗輪番所禪曹洞派本寺渥美郡大久保村長興寺開山祥山和尚

本尊　薬師如來　座像長三尺余行基の作当郡清田村勧学院の本尊なりしと云り

当院へ往昔安達藤九郎盛長本国に於て七堂を建立す其一なりと云り思ふに三河守範頼は当國を領して三十五万石とあり蓋し範頼藤九郎盛長を奉行として七御堂を建立せしにはあらすや七所造営なすは大諸侯の上ならでは力およばすなん又寺説に源心公岩津にて御寄附の田地御印章今に存すと云り

鐘楼

鎮守祠

松平伊昌石碑　当院境内に在三河堤に云伊昌は和泉守信光の嫡男外記元芳に当郷を賜ひしより五井を以て称号とす伊昌は元芳六代の孫なり慶長六年九月八日卒す法名源久委くは三河船に乗と云り

小野源右衛門墓　当寺境内にありしと見ゆ今不詳と寺説に云へり

若宮八幡宮　同村に在若林八幡宮とも云寛治の頃の勧請なりとそ松平外記伊昌の棟札あり又旧記に云応永五年再営（肥前国大村城主民部大輔純治男治部太夫季宗末孫大村宗三郎とあり）其後寛正年中又修覆あり其後天文七年又修覆（当郷領主弥五郎）

信長又享保九甲辰年造之と見へたり

古城跡

同村に在当城は松平和泉守七男弥九郎則定参州五井に住す武德集成（又三河堤には信光の男五井弥三郎元芳と有是五井深溝の祖なりと見へたり）其子五井太郎左衛門充心五井に住す長親君に奉仕す永禄五年八月廿三日に卒す其子五井太郎左衛門信長（武德集成三ノ一丁に天文二十年六月小十八日三井宝飯郡五井の松平弥九郎信長卒す四十九才）廣忠君に奉仕す屢軍功有天文九年六月十八日病死す四十九歳法名淨意（原ヶ）其子外記忠次（武德集成巻二天文十四年安祥合戦の条五井松平家傳に弥九郎忠次此時功を竭す以額田郡伊田羽根両郷を賜ふ）天文十年辛丑織田信秀三州碧海郡安祥城を攻んと欲して軍を発す時に　廣忠公命に依て忠次彼城を守る其時軍功比類なし　廣忠公之を賞して額田郡伊田羽根両郷を賜ふ天文十六年丁未九月廿八日　廣忠公碧海郡渡リの城主鳥井又次郎を攻め賜ふ時に忠次先登に進みて討死す（三河堤）五井の松平忠次か臣松下清兵衛恨る事有て五井を退き近來藏人信孝に仕へけるが渡リ合戦に源七郎忠宗を討取遂に翌年五井へ歸参し忠次が子弥九郎景忠に仕ふ外記忠次最後に帶せし清次作の利刀は五井家相傳する故敵鳥井又次郎は忠次が從弟たるに依て彼刀を分捕すと雖も景忠か許へ送リ返す（武德集成）委くは碧海郡渡リの処に記す合せ見るべし其子弥九郎景忠五井と称す後太郎左衛門　大神君参州御歸入の時に宝飯郡五井を賜ふ天正三年五月武田勝頼参州長篠城興平信昌を攻む此時景忠信昌と共に彼城に在て軍功多し又姉川合戦に御供して忠を竭す然て文禄二年六月二日卒す五十三才（三河堤又武德集成文禄三年六月小三日五井松平太郎左衛門（初め弥九郎）景忠五十三才にて卒す）とあり其子外記伊昌幼名弥三郎　大神君に仕ふ天正十八年関東御入国の時下総國佐倉の内二千石を賜ふ慶

長六年九月八日卒す（四十三才武德集成是に同し）伊昌より四代の孫外記忠室の時にいたって五千五百石に登庸なさしめたまふ（三河堤）

当城合戦

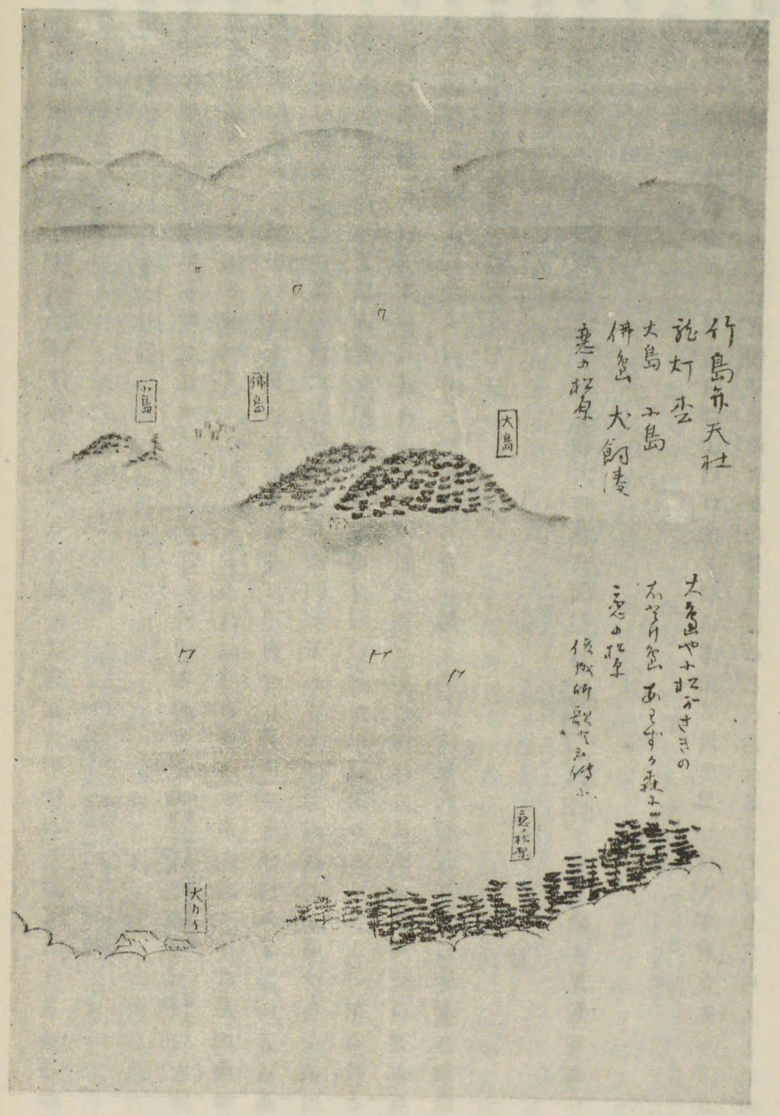
武德編年集成（ヒヲ）に云永禄七年十一月大此年　神君御油城を（御油とあれと恐くは此五井ならん諸書に当所と混雜して記す）攻賜ふ城中練矢を高きに上せ鏃を並へて之を射さしむる故に味方進み入事を得す　神君内藤四郎左衛門正成に命して城中へ矢を発せしむ正成矢三本を発し其中二本櫓に入敵恐れて皆高きより遁れ下リ彼矢を見に鏃の傍に内藤四郎左衛門と云七字を刻む敵其矢を贈リ今一矢城の中に発し入ん事を請ふ正成亦是を射んとす神君は敵ひそかに謀あらん必す出て射ることなかれと制し賜ふ正成肯はすして進み出る処に敵兵楯を道の傍に立其陰に伏て正成進み近付ばこれを鎗付んとす正成疾くこれを察し矢を発し楯を通し伏兵を射殺す城兵弥驚き離散す神君其功を感し賜ふと見へたり

古屋敷

同村に在土人の云鵜殿家臣本多屋敷大竹藤兵衛屋敷（今西郡藩中大竹啓次郎は此子孫なり）小田勘七屋敷等ありと云リ

西郡

東海路右の方形原道右に在当所は山内廿余ケ村の中にて最繁昌せリ人家軒を並へて立続く事凡五町許松平主水侯此を領す当所は往昔蒲方庄にて古名は蒲方と呼しならんとおぼゆさ


竹島市天社
能灯台
大島 小島
伊勢 犬飼湊
大島
伊勢島
小島
大島
大カイ

三河嶮嶺
千鳥俗竹瑞雲開寫上儀然
天文臺日落沙村漁網曬
風吹極浦賈帆回遥山煙景
連江樹巖畔清波浅砥石
斷岸倒生老松樹夜看新
大潮上 蘭亭
竹ヶ井入
竹ヶ井
能灯台

れと又憶ふに西郡の名旧くよりありしが蒲方の名弘ごりて西郡の名は廃したる如くなりしに再び又西郡を唱ふることゝなりし欤考ふへし坤西郡の名称は予が考には錦織（ニシゴリ）の轉訛にはあらぬかともおぼゆ其は続記元明天皇（ナリ）和銅三年の条に令伊勢尾張三河云々二十一國始織（ハタ）綾錦（ニシキ）とあり是諸国錦綾を織し始めにていつれの國も錦を織し処を錦織と唱ふ先錦織の例を云はゝ新撰姓氏録（ニ、ナ、ハ）錦織の村主あり又元亨釈書（ニ、ナ、ハ）錦織郡の人云々又信濃宮の傳に可児の錦織辺にて云々又猿著聞集に錦織から麿なと見ゆれば蓋し西郡は錦織の轉訛にはあらすや亦西郡近き赤孫郷より赤引糸を出すなども由縁ありげ也さて西郡と謂しこと古く物に見へたるは群書類從（五百十四ニ、ミ、ウラ）近江国番場宿蓮本寺過去帳に西郡十郎国演とあり又同書（五百二十四ニ、ナ、ウラ）康正二年造内裏役銭並に國役引付等に云四百人岩堀修理亮殿（三川國西郡代ヵ）と見又又同書永享以來御番帳に西郡筑前入道とも見へたり康正二年より年歴凡三百八十余年斯れは其昔より西郡の名目ありし事顕然なり

○伊呂波字類抄巻二錦織寺又錦織（ニシゴリ）ともあり

○ニシゴリの説うけがたし渥美のおくを奥郡と称する如くホノ郡の西部と云称なるべし

蒲形古城

東海路右の方形原道に在蒲形の名称は蓋し蒲冠者範頼当国を領して三十五万石と鎌倉武鑑に見ゆ範頼は遠江國に生れて其生れし処を蒲と云ふ故に蒲冠者と称す当所も蒲形と称して若蒲冠者此に居城せしにはあらずや蒲形と云は蒲冠者の居城ゆへ称へしにはあらぬ欤御所

方外（ヤマトガヤ）方なと専ら称しけるなどと同例ならん其後正平の頃は和田藏人兼清居城せしか下の蒲形の庄の処合せ見るべし其後前の西郡の条に挙し西郡十郎国演（近江國馬場宿蓮本寺にて北条一統自殺の内なり太平記には馬場の辻堂とあり）岩堀修理亮（康正二年居住す）又西郡筑前入道等（永享年中居住）在城せしにはあらずや其後今川家の麾下鵜殿長助在城す塩尻に云ふ鵜殿三郎秦長持は三州西郡の人其先は紀州熊野新宮常香七人の供僧の中の其一員と云傳ふ宮方の軍事を勤めて信濃宮に仕へ其後上州に入り長持は駿河の今川義元及氏眞麾下に属せりと見ゆ家忠日記巻二に云永禄五年（武徳集成三河国闕書藩翰譜等各永禄五年とす）今川氏眞鵜殿長助をして三州西郡の城を守らしむ　大神君久松佐渡守俊勝松井左近忠次に命して西郡の城を攻撃しめ賜ふ俊勝是を攻めて軍功を尽す忠次牒者をして城郭の要害を窺はしめ其虚を謀りて不意に発して城中に攻入鵜殿防く事を得す和を乞て城を避て駿州に歸らんとす松井忠次神君久松佐渡守俊勝か軍功を賞せられ西郡の城を以て俊勝に賜る俊勝拜し嫡男太郎三郎勝元（後因幡守と号す）に西郡城を譲り俊勝は岡崎城に在て　大神君他邦に軍を出し賜ふの時岡崎に留て城を警衛す其後松平主殿頭忠利（三河堤に云深溝松平主殿助家忠の子主殿頭忠利父の家督を継て大神君に奉仕す天下一統の後三州西郡を賜ふ慶長十七年西郡一万石を轉じ同国吉田城三万五千石を賜ふ云々又云松平和泉守信光の男竹谷弥七郎守家より七代孫民部少輔忠清父の家督を継て吉田城三万石を領す）次に松平玄蕃允清昌次に其子帶刀清直とあり（三葉松に云西郡蒲形城松平主殿頭忠利松平帶刀清昌とあり三河堤に云吉田城主松平民部少輔忠清卒して後嗣子無に其子帶刀清直の時四千五百石に減して交代寄合衆に列す当時清直の末孫永正領主たり）

○義経記に尾張国熱田の大宮司のむすめの腹にも一人有りけり遠江国かばといふ所にて成人し給ひてかばの御ざうしとぞ申ける後には参河守と称のりたまふ

○出所記鶴殿長門守は藤太郎　久松佐渡守は三郎太郎

○竹谷蒲形両村の領主は元暦以前皇太皇后太夫俊成卿開発の地なり此卿の父は権中納言俊忠卿と云り御堂関白道長公の後胤に安二年正月正三位嘉応二年七月皇太皇宮太夫（右京太夫如故）承安二年二月皇太皇后太夫安元二年九月出家（六十）号釈阿元久元年十一月晦日卒九十一文と公卿補任に見へたり

○此一項は次の俊成卿屋敷跡へ入るべきを筆者誤て此へ挿入せり

俊成卿屋敷跡

小江村に在土人云当村シヤグジの森あり其処なりと云へり此卿当所に住し賜ひて竹の谷蒲形両庄を開発せしとぞ其は東鑑（四ノ十丁）に云元暦二年乙巳（八月十四日為文治元年）二月十九日癸酉其後熊野山領三河国竹谷蒲形両庄事有其沙汰当庄根本者開発領主敬位俊成奉寄彼山之間別当湛快令領掌之譲付女子始為行快僧都之妻後称前薩広守忠度朝臣忠度於一ノ谷被誅戮後為没官領武衛令拝領給之地也而領主女子令懇望于本夫行快云早愁申子細関東可令安堵件両庄若然者可譲未来於行快子息（女子腹ト云々）就此契約行快僧都自熊野差進使者（増弟増）所言上也謂行快者行範一男為六条廷尉禅門為義外孫於源家其好異他依本自重之処此愁許出来之間無左右加下知給且又御敬神之故也云々

戀の松原

同村と蒲形両村へかゝりし海濱の松原なり長凡五六町巾半町許もありて海辺に臨む南に奥

郡の山々を見渡し未はいらご志州の神島伊勢の朝熊か嶽なと見へわたり且海上往返の船綫横に帆をかけ走るなと実に絶景の処なり殊に夏日は涼風松に颯々として暑さも忘るゝ許なり土人の一説に今竹屋村畑の字に小ユヒと呼処あり近頃まで其所に松原ありし小ユヒを暑言してコヒの松原と云なといへれどいかゞあらんおもふに竹谷蒲方両庄は俊成卿開発の地なる故今存する処の松原もそのかみ俊成卿両庄を開発ませしとき築きしものと見ゆかゝれば此松原もむかしよりありてコヒ村の地へかゝりしゆへ自然恋の松原としも呼しものならんさて八雲御抄には若狭また夫木に若狭或は國未勘とあり又秋の寐覚は播磨と見ゆさてと雅康卿の歌は当所の恋の松原なる事明なり

康正四年三月祐子内親王家歌合　駿河

夫木雑四　ほのかにもなほあふことをたのみてや
こひの松原しけりそめけん

後朱雀院一宮歌合

同　いかにせんあひみぬほとのふるまゝに
しげりぞまさるこひの松原　甲斐

恋の松原と云処にしばし休みて

冨士歴覧記　むかしたれ恋の松原まつ人の
つれなきいろに名づけそめけん　中納言雅康卿

雀の森

恋の松原の傍に在小き塚世とそおもふに彼塚は地境のしるしにやとも見ゆ彼塚の北二町許に同し形の塚あるを見れは恐らくは地境なとのしるしならん欤雀の森とは若くは京の森にてはなき欤スヽメとスヽミと同音にて今スヽメと轉訛せしにや此辺すべて海濱に連る故夏日すゞみなとせし処なる故すゝみの森の名を呼し欤まつ土人の說に隨ひて彼小塚を雀の森とす尚後考をまつ又土人の口碑に俊成卿の歌なりとて雀の森を詠てあり其歌前の三谷村大島の下に出す坡き見るべし

蒲方庄

当庄は俊成卿開発の地たるよしは東鑑に見へて即コヒ村俊成卿屋敷跡の所に出せりまた蒲方の名義は蒲冠者範頼当國の守として当所に居住せし欤夫より蒲形と呼しにはらぬかと云へりし事西郡蒲形城に委く出せり坡き見て合せ考ふべし鎌倉武鑑に三河守範頼三河三十五万石と見へ又南山巡狩録追加三巻に三河國釜庄内兼清右地頭職為勲功賞可令知行者天氣如此悉々以狀正平五年十二月七日和田藏人許左京権太夫書判とあり是等をもて見れはそのかみは蒲とのみ云し欤釜庄は蒲庄の事ならん今世に云誰様何様の様と云は即此方の字の意にて足利の世に專ら云ひし事にて彼時代の書に御所様公方様なと云へり御所様は御所方の意公方様は公方方の意なり当所もむかしは蒲とのみ云しを人々尊称して蒲方（ハマ）と云ひしか今遠江国に蒲と云処あり其所は蒲冠者出生せし所也これをもて見れば当所も蒲の冠者に由縁なき

欤後考をまつ又因に云塩冨に夫往古は庄司の号なし中頃諸國及朝臣國々にて地を賜はり其家より司を置て主維せられしこれより國衙（国司の政を行ふ所なり）庄園（庄司の令を施すところ）別々に命せられし異邦の地を封するに似たりされとも諸院諸宮親王大臣の御封は古へよりありしが是も官府を賜りて其地の正税を受る計りにて國は皆國司の吏務なりし中古より庄園とて不輪の処を立て國司不入の処多かりし庄は田舍なりと字書にもあり庄司は其の官某の大臣の御庄園の司人と云事なり頼朝の後は所々に地頭と云者を置て庄司の号なくこれを郷司保司と称せしこれより武家國郡を專らにして古へのすがた跡なくなりしされども又今の如く数郡を統へ一國を領せしなどせし事はなかりし尊氏天下の権を取て后国々乱れて大軍を以て他を撃取自由のふるまひをせし者共多かりし故に大名諸所に出來て中頃の風俗も変しぬ夫より以來其子孫其國を有にし今に傳へたるもあり或は新に命して國郡を賜るも多し今の如きぞ唐土にて諸侯を封建し賜ふとひとしく侍るにやと見へたり

古屋敷

其所未詳林氏系譜に云大職冠鎌足公より廿四代の遠孫稲石五郎三光朝　後花園天皇の御世永享の末紀州本宮より蒲形へ來り文安年中同國宝飯郡御油へ移るとあり

古屋敷

其所未詳兵家茶話巻四に云参州蒲形の住人酒井平右エ門正村先祖酒井某は恩地伊勢守に属しける大和組に酒井風間中津川とて三家あり　南帝おとろへたまひ酒井は三州に來りて蒲形

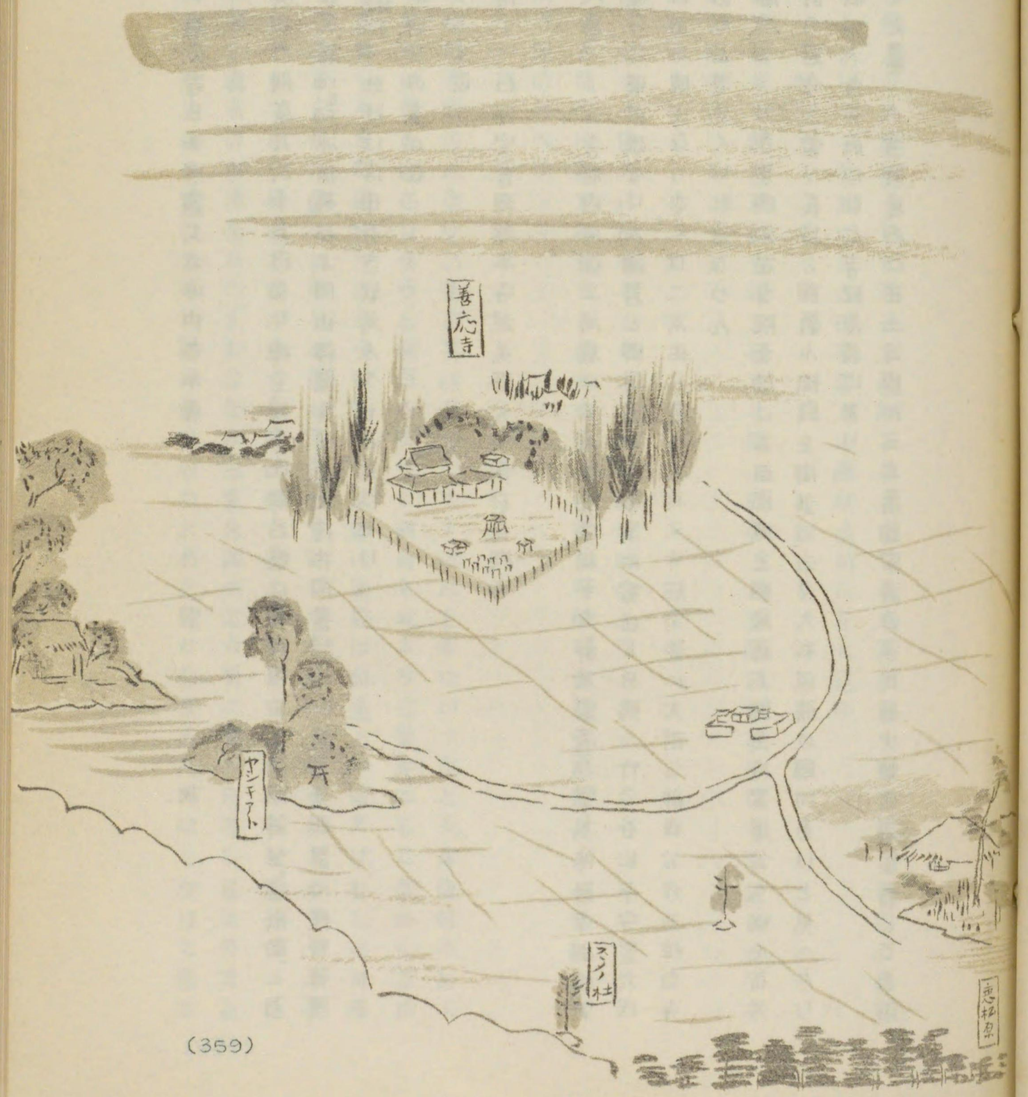
に住居す正村其後裔として松平大炊介好景に從ひ永祿四年四月好景吉良義昭と相戰ふ時好景と共に戰死す其子小兵衛正澄天正三年長篠合戰の時矢に中て死す正澄に三子有り嫡子清太夫正次二男助太夫正親三男蒲形清七郎正方と云ふ正親正方は慶長五年に山城伏に於て討死す酒井家傳記

善応寺

同村に在浄土宗本尊阿弥陀如來立像長凡二尺六寸許有当寺にて鵜殿藤太郎宗牧と共に連歌せしこと左の文章にて知らる

藤太郎道までむかいうちわにてまづ常顕院へつきたり長持より使ひ同道してしつかに城の山に里に見し世にかわらぬ年を経て繁昌所糸らにや年からにや当國数度の総劇をものかれし城也去々年尾州まで下りし時も此次音信すへしとて千匁の用意旅宿ことしあたらしくかまへられけるとなん難去子細ありて今度の下國もおほくは左様の礼義をもなど存よる事なり先応寺興行あるへしとて

善應寺
後成卿
屋敷跡
惠松原
森の森



熊野權現社

同村に在社領二石例祭九月十五日なり神主榎本氏神名帳に云從四位下凍明神坐=室飲郡=とあり集說に云姓氏錄（中ノ五ウ十五ウ）冰宿祢、石上ト同祖神饒速日命之後世同書（中ノ九ウ十六ウ）氷連あり西郡に熊野權現あり（西郡藩形の産土神にて大宮と称す）此社には由なき欵考ふへしと見へたり

神庫　本社左の方に在

龍臺山天桂院　未改

同村に在寺領十一石禪宗曹洞派本寺渥美郡大久保村長興寺

本尊

天桂院大婦人墓　当寺境内に在三河堤に云天桂院は松平玄蕃允家清の室大神君の御妹実は久松佐渡守俊勝の娘なり大神君と御同胞松平家清に嫁せしめ賜ふ竹の谷松平守家六代の孫同國吉田の城主なり妾くは三河船に載ると有又寺院奇談に大樹公御母公の玉碑当寺に在りとあれと恐らくは此墓ならん

久松俊勝の廟所　当寺境内に在寺院奇談に云西郡城主鵜殿藤太郎長持家康公へ別心有久松俊勝追討の君命を蒙り長持と相戰ふ鵜殿を御退治云々久松俊勝の廟所ありと見へたり

四頭三曲の松　当寺前に在と寺院奇談にあり

松平清昌代々之墓　当時境内に在三河堤に云玄蕃頭家清の子民部少輔忠清家督して吉田

城三万石を賜ふの処慶長十七年卒去の時嗣子なくして弟清昌に五千石を賜り西郡に移らしめたまふとあり又二葉松に云ふ松平帶刀の廟所当所に在と見ゆ

正禱山長存寺　未改

同村に在日蓮宗勝劣派陳門流御朱印三石五斗開山日存上人年歴凡四百年程と寺說に云り本寺越後國長久山本乘寺

本尊

鵜殿長持の墓　当寺境内に在委しくは上の郷古城の所に出す

大婦人墓　当寺境内に在大神君北の御方の墓法名蓮葉院殿日乘尊靈尼慶長十一年丙午五月十四日と寺說に云へり

貞遠上人の事

貞遠上人は生國三河国の人なりいまだ其所を詳にせすされと里にいづるとて其國司にあふて云々と左にあれば蓋此わたりならん國司在住せし國府も此より三里許にして遠からざればなり尚後考をまつ今昔物語（十一ノ十三丁）に云今はむかし比叡山西塔に貞遠と云僧ありもと三河國の人幼にして生國を去て比叡山に登り出家して受戒す師にしたがふて法華經を受ならひ昼夜に読誦す暗にうかべたり極めて口ばやにして他の一巻よむほどには三四巻を読めり一日に三千余部を誦し眞言の秘法をたへずおこなふ三業を調へて六根に犯す処なし長大の後山を去りて生國に下り先祖の堂にこもり居て後世のつとめをいとなまんためにくだりて居け

るが馬に乘て里に出るとて其國司に行あひたり貞遠が馬よりおりざるをとがめて貞遠を打擲し館に連れ行き御廐に下して人を付校讐せしむ貞遠我果報のつたなきを嘆き心を尽して法華経を誦す其夜守の夢に普賢菩薩の白象に乘を廐に下して置きたるを他の普賢來て訪賜ふと夢て夢さめぬ不思議におもひて貞遠を淨き処に請して聖人いかなる勤かましますと問ふ貞遠答て我別の勤めなし年少の時より法華経を持して昼夜読誦すといふ守聞ていよ〳〵おとろきわれおろかにして聖人の德行を知らすあまつさへなやまし煩はし奉る其とがをゆるし給へとて見る処の夢を語りて歸依して館に請しいれ日供を宛て衣服をあたへ丁寧に供養してけり國の内の人此事を傳へ聞て貴び敬はざるはなかりしとかたり傳へたるとなり此事元享釈書九ノ二十五ノ一また本朝法華傳六ノ六にも見へたり　○貞遠の一当寺なるか能旬考

松全山大宝院薬勝寺

同村に在除地修験本寺京都三宝院宮開山伏義法印

本　尊　不動明王　長三尺許行基の作

薬勝寺の号は往古坂本村に在て旧院なりしがいつの頃にか彼寺院は頽廃して今跡形もなくなりぬれど彼寺跡にて古鐘を掘出して今坂本村観音堂に在鐘銘は金石年表にも出て世人其年歴の古きを知る彼条坡き見るべしさて彼旧院の寺号を継て当寺を薬勝寺と名号すとぞ

極楽廃寺

同村に在長存寺より西南の方八丁許大宮前畑の字に存す其処に塚あり往昔合戰討死の人を埋たる塚なるや又寺跡の塚にや未詳極楽寺は風土記八名郡の殘缺に極楽寺と云ふあり

犬飼港　出郷か

東海路右の方当所は往古諸國に犬飼部と云を置玉ひしが其犬飼部にはあらすや書記六ノ十安閑天皇の巻に二年秋乙亥朔詔國々置犬飼部と有亦新撰姓氏録五ノ十縣犬養宿祢と見へ又太平記十一ノ五住吉合戰の条に山名三河守泉太郎同四郎兄弟三騎犬飼六郎兄弟三騎返合せて討れにけりと見ゆ斯れは古き犬飼の地名になん又当所は海濱に在て船楫の便宜よき処なれば当国五ヶ港の其一なり二葉松に云寛永十二年御代宮島山氏鈴木氏五ヶの港を定むと見へたり所謂五ヶの港とは大濱三ヶ鷲塚同平坂少犬飼オホ御馬同なり

産　物　煙松茶二葉松　蝗同書

赤孫郷

今宝内庄上ノ郷と云風土記に云赤孫郷或は赤日子公穀七百六十二束三宇田假粟六百七十三丸三宇田とあり風土記考に云按るに加名抄当郡赤孫安加ホ古郷あり今上の郷村に赤孫大明神坐す按るに神の郷の意なるべし凡て古き神社の在す地をば神とも森とも称ふる地多し当国にて云はゝ石巻の社の在す神郷村石坐社の在す大宮村羽豆の社の宮崎村御津の社の森下村迎にホホあり　なと尚あるへしと云へり此説実に然なり斯れは当郷の古きこと推て知るへきなり

赤孫焼

赤日子神社

同村に在赤日子明神例祭九月十六日清田上ノ郷両村の産土神なり神主足立氏当社は延喜式に載る処当郡六社の其一なり

祭神　海神綿積豊玉彦神也と風土記に見へたり　風土記に云赤日子神社圭田三十九束三毛田所祭綿積豊玉彦神也安曇氏祝祭之　天智天皇甲戌九月始奉圭田加神礼有神家巫戸等と見へ又国内神名帳に云正二位赤孫大明神式内座宇飫郡又文徳実録四ノ十云仁壽元年冬十月乙巳授三河国赤孫神従五位下又三代実録十一ノ十九丁云　清和天皇貞観七年十二月廿六日癸酉授三河国従五位下赤孫神従五位上又同書ノ一ノ廿三丁同十八年六月八日癸丑授三河国従五位上赤孫神正五位下とあり斯れは千年以上の年歴を経て当村に鎮坐在すいとも恐き御神になん

赤引糸

官社私考に云植田本に云神祇令の義解に云以参河赤引神調糸織作神衣埴安に同書に云孟夏神衣祭祝に云伊勢大神祭也其国有服部等齊戒清浄以三河赤引神調糸御衣織作大神宮雑例集に下ノ三十八丁云以三河国赤引神調御糸可被奉織之由云々神鳳抄に云三河国中郡新加内荷前御調糸二斤総国風土記に云桑糸貢と見へ又谷川氏の和訓栞ニノ赤引糸条に三河国荷前御糸と見へ三州額田郡今按に宇飫郡の誤なるへし西郡三好氏なる者あり今も調進する麻也と云赤曳明神ましませり年中行事に赤良曳荷前御調糸とも見へたり宇飫郡に赤孫の郷名ありて和名抄安加と赤曳の轉語なるへしと云り予今年彼三好氏通称を兵右エ門と云郷士なりを訪て赤曳糸調進の事を問ふ上郷村に字は麻畠

と云畑ありて三好氏持にて其畑に作て奉りたりと云傳れとも六七年以前家おとろへたりし時より奉らずなれりと云々

宇土の古城

東海路右の方形原道右に在上ノ郷村に在当城の遺構未詳ならず享禄の頃は鵜殿三郎在城せしと見へて三河國聞書に享禄三庚寅年云々西郡鵜殿三郎云々見ゆ亦同書に云天文元壬辰年云々西郡等降清康公と見へ亦同書に云天文十四乙巳年二月十五日西郡鵜殿長持同将忠同長親同長治等法華経供養無とあり其後鵜殿藤太郎在城せゝと見へて家忠日記巻二に云鵜殿藤太郎は氏眞に属して三州上野郷城を守る竹ノ谷の城主松平備後守清善備後守は鵜殿藤太郎が同肥地姓の兄弟なり大神君に属す是に依て清善兵を発して上野郷の城を攻撃皇三月初日の軍に清善戰勝て首を得ること七十餘級後日の戰に清善が兵利を失て多く死亡す大神君清善を援け給ひて師を師ひて名取山に陣し賜ふ江州甲賀忍びの兵をして上野郷の城を襲はしめ給ふ城兵是に驚き騒く時に其虚に乘して急に城を攻撃しめ給ふ城兵拒く事を得す守将鵜殿藤太郎弟藤助を始め城兵悉く戰死す城遂に陥る

大神君岡崎城に御凱陣

藩翰譜巻十一竹谷松平の条に云清善初め今川に隨ひ一人の娘を質として吉田城に納る徳川今川不快の後清善彼質を捨徳川の味方に参る小原肥前守吉田城主大に怒りて清善か娘をとつて吉田の城の辺に串刺にして捨てけり清善安からぬ事に思ひて己か実父同母の弟鵜殿藤太郎

今川の方人して同国上ノ郷の城に在押寄て攻城兵七十余人の首切捨城を攻ること既に三日味方にも手負死人少なからす徳川殿かくと聞召清善を助け玉ふ程に戒遂に落て鵜殿藤太郎同藤助兄弟討死す清善是等を奉公の始めにして且は身を忘れ家を顧みす功を積み労を重ね齢既にかたむき家を子息清実に譲りて致仕すと見ゆ又御年譜の附に云西郡鵜殿長持在城然以足軽大将三原三左衛門之計語伊賀衆伴中務同太郎左エ門令忍城中討鵜殿擒三子公大悦賜加恩三原西郡東三河之因為先手被入置久松佐渡守と見ゆ又三河聞書集に云永禄五年大神君西郡鵜殿御攻の時鵜殿の家人に仙家道金とて國中にかくれなき大力の弓とりあり此者の矢先にては戰をまづ引兼べしとて御引被成候後山ツナ羽栗両村御案内仕堀切山に御陣取北の裏門より御攻落の由云々あり又軍物語に云鵜殿藤太郎長照上野郷城主にて今川氏真の旗下也藤太郎が弟松平典四郎は竹ノ谷にあり是は家康公方なり土井の城主本多豊後守与四郎に加勢すと虽も藤太郎大勢ゆへ毎度利を失ふ其後松平大炊大久保五郎右エ門石川日向松平甚太郎相議して遂に城を落す新七藤太郎は落行息三郎七郎十七文其節藤三郎をは松平甚太郎生捕と見ゆまた大統記には氏真の臣鵜殿長門守は西郡に居城松平勘四郎信一伊賀甲賀を語らひ丑の二月廿六日の夜忍入落城長門守討死とあり又塩尻に云鵜殿三郎秦長持は三州西郡の人其先は紀州熊野新宮常杳七人の供僧の中其一負と云傳ふ宮方の軍事を勤めて信濃の宮に仕へ其後三州に入り長持は今川義元及氏真の麾下に属せりとあり又武徳集成呼び永禄五年三月小十二日竹谷の松平与治郎清善駿河方鵜殿藤太郎長照が三州幡豆郡西郡の村上野郷の

城を攻撃て敵の首七十余級を得たり此長照は紀州熊野山の内常杳が末葉にして三郎長持が子也最武に長す長照長男三郎四郎氏長三男藤三郎氏次と共に篭城す松平清善は長照が異種同胞の弟と虽も互に君命に依て敵味方となり当城を攻撃と云々　○十三日寄手また上の郷の城を攻て明日に至る三ヶ日の軍を寄手大に疲労す　○十五日神君名取山まて御動座ありて深溝の松平主殿介伊忠久松佐渡守俊勝大久保五郎右エ門忠勝松井左近忠次を以て上野郷の城を圍ませらる時に忠次が従士石原芳心が子三郎右エ門は江州甲賀の諜者伴中務盛景同太郎左衛門同与七郎と議して兼て彼國の多羅尾四郎兵衛光敏忍の士十八人召寄て其組としけるが今夜不意に城中に入て焼立ければ鵜殿父子三人逃去る所に伴与七郎伏兵として城外に待受三郎四郎氏長並に弟藤三郎氏次を擒にす父藤太郎（後空と号す）は駿州へ走る既に上ノ郷城陷ければ当城を神君より久松佐渡守俊勝に賜ふ此地東三河の枢要たるゆへ氏真頻に兵を発し是を攻れとも俊勝堅く防き守る

或は神君伴与七郎が功を賞し御刀且感状を賜ふ久松俊勝は程経て西郡の邑上野郷城を其嫡男三郎太郎康元（後因幡守に任す）に譲りて其身は岡崎に住す神君他邦へ軍を出し賜ふ時は留りて岡崎の城を衛護す　○西郡鵜殿落去の時伴中務が部下忍入て城将長照を害すとも記し且永禄六七年の間に載るは皆非なり

同書（六十七）に云慶長十八年十一月小二十七日鵜殿兵庫介重長は参州西郡の城主鵜殿長持が同朋にて刑部卿と称しけるが聊戰功を顕はして文智ある故登庸し善六郎と称す長持歿後遥に

年を経て神君に仕へ云々今般和曲の間ある故拷問せらる処に罪に伏せす林川小野寺が方より愁(なまじい)に堪問してうきめにあわんより生害せよとすゝめければ渠も豪強の者故忽死に及へり

名取山　未改

大神君永禄五年鵜殿を攻め賜ひし時当山に陣営在けること武徳集成家忠日記等に見へたり

堀切山　同

大神君永禄五年宇土の城鵜殿を攻め賜ふ時山綱羽栗両村の者御案内をまをして堀切山に御陣を居賜ひ北の裏門より攻落したまひしと三河聞書集に見ゆ前の名取山とは別山歟いまた詳にせず

産物　葡萄(凡土記)　蘿蔔　桑糸(上に同じ)

雪山童子半謁と思ひよれるは楽(マヽ)リなり此會以後於城千句道増あり俄なる事にて一向不調法なから先年の無念はかりをとあれば不及辞駿河まで年内にとおもへは長々逗留は迷わくの様なればと越年をもおなしくはこゝほとにてとの心ざしなればいなびかたき成へし毎朝潮をくませて孝行湯養生第一なり東国の湯治も此分にやと思ひて過行日数毋しられたりせ五日千句始行巻頭朝

雪　宗牧

東國紀行　雲水も雪にはれたるあしたかな

当城の遠景雪のあしたのさまなり二十九日藤助旅宿にて

同　春風のつかひを雪のやなさかな　同

春風の柳よりは猶雪の乱れを愛したる心にや玄長一座

同　降もつめ雪こそいそのの草葉かな　同

雪を見ることにとりなし待り此會夜ふけたりちとほとも遠くてとまりたり又翌日色々造作ともなりけむ是を巻軸にて発足とさだめたれば菅沼織部入道より山家の為躰を此次に見よかしなど書信あり先年安城居住若衆のころより知人なれば態もまかりてたるへき程の旧好なり上洛の次を期してこな

たよりは不音のところにおもひよられし心切はなみ毋
申かたし殊更難去子細あればすて日比にと内議あり遠州
路次のこと兼々濱名の渡りをと鷲津の寺まで人遣はし
申あはせたれど取かへし山中になせり今五六日いたつ
らの逗留なり常顯院銭別の御齊をとやくそくなればさ
ゝはれ歌に勢らるへしとをの〳〵異見にてうつるには
宗長月忌もついでよくて

同　冬は梅こゝろをとむるにほいかな　同

寒梅のかすかなる心にや　七八日は都文書て宗丹これ
より坂菴なれば道すがらの書狀無断水野監物亟発句所
望あり

同　たつ跡をゝし鳴遊きの友ねかな　同

已前の残りおほさを筆にまかせたり十二月十日西郡を
立侍るに百人ばかり道おくりみやほしこへといふおも
しろき海づらより別れたり

楠林山和合院安樂寺

東海路右の方形原道右に在清田村に在寺領十六石淨土宗西山派深草流本寺京都寺町円福寺
開山龍藝上人
本尊　三尊弥陀如來　長三尺許脇立は観音勢至菩薩安阿弥の作此本尊は観学院の本尊
なりとそ
万宝雑記に云東照宮様三州岡崎御在城の時宝飫郡内御出馬被為遊堀切と申所に御陣被為
居同国蒲形庄城主鵜殿長門守藤原朝臣長持子息藤太郎長範と御合戦長範を被為討即西郡
御手に属し尾州河古居の城主久松佐渡守長家を蒲形城主に被仰付候此時当時を長家の菩
提所にさだめらる云々とあり
傳通院御位牌　本堂に安置す法名傳通院殿光岳智香容誉彈定尼慶長七壬寅年八月廿九日
厨子は宝永年中松平隱岐守殿寄付即裏に如左記す松平隱岐守源定直補之とあり
久松佐渡守定俊墓　当寺境内に在法名陽林院殿華林宗心大居士天正十五年三月十三日卒
す験の松ありと二葉松に見ゆ三河堤に云諸書に定俊と俊勝と一人に混して書たることあ
り寛永系図にて始て父子たる事を知ると云々
松平忠利室の墓　当寺境内に在万宝雑記に云三州吉田城主松平玄蕃頭家清の室法名天桂
院殿は久松佐渡守長家の息女御母堂は奉始東照宮様松平隱岐守殿松平越中守殿先祖同腹
なり家清息女法名舜松院殿明誉寿光大姉は東照宮様御姪君西郡城主松平主殿守忠利の室

忠房の母堂なり忠利と離別後京都養林菴に御在住被成病氣にて勢州桑名城内へ御下向即此城内にて御逝去寛永八年辛未七月八日御遺言に依て靈骸を当寺におくりて山後に葬る

御廟石塔は寺内に有之と見ゆ

臥竜松　当院の庭に在拾四間余に蔓延せしとそ

鐘楼堂

十王堂

鎮守八幡祠

手洗鉢

山門

塔頭　香照院　日陽院　玉泉院　光善院　報土院

○青衾山慈恩寺十一面観音（運阿彫作）比丘尼寺なり堂三間四間十二番〜観音にきせい清田をすぎ行は西の郡に夕日入海

勧学廃院

同村に在廃院して唯名のみ鎮守山畑の字に殘れり当院は碩德の僧徒当院を踏て衆僧に学を敎し寺院と見ゆ故に其号あり京師勧学院は（藤氏の学校也）贈太政大臣冬嗣公立られし三統記に云大かた此大臣遠き慮おはしけるにこそ子孫親族の学問を勧むる為に勧学院を建立す大学寮に東西の曹司あり菅江の二家之を司りて人を敎ゆる処なり彼大学の南に此院を立られしが南

曹とぞ申めり氏の長者たる人むねと此院を管領す又伊呂波字類抄（巻三）勧学院（孝德天皇御宇大化三年丁未初て立或書に云弘化十三辛丑藤冬嗣建立之可尋）と見ゆ

常顕院　前の文章にあり

永尾山勝善寺

東海路右の方形原道右坂本村に在今観音堂のみ山上に在て寺院は頽廃す

本尊　観世音菩薩　長三尺行基の作縁起に云紀伊國中山寺本國三ヶ峯と当山三躰一對の佛像なるよし見へたり

当山の澄觴は人皇八十三代　土御門院天皇の御宇承元年中高野山助源法師諸国遊歴の砌此所に來り佛法有縁の良地なりとて三所の伽藍を建立し熊野三社の本地を勧請す則永尾山勝善寺と号す亦西に当りて薬師堂の跡あり薬勝寺と云ふ又遥かふもとに阿弥陀堂と称する処あり三所の旧跡とは是なりと縁起に見ゆ然るに三所の梵刹悉く頽廃して今世蘆に山上に観音堂のみを存せり

薬勝廃院

当院は勝善寺の西に在しとぞ何れの世にか頽廃して今世唯当院の古鐘を存して永尾山観音堂とあり且薬勝寺の寺号は蒲形村に存して松全山大宝院茱勝寺といふて京都三宝院下なり

古鐘

薬勝寺の古鐘なり当院頽廃して其跡詳ならす然るに近世此古鐘を地中より得て為に其旧地

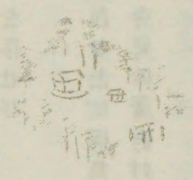
西樂寺
石佛不神

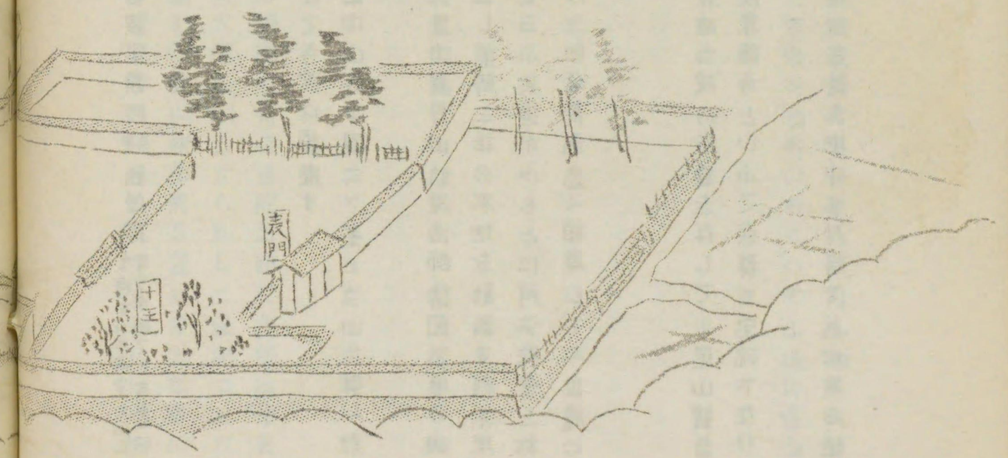
阿彼手堂

大慈院

火ともし
ま事や仁王門

小西一仙



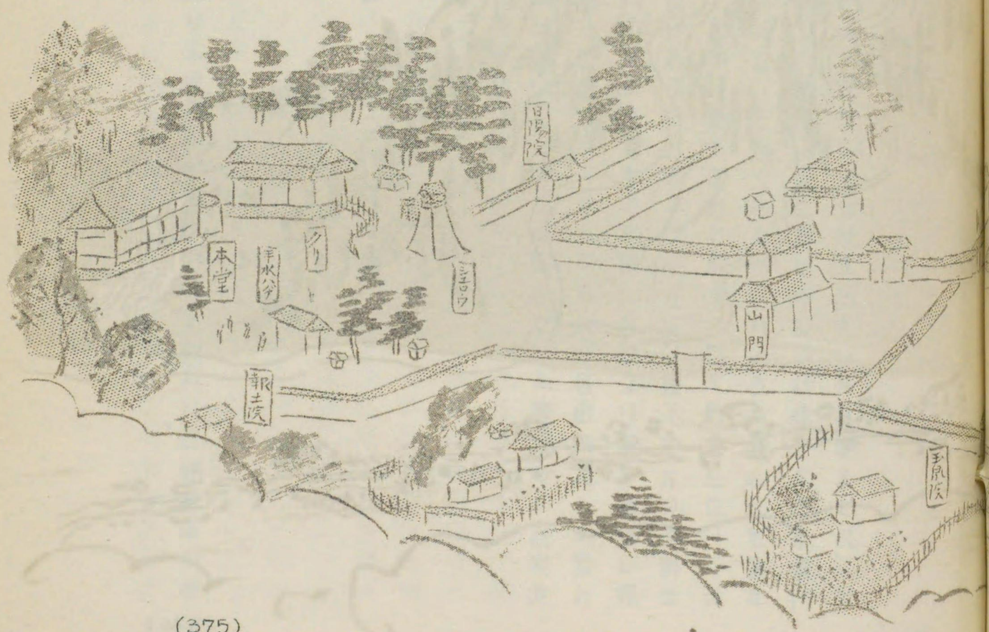


夏日可哀

清涼世間の事不すむてふ
人皆い雷く響しを
世をも驚ろかす

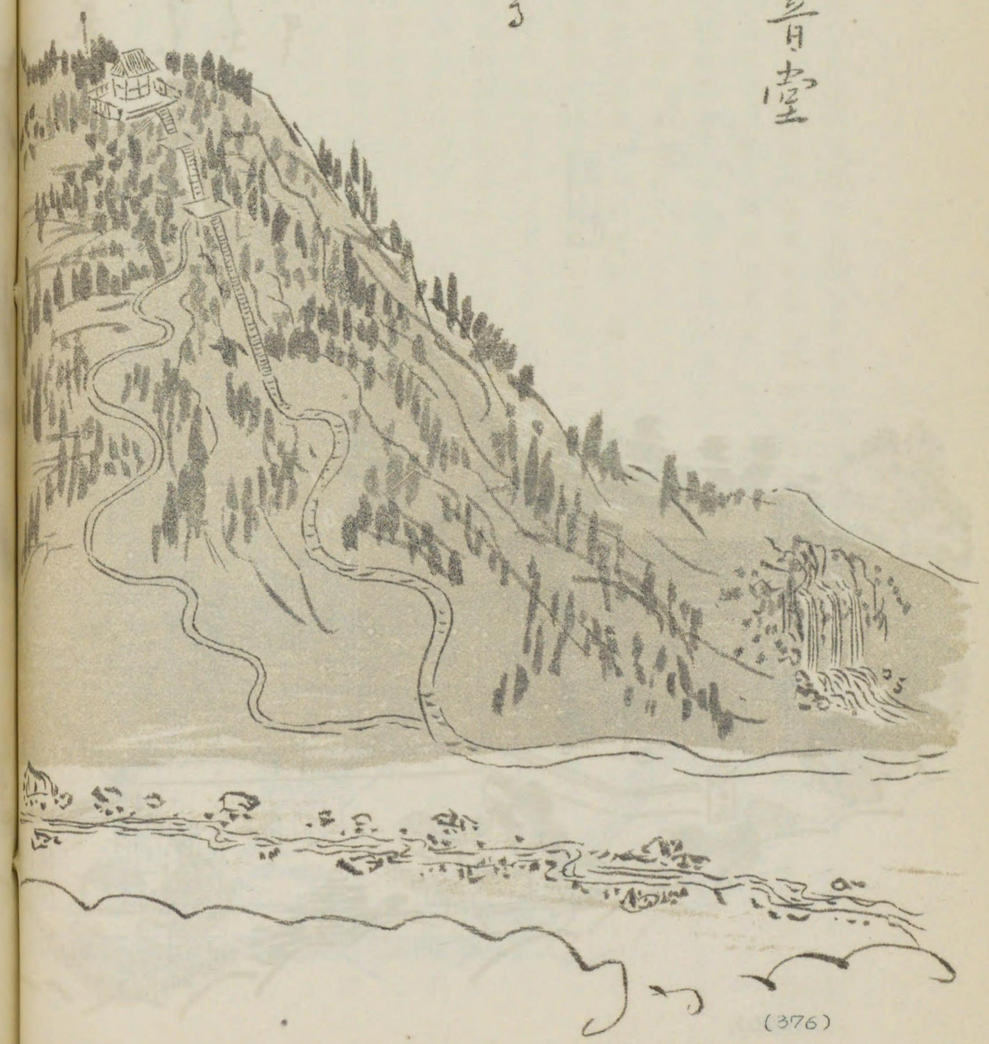
ゆうかむの
中ふる雨
雪おろす

三好
信文



坂東村観音堂

いにしへの
ゆかりとまるる
山のこゝ
武呂



左明かにせり此鐘今永尾山観音堂に在鋳銘にして実に銅色年歴玄経たり長竜頭まて凡三尺二寸口径凡二尺許鑄銘にして文字置上に鋳たり大観進行範と有は熊野の行快の父世東鑑抑に云ふ行快は行範の一男六条廷尉源為義の外孫なりとありおもふに竹谷及ひ蒲形は元暦年中には熊野山領にてありし故その因みをもて葉勝の鐘も熊野の別当行範大勧進となりて当院に寄付せしものならん因に云熊野別当湛増は藤原実方卿の後胤と云ひ傳ふ実方の子別当長快其子湛増一説実方の子恭救父の郷と同しく奥州名取郡岩村郷に配流なり実方卿卒し賜ふて飯京紀州熊野の神官三山の別当となる其子救眞別当子四人本宮新宮若田田辺と四家となる新宮家傳説按するに実方卿子長快熊野別当湛快別当湛増別当湛全別当湛祐別当原湛別当と相続す一説実方の嫡家は別当実方院なりと云ふと見ゆ右は伊勢軍記巻に見へたり

鐘銘

三河國葉勝寺堆鐘　承元二年五月日

大工願主金剛佛子永範　改寛喜丁卯三日

大勧進金剛佛子行範

大衆並壇山衆寺

古城跡

柏原村に在二葉松に云鵜殿一巷松平勘八とあり又伊藤東涯先生の詩集苔に云鵜殿碣州碑銘に

君諱長春字和郷姓鵜殿氏初称民部後称大隅世為因候宰食邑因州浦冨其先出自中将藤実方実方五世孫為熊野別当湛増湛増之子某始屋新宮鵜殿邑因氏焉其後移三州蒲形為州之臣族兼食新宮其後裔長忠居西郡柏原城隷今川氏麾下後奉仕東照宮とあり

竹屋里

東海路右の方形原道に在当村及蒲方庄は往昔俊成卿開発の地にして其後紀州熊野山領となる其は東鑑に見へて前の俊成卿屋敷の所に挙く披き見るへし当村の南いらご崎にて熊野別当行快米穀を舟積して海賊に出逢し事古今著聞集に見えたり思ふに俊成卿の娘始め此行快の妻たり前の薬勝寺古鐘の銘に大勧進行範と見ゆ此人行快の父なり斯れは行快当村を領して其収納を船積し歸郷の折から伊良湖崎にて海賊に遇ひしと見ゆ尚伊良湖のところ合せ見るべし

三河名所歌合竹屋の里

夫木雑十三　みどりなる色もかはらでよのつねに　藤原朝臣道経

同　いくよかへぬる竹屋の里

すみよしの松のたぐひとおもはばや　琳賢法師

そまにもよせぬ竹のやのさと

城趾

同村いづみと云畑に在当城の澄觴詳ならす松平和泉守信光の男弥七郎守家当所に住すと刪補松三河堤等に見ゆされと文亀元年額田郡大樹寺法度書又住居記又出生記等には竹屋弥七郎秀信とあり当家を世に竹屋松平と称す後同國賀茂郡牡牛に移りて和泉守と号す三河堤和泉守より三代の孫備後守清善三葉松には松平玄蕃允清善息備後守清宗と在武德集成天文十八年安祥軍の条に松平の御門葉竹谷玄蕃清善又住居記に弥七郎秀信同備中とあり又武德集成元亀三年の条に松平備後守清善は竹谷の領知を其嫡子玄蕃允清宗に譲り退隠の身と虽も宇都に趣き云々とあり此清善は今川家に隨従せしと見ゆ藩翰譜に云清善初め今川に従ひ一人の娘を質として吉田城に納る德川今川不快の後彼質を捨て德川の味方に参る小原肥前守城主田大に怒て清善の娘をとつて吉田城の辺にて串刺にして捨てけりとあり此時今川家に叛きて味方と成し也

其子備後守清宗武德集成永禄十二年竹谷の松平玄蕃頭清宗懸川の加番を眞乗に代て新板の辺塩井原の砦を守り功を為す故遠州の内二張菅谷亀甲の三邑を加恩せらる又家忠日記に永禄六年松平備後守清宗は竹の谷の城に在

其子玄蕃允家清藩翰譜十一に云玄蕃允源家清は故備後守清善の孫備後守清宗の子なり始め和泉入道殿の二男和泉守より清善に至りて同國竹谷に移りて竹谷与次郎と名乗しより世人竹谷の松平とは申けり又武德集成に永禄四年竹谷の松平玄蕃頭家清とあり又三河堤に云和泉守守家より六代の裔孫玄蕃允家清東照宮に奉仕して勲功ありゆへに天正十八年武州

八幡山城一万石を賜ふ又慶長五年関ヶ原の役に軍功ありて同六年三州吉田城三万石を賜ふ
武徳集成には四万石とあり同書（六十ノ十九丁）に云慶長十七年十一月大十二日竹の谷の松平民部太輔
家清当度卒す其子なし兼々祖父備後守清宗隠居料三千石を以て其次男内記清定に授け賜ん
事を願望せしが慶長十巳己歳十一月十日六十八歳にして清宗歿し内記も亦同年十二月十一
日廿一歳にして死去せしかば今度民部太輔が領知三州吉田四万石を以深溝松平又八郎に賜
ふとあり是は父子三代忠死せし恩録なり彼又八郎が旧領深溝一万石の内五千石を以て家清
が弟庄次郎清昌に賜り竹谷松平の家を建られ則玄蕃と改むとそ
軍物語に云永禄四年竹谷城主松平玄蕃が居住へ西郡上の郷鵜殿八郎左エ門同弟四郎五郎人
数を催し攻来る既に城際まで寄たり城中に世に隠れなき大力下山正善入道得たり賢しと一
矢射けるに先手の將のすねに射込で大音聲にて城中より笑へはうつぶきて其矢を拔んとす
る処を亦二の矢にてボンノクボの処より眴中に射込是より鐚太刀打になりて戰ひけるが正
善が弓勢に恐れて敵退きけり

若一王子権現社

同村（宇の王子と云ふ処）に在り例祭九月十五日竹谷柏原両村の産土神なり神主稲熊氏神名帳集説に云
従五位上竹谷天神坐宇飯郡とあり恐くは当社ならん柳当社を若一王子権現と称しけること
何れの頃にかあらん未詳にせず正徳五年に鑄たる当社の鐘銘に東鑑に云々とありて彼復為
神領所以鎮若一皇子宮令稲熊氏守奉之号村皇子云々と見へたり

六本松

西尾古老傳に云竹谷江端の門六本松と云地あり神君御幼少の時此所より御舟にめされ駿州
に往きたまふ此時戸田氏駿州に往かずして尾州の織田家にともないたてまつりぬ

都川　同村東の入口に在

○（陽成卿都川の歌はなき故）

山伏塚　同村に在由縁未詳

矢問塚　同村に在何れの時の軍にや此所より遠矢を以て城へ射たりし所なりと土人の説な
り

松平主水墓　同村岩崎と云山の半腹に在

竜若塚　同村主水侯の墓の下畑の中に在由縁未詳一に姫塚ともいふ

東光山西福寺

東海路右の方形原道右に在西迫村に在東本願寺派なり

本尊　阿弥陀如來　立像凡一尺八寸

藥師如來　立像凡一尺七寸五分

当寺縁起に云開基東光坊円澄は慈覚大師の直弟にて即天台宗の碩德なり座主慈覚大師貞
観六甲申七十一歳にして逝去し賜へは兼て御紀念として御彫刻ありし藥師如來を負て当
國へ下り西ノ郡門田郷に一宇を造営して安置す時に人皇五十七代　陽成院天皇の御宇に

戀松原
上之郷
赤日子社
竹屋里
王子社
都川
瘤松
赤日子社
上ノ郷
戀松原

王子社
都川
竹屋里

和戌申年とかや円坊号を以て里人と共に東光坊と称し数代相続せり又十四代光円の時大納言（○京本大納言の三字貼り消したる傍にてあり）傳へ聞しめして歸依の余り当所に於て五十余石に御詠歌一首を添て薬師如來へ寄付し賜ふ其砌保元三年寅歳門田の佛閣を改めて当所あらこへ移り東光山円澄院西福寺と呼り承久三年八月の比祖師聖人当國柳堂に御逗留ありて教化の砌り当宗に改宗せり二十九代宗円の時に至り御堂寥落して相続なり難けれは大永六年額田郡六名弘願寺同郡針崎勝蔓寺へ預け佛閣僅に相続せしとなり又三十代了円の代元亀三年あらこより今の所へ移りしと見へたり

太皷岩

東海路右形原道に在鹿島村に在当村北の方山中にありて遠見すれは太皷を台に載せし如く見るなり

鹿島明神社　同村に在当一村の産土神なり

亀岩　同島に在其形亀の如く見ゆ故に此名あり

芦若足跡　同村の南小島の内に在由縁未詳

鴨の喰上

鴨の喰上と云は總て此辺の海濱に在其は数千の鴨海上に群をなして一文字に列をかまへ魚を逐て磯辺に寄る魚是が為に途を失ふて醉るが如く浅き処に追上て是を喰ふ諸人之を見付て其魚を拾ふに不意に数千の鮮魚を得る事ありとぞ

三ケ郷　三ケ郷とは戸金平地一色此三ヶ村を云

形原郷

宮内庄と云総國風土記に云形原郷又和名抄に当郡形原（加多乃波良）又延喜式に形原神社あり又風土記に公穀六百八十二束三毛田假粟五百六十三丸とあり当郷今に繁栄して民家軒を並べて立續けり

甚兵衛塚　渡辺政香云形の原上の間カシコ坂と云峠に大岩大松有甚兵衛塚と云

形原神社

同村に在今春日大明神と称す当社は延喜式に載る所の当郡六社の其一也

祭神　風土記に云祭る処埴安神

風土記に云形原神社圭田（五十代）廿五束所祭埴安神（姫）神也　皇極天皇元年壬寅十二月奉圭田加神礼とあり扨此社古くは山下東南の方平地に坐して厳しき御社なりしを松平紀伊侯領主の時今の山上に移し奉りて其跡畑となしけると云り今本殿の跡なりとて聊荒地ありて又鳥居の跡なりとて高二尺余の石にしめ縄ありなど官社私考に見へたり

○三州宝飯郡形野原大明神へ高二石所奉寄進之者也如件　元和六庚申年壬十二月七日　松平庄右エ門宗勝　神主殿

古城跡

同村に在稲生（イナウ）城と云栗原氏水雄岡志皇七世義綱子七人云々義清承保二江州に生又其子武田冠者刑部三郎久安五年卒其子三河方原下司形原二郎師光同弟方原三郎成光とあり二葉松に

云頼朝公御時代にも在城方原下司次郎師光住之とあり又西浦山無量寺の縁起には三河守範頼築之と見へ又分脉系譜を考るに師光は新羅三郎義光の孫三河国方原下司とあれば其頃より当地に城地の在しことは顕然なり其後年歴たちて額田郡岩津の松平和泉守信光第五の御子佐渡守定嗣始めて城を築きて此に住す世に形原松平と称す（三河堤）又御年譜附尾に明応九年興嗣彦太郎と号す三河形原城主なり淺井氏筆記に云岩津松平信光の御子又七郎後佐渡守岩津より形原に移りて城を築き居住す又三河聞書集に云岡崎城主は松平紀伊守光重也是に三男あり惣領は左馬允親貞次男彈正左衛門信貞三男左近将監定光と云光重後入道して宗全と号す岡崎城を嫡子左馬允に譲り宝飯郡形原城に移り明応三年甲五十月廿八日卒すと見へ又大樹寺法度書に云形原左近将監定光とあり又住居記又出生記等に松平左近将監貞信とあり

次に掃部光重　長享戊申七月廿二日卒す春秋八十五歳

次に薩摩守某

次に紀伊守光忠

次に紀伊守家廣　武徳集成（巻一）天文十二年九月の条に岡崎の城主廣忠君夫人の妹は三州宝飯郡形原松平紀伊守家廣が室たり然れとも廣忠君が室を離縁し賜ふ故家廣其妻を帰し信元と義絶す時に信元怒て形原より送りの郎従三人を害し奴隷等が髪を悉く断て追返す爰に於て岡崎の夫人賢慮ふかくおはしける故送りの士危殆をのがるゝ事を嘆美す藩藩輯譜

右に同じ家忠日記同上